

平成 29 年度 九州栄養福祉大学・大学院 教員情報

【食物栄養学部 食物栄養学科】・【健康科学研究科 健康栄養学専攻】

キタ タイゾウ
喜多 大三

KITA Taizo 学長補佐（食物栄養学部担当）・教授

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・化学 ・有機化学 ・栄養薬理学Ⅰ、栄養薬理学Ⅱ ・キャリアデザイン ・専門ゼミナールⅡ ・卒業論文 ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ <p>[九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康科学特別講義 ・健康科学研究法特論講義 ・薬理学特論Ⅰ、薬理学特論Ⅱ <p>[東筑紫短期大学 美容ファッションビジネス学科 ファッション・ビジネスコース]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医薬品の基礎知識 <p>[東筑紫短期大学 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬理学 	
専 門 分 野	<p>■薬理学</p> <p>■栄養薬理学</p>	
最 終 学 歴	長崎大学大学院 薬学研究科 製薬化学専攻（昭和 56 年 3 月 修士課程修了）	
学 位	医学博士 奈良県立医科大学 乙第 530 号（平成元年 7 月）	
職 歴	<p>大分医科大学附属病院 薬剤部（昭和 56 年 4 月～昭和 57 年 6 月）</p> <p>奈良県立医科大学 助手（薬理学教室）（昭和 57 年 7 月～平成 13 年 9 月）</p> <p>NJ 州立ラトガース大学 客員研究員（神経毒性学）（平成 5 年 11 月～平成 7 年 10 月）</p> <p>第一薬科大学 助教授（薬理学教室）（平成 13 年 10 月～平成 16 年 3 月）</p> <p>国立精神・神経センター精神保健研究所客員研究員（平成 16 年 6 月～平成 17 年 3 月）</p> <p>岡山大学医学部・歯学部附属病院 薬剤部（平成 17 年 4 月～平成 18 年 3 月）</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授（平成 18 年 4 月～現在に至る）</p> <p>九州栄養福祉大学大学院 食物栄養学研究科 教授（平成 18 年 4 月～平成 24 年 3 月）</p> <p>九州栄養福祉大学 学生部長（平成 22 年 4 月～平成 26 年 3 月）</p> <p>東筑紫短期大学 学生部長兼任（平成 23 年 4 月～平成 26 年 3 月）</p> <p>九州栄養福祉大学大学院 健康科学研究科 教授（平成 24 年 4 月～現在に至る）</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 学部長（平成 26 年 4 月～現在に至る）</p> <p>東筑紫学園理事（平成 28 年 4 月～現在に至る）</p> <p>九州栄養福祉大学 学長補佐（平成 29 年 4 月～現在に至る）</p>	
教育上の業績	<p>○学長補佐として学長を補佐し、本学の建学の精神である「筑紫の心」に沿った人格教育を根本に据え、その上で管理栄養士に必要な専門教育を施し、この二つの教育をしっかりと噛み合わせる学びを啓発し、「食を通して福祉を実現する管理栄養士」、「健康生活の番人（食の番人）」の育成に励んでいる。</p> <p style="text-align: right;">（平成 26 年 4 月～現在に至る）</p>	

	<p>○学部長として、建学の精神である「筑紫の心」に沿った人格教育を根本に据え、その上で管理栄養士に必要な専門教育を施し、この二つの教育をしっかりと噛み合わせる学びを啓発し、「食を通して福祉を実現する管理栄養士」の育成に努めている。 (平成 26 年 4 月～平成 29 年 3 月)</p> <p>○学生部長として“建学の精神”の学生・教職員への深化を図るため、学内行事への積極的な参加を奨励している。また、学内オリエンテーション等において、“お掃除門”(学長著)をテキストとして講義をおこなうことにより、本学の教育理念の基本である“筑紫の心”の啓発に努めた。 (平成 22 年 4 月～平成 26 年 3 月)</p> <p>○大学院指導教員として大学院講義並びに修士論文に関する研究を担当し、修士論文作成および学会でのプレゼンテーションなどの指導を通じて、大学院生の創造豊かな研究・開発能力と高度の専門的な職業を担う基礎的能力の向上に取り組んでいる。 (平成 18 年 4 月～現在に至る)</p> <p>○「専門ゼミナール」の薬理学の専門ゼミナール授業において、ゼミ学生を対象として専門英語論文の抄録を基本に専門英語の読解と内容理解力の養成、卒業研究の指導、論文作成およびプレゼンテーションの方法を指導し、学部学生の学士力の向上に専心している。 (平成 18 年 4 月～現在に至る)</p> <p>○「薬理学」および「管理栄養士演習 I・II」における「薬と疾病」の講義を担当し、学部学生の学士力および臨床現場における実践力の向上に励んでいる。 (平成 18 年 4 月～現在に至る)</p> <p>○NST などのチーム医療の重要性が高まる状況において、薬物治療や医薬品の知識が重要になってきている。管理栄養士課程に学ぶ学生向けに、「栄養薬理学」の成書を近隣の管理栄養士養成校の先生方と共著し、建帛社から出版した。 (平成 28 年 4 月)</p>
<p>主な研究活動</p>	<p>(1) 食品摂取による自律神経バランスの計測とその食品機能評価の基礎研究</p> <p>【原著論文 1】 健常成人における緑茶の旨味成分テアニンの自律神経バランスへの影響 (第 3 報) —計算負荷による自律神経バランス変動に対する減弱効果— 喜多大三、柳原延章、佐藤教昭、後藤幸生 (2016) 九州栄養福祉大学研究紀要 13、1-10.</p> <p>【原著論文 2】 健常成人における緑茶の旨味成分テアニンの自律神経バランスへの影響 (第 2 報) —計算負荷による自律神経バランスに関する予備的研究— 喜多大三、柳原延章、佐藤教昭、後藤幸生 (2015) 九州栄養福祉大学研究紀要 12、145-155.</p> <p>【原著論文 3】 健常成人における緑茶の旨味成分テアニンの自律神経バランスへの影響 喜多大三、柳原延章、佐藤教昭、後藤幸生 (2014) 九州栄養福祉大学研究紀要 11、155-166.</p> <p>【シンポジウム】第 90 回 日本薬理学会年会 (2-S-14) 座長：柳原延章、喜多大三 「病態生理学および薬理学研究における自律神経バランスの新しい評価システム」 健常成人における緑茶の旨味成分テアニンの自律神経バランスへの影響 喜多大三、柳原延章、佐藤教昭、後藤幸生 (平成 29 年 3 月 16 日、長崎市)</p> <p>(概要) 本研究は、後藤幸生氏(福井医大名誉教授)らが開発した「自律神経機能のレーダーチャート式バランス評価法」(自律神経, 35 巻 4 号 410-418 頁, 1998)を用いて、実際の食品摂取後の自律神経バランス測定および唾液によるストレスマーカーによる抗ストレス効果の測定を行い、データを集積し解析することにより食品のもつ「機能性」と「抗ストレス性」の機能評価の一助にならんことを目標としている。①大豆や緑茶等の食品摂取後の自律神経(交感神経/副交感神経)バランスへの影響を検討する、②大豆や緑茶等の食品摂取 30 分前後の唾液を採取し、ストレス指標であるコルチゾール、アミラーゼおよびクロモグラニン A を測定し、自律神経バランスのパターンと比較検討する、③大豆や緑茶食品等に含有される機能性成分による in vitro 及び in vivo 投与におけるカテコールアミン動態への影響について検討を加え、食品機能評価の基盤研究を行う(本研究は、産業医科大学薬理学講座の柳原延章教授との共同研究であり、平成 26～28 年度科学研究費助成を受け、研究内容は、平成 29 年度まで延長された)。</p>

(2) 食材および食品に含まれる化学物質の薬理・生理活性とその機能に関する研究

(総説)

Protective effects of phytochemical antioxidants against neurotoxin-induced degeneration of dopaminergic neurons. Taizo Kita, Masato Asanuma, Ikuko Miyazaki and Mika Takeshima. J Pharmacological Sci 124, 313-319 (2014). 日本薬理学会の欧文機関誌 J Pharmacological Sci からの Invited review article.

近年、スルファラファン、カテキン、バイカレインなどのフィトケミカル類は、メタンフェタミン、L-dopa および6-OHDA などによるドパミン神経毒性に対して神経保護作用を発現することが報告されている。これらフィトケミカル類の神経保護作用について概説した review である (岡山大学大学院神経情報学 浅沼幹人准教授らとの共同執筆)。

【原著論文 1】

食材および食品に含まれる化学物質の生理活性とその機能について—鎖状および樹枝状カチオン性ペプチドのリン脂質膜との相互作用および抗菌活性。

青柳東彦、平野 輝、畠山智充、安東勢津子、喜多大三、浅沼幹人 (2010)

九州栄養福祉大学研究紀要 7、1-11.

【原著論文 2】

食材および食品に含まれる化学物質の生理活性とその機能について

—アセチル-L-カルニチンの培養ドパミン神経およびグリア細胞系への作用—。

喜多大三、青柳東彦、浦添夏帆、浅沼幹人、宮崎育子、安東勢津子 (2010)

九州栄養福祉大学研究紀要 7、13-27.

【原著論文 3】

食材および食品に含まれる化学物質の生理活性とその機能について

—蛍光基質を用いた数種可食性キノコ中のアンジオテンシン変換酵素阻害物質の検索。

青柳東彦、塚本有未代、古野千穂、安東勢津子、松原公紀、宮崎育子、浅沼幹人、喜多大三 (2009)

九州栄養福祉大学研究紀要 7、1-11.

【原著論文 4】

食材および食品に含まれる化学物質の生理活性とその機能について

—ドパミン神経培養系におけるフィチン酸の作用—。

浦添夏帆、村田麻衣子、青柳東彦、安東勢津子、宮崎育子、浅沼幹人、喜多大三 (2009)

九州栄養福祉大学研究紀要 6、75-86.

(3) 緑茶の旨味成分テアニン (L-theanine) のアストログリア細胞系における細胞保護効果に関する研究

【原著論文 1】

L-theanine protects against excess dopamine-induced neurotoxicity in the presence of astrocytes.

Takeshima M, Miyazaki I, Murakami M, Kita T, Asanuma M (2016)

Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition, in press.

【原著論文 2】

お茶の旨味成分テアニンの培養アストログリア細胞における細胞保護効果。

喜多大三、浅沼幹人、宮崎育子、竹島美香 (2013) 九州栄養福祉大学研究紀要 10、179-191.

【原著論文 3】

テアニンの中枢作用に関する文献的考察。

喜多大三、浅沼幹人、宮崎育子、竹島美香(2012) 九州栄養福祉大学研究紀要 9、45-58.

【原著論文 4】

L-テアニンのグリア細胞に対する保護作用に関する研究

—アストロサイトにおける L-テアニンによる抗酸化保護作用の賦活—

喜多大三、浅沼幹人、宮崎育子、竹島美香(2011) 九州栄養福祉大学研究紀要 8、43-53.

	<p>(4) 培養ドパミン神経細胞における L-dopa 添加によるドパミンキノン毒性発現に対するバйкаレインの細胞保護作用について</p> <p>【原著論文 1】 Protective effects of baicalein against excess L-DOPA-induced dopamine quinone neurotoxicity. Mika Takeshima, Mariko Murata, Natsuho Urasoe, Shinki Murakami, Ikuo Miyazaki, Masato Asanuma, <u>Taizo Kita</u>, Neurological Research 33, 1050-1056, 2011.</p> <p>【原著論文 2】 フラボノイド化合物の培養ドパミン細胞への作用-バйкаレインのドパミン神経毒性に及ぼす保護効果- 竹島美香, 染谷 恵, 村田麻衣子, 喜多大三(2008) 九州栄養福祉大学研究紀要 5, 41-53.</p>
	<p>(5) メタンフェタミン神経毒性発現機構に関する研究</p> <p>【著書】 Dopamine-induced behavioral changes and oxidative stress in methamphetamine-induced neurotoxicity. In New concepts of psychostimulant-induced neurotoxicity, <u>Kita T</u>, Miyazaki I, Asanuma M, Takeshima M and Wagner GC (2009) a volume of International review of neurology 88, 43-64, Academic Press.</p> <p>(概要) 神経生物学の国際レビュー誌 (edited by Hari Shankar Sharma) よりの依頼レビュー。本レビューは、最近のメタンフェタミンによる神経毒性発現機構研究の新展開についてまとめた内容であり、ヒトにおける神経毒性(Wagner 担当)、神経毒性機構におけるドパミンキノンの関与(浅沼担当)および行動毒性と神経毒性発現との関係(喜多担当)含めて紹介している。特に、メタンフェタミンによる神経毒性機構におけるサイトカイン類、毒性起因物質、細胞体封入体由来タンパク質などの関与、グリア細胞などの関与、アポトーシスの発現および神経毒性発現による異常行動である自傷行動について、各種諸因子との関係を概説している。 (NJ 州立大学ラトガース Prof.Wagner, GC、岡山大学大学院神経情報学 浅沼幹人准教授との共同執筆)</p> <p>【原著論文 1】 Astrocyte-derived metallothionein protects dopaminergic neurons from dopamine quinone toxicity. Miyazaki I, Asanuma M, Kikkawa Y, Takeshima M, Murakami S, Miyoshi K, Sogawa N, <u>Kita T</u>(2011) Glia. 59: 435-51.</p> <p>【原著論文 2】 Protective effects of interferon-gamma against methamphetamine-induced neurotoxicity. Hozumi H, Asanuma M, Miyazaki I, Fukuoka S, Kikkawa Y, Kimoto N, Kitamura Y, Sendo T, <u>Kita T</u>, Gomita Y (2008) Toxicol Lett. 177: 123-9.</p> <p>【原著論文 3】 Oxidative stress in methamphetamine-induced self-injurious behavior in mice. Mori T, Ito S, <u>Kita T</u>, Narita M, Suzuki T, Matsubayashi K, Sawaguchi T (2007) Behav Pharmacol. 18: 239-249.</p> <p>【原著論文 4】 Effects of mu-, delta- and kappa-opioid receptor agonists on methamphetamine-induced self-injurious behavior in mice. Mori T, Ito S, <u>Kita T</u>, Narit, M, Suzuki T, Sawaguchi T (2006) Eur J Pharmacol. 17: 532: 81-7.</p>
<p>主な社会活動</p>	<p>・北九州市民カレッジ講師「緑茶パワーで健康生活」(研修会) 主催 北九州市教育委員会 (平成 28 年 1 月) 北九州市民カレッジ講座では、緑茶の歴史、効能、入れ方などについて講義をおこなった。主な講義内容は、中国、日本への緑茶の歴史とその変遷、緑茶成分であるカテキンやテアニンの近々の研究報告などを概説した。また、参加者の皆様に、玉露、煎茶、碾茶などの入れ方の講習と試飲およびゼミ学生が作った抹茶ケーキなどの試食をしてもらい、緑茶の深みのある美味しさを実感していただいた。</p>

	<p>・地域健康フェアへのボランティア活動への参加 (平成 19 年 10 月～現在に至る)</p> <p>医療法人共愛会戸畑リハビリテーション病院で開催させる地域の住民や患者様を対象とした健康フェアに、ゼミ学生や大学院生と共に参加している。この健康フェアでは、健康増進のための身体、血圧、骨強度、脳年齢などの各測定が実施されており、参加学生は同フェアに参加された方々に対して、各測定ブースでのお手伝いや健康維持のための食事内容の説明などのボランティア活動をおこなっている。</p>
<p>所属学会</p>	<p>日本薬学会会員 (昭和 56 年 4 月～現在に至る)</p> <p>日本薬理学会会員 (昭和 57 年 4 月～現在に至る)</p> <p>日本神経精神薬理学会会員 (昭和 57 年 4 月～現在に至る)</p> <p>米国神経科学学会会員 (平成 6 年 5 月～現在に至る)</p> <p>日本薬理学会評議員 (平成 9 年 4 月～現在に至る)</p> <p>日本神経精神薬理学会評議員 (平成 13 年 1 月～現在に至る)</p> <p>日本栄養改善学会会員 (平成 19 年 4 月～現在に至る)</p> <p>日本経腸静脈栄養学会 (平成 27 年 4 月～現在に至る)</p> <p>日本病態栄養学会 (平成 27 年 4 月～現在に至る)</p> <p>日本健康・栄養システム学会 (平成 28 年 4 月～現在に至る)</p>

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育原理 ・教育職の研究 ・教育制度論 ・特別活動の理論と方法 ・生徒指導の理論と方法 ・教職実践演習 (栄養教諭) <p>[東筑紫短期大学 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導の理論と方法 ・教職実践演習 (栄養教諭)
専門分野	<ul style="list-style-type: none"> ■教育方法 ■教師教育
最終学歴	京都教育大学大学院 教育学研究科 学校教育専攻
学位	修士 (教育学)
職歴	<p>宇治市立菟道小学校 校長 (平成 18 年 4 月～平成 22 年 3 月)</p> <p>京都文教短期大学 非常勤講師 (平成 22 年 4 月～平成 25 年 3 月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 教授 (平成 25 年 4 月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 学生部長 (平成 26 年 4 月～現在に至る)</p> <p>東筑紫短期大学 学生部長 (平成 28 年 4 月～現在に至る)</p>
主な研究活動	<p>【論文】</p> <p>「教育鑑識眼による教育評価の検討—E.W.アイズナーに焦点を当てて—」単著 平成 24 年 1 月 京都教育大学大学院 (修士論文) pp.1-56</p> <p>(概要)</p> <p>本研究は、E.W.アイズナーがディシプリン中心主義を乗り越えて鑑識眼提起に至ったのかそれとも両者は共存し合うものかを明らかにし、教育鑑識眼による評価が教育評価の中にどのように位置付くものかを考察したものである。その結果、アイズナーはディシプリン中心の美術教育への傾倒に代表されるように目標との関連で評価する重要性を認めその立場を保持しつつ、その限界も見出してそれを補強するものとして教育鑑識眼概念を提案し、併せて総合的な評価法も目指していたことを見出すことができた。</p> <p>【論文】</p> <p>「小学校における総合算数科の試案」単著 平成 24 年 3 月 京都文教大学 (臨床心理学部紀要『心理社会的支援研究』) 第 2 集、pp.47-53</p> <p>(概要)</p> <p>数学の入門期に於いては人間を取り巻く生活や自然との関係性を強め数学に対する興味を高めることは学校教育のみならず、生涯学習の視点に立っても有益に働くことが期待できる。この試案は、数学の良さや有用さを学習者の心に呼び戻し、人間の歴史や自然や生活の中での数学の役割に目を向けさせることを意図している。その内容は、数学の概念や知識を深化させる内容、数学が自然を読み解くために使用されている内容等から構成されている。</p> <p>【論文】</p> <p>「教育政策の実施過程に関する一考察」単著 平成 25 年 12 月 九州栄養福祉大学 (九州栄養福祉大学研究紀要第 10 号)、pp.229-238</p> <p>(概要)</p> <p>本研究は、教育政策の実施過程における教育政策形成・実施の各段階を繋ぐ結節点に注目し、その接続状況の様態に焦点を当てて考察したものである。中でも中央政府と実施機関の間に地方政府が介在する場合とそうでない場合とで、中央政府による教育政策の伝達の様態に特徴や差異があるのかどうか、地方政府の介在の有無は、教育政策具体化のための情報の質と量に影響を及ぼすのか、また、実施機関がその組織の特徴や環境を生かした独自の教育政策実施計画を策定するに当たって、如何なる機会に如何なる方法により必要な情報を収集していったかを明らかにしたものである。</p>

	<p>【学会発表】 「教育鑑識眼による教育評価の検討—E.W.アイズナーに焦点を当てて—」 単著（再掲） 平成23年11月教育目標・評価学会（奈良大会） 〈主催〉 目標・評価学会 〈開催場所〉 奈良教育大学 〈開催年月日〉 平成23年11月20日</p> <hr/> <p>(概要) E.W.アイズナーはディシプリン中心の美術教育への傾倒に代表されるように目標との関連で評価する重要性を認めその立場を保持しつつ、その限界も見出してそれを補強するものとして教育鑑識眼概念を提案し併せて総合的な評価法も目指していたことが鑑識眼概念の萌芽期の研究過程を辿る中で見出すことができた。</p>
<p>主な社会活動</p>	<p>・福岡県立小倉西高等学校 学校関係者評価委員会委員 (平成26年5月～平成27年3月)</p>
<p>所属学会</p>	<p>目標・評価学会 (平成22年6月～現在に至る) 日本教師教育学会 (平成25年6月～現在に至る)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・解剖生理学Ⅰ、解剖生理学Ⅱ ・解剖生理学実習 ・解剖生理学実験 ・食健康センター活動 (演習) ・専門ゼミナールⅡ ・卒業論文 ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ <p>[九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康科学研究法特論演習 ・解剖生理学特論Ⅰ、解剖生理学特論Ⅱ 	
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■解剖学 ■組織学 ■動物発生学 	
最 終 学 歴	東京教育大学 理学部 生物学科動物学専攻	
学 位	歯学博士 (岩手医科大学歯学部) 博士 (理学) (東北大学理学部)	
職 歴	岩手医科大学歯学部助手 (口腔解剖学第一講座) (昭和51年4月～昭和58年3月) 岩手医科大学医学部研究副手兼任 (解剖学第二講座) (昭和58年4月～平成4年3月) 岩手医科大学歯学部嘱託講師 (平成4年4月～平成12年3月) 岩手医科大学歯学部講師 (平成12年4月～平成21年3月) 九州栄養福祉大学食物栄養学部教授 (平成22年4月～現在に至る) 九州栄養福祉大学大学院 健康科学研究科長 (平成25年4月1日～現在に至る) 九州栄養福祉大学食物栄養学部食物栄養学科長 (平成26年4月1日～現在に至る) 九州栄養福祉大学食物栄養学部長 (平成29年4月1日～現在に至る)	
教育上の業績	○PBL チュートリアル教育の実践 (平成15年～平成21年) 少人数グループによる討論形式の問題解決型授業において実績をあげた。 ○岩手医科大学における OSCE 委員 (平成17年～平成21年) ○岩手医科大学における CBT 委員 (平成17年～平成21年) OSCE の運営、および CBT に対応した問題作成と授業に実績を残した。 ○東京教学社より管理栄養士養成過程向けの教科書「イラスト解剖生理学 (共著)」を出版した。 (平成24年)	
主な研究活動	<p>【学術論文等】</p> <p>「食材を用いた解剖生理学実験教育 -マアジ、ホタテガイ、クルマエビを用いて-」 大澤得二、松元千恵美 九州栄養福祉大学研究紀要 7:65-79(2010)</p> <p>「電顕トモグラフィによる結合組織線維の3D観察」 大澤得二、石田欣二、遠山稿二郎 医学生物学電子顕微鏡技術雑誌 25(1)20-22(2011)</p> <p>「Development of the lens capsule in Rana temporaria ornativentris.」 Tokuji Osawa 九州栄養福祉大学研究紀要 8:55-68(2011)</p> <p>「解剖生理学教育に相応しい実習用顕微鏡を考える -日本の実習用顕微鏡の歴史-」 大澤得二 九州栄養福祉大学研究紀要 8:69-88(2011)</p> <p>「アフリカツメガエル変態時における視神経の形態変化 -髄鞘の崩壊と軸索の変形過程-」 大澤得二、松浦絵里、小笠原勝利、花坂智人、石田欣二、遠山稿二郎、末松貴史、和泉伸一 医学生物学電子顕微鏡技術雑誌 26(2) 49-52 (2012)</p>	

<p>「Xenopus 変態過程における視神経有髄神経線維の髄鞘の崩壊過程」 大澤得二、松浦絵里、小笠原勝利、花坂智人、石田欣二、遠山稿二郎、末松貴史、和泉伸一 九州栄養福祉大学研究紀要 9:59-65(2012)</p>
<p>「アフリカツメガエルの写真発生段階表」 大澤得二 九州栄養福祉大学研究紀要 9:67-78(2012)</p>
<p>「Lamina lucida を欠くラット口唇皮膚の毛根の基底膜 —特に脱毛後の変化について」 大澤得二 九州栄養福祉大学研究紀要 10:199-206(2013)</p>
<p>「キノコ (Cucumaris frondosa) に見られた多様な基底膜」 大澤得二 九州栄養福祉大学研究紀要 10:207-215(2013)</p>
<p>「マボヤを用いた解剖生理学実習」 大澤得二、室井由起子、宮崎明日香 九州栄養福祉大学研究紀要 11:167-173(2014)</p>
<p>「キノコ (Cucumaria frondosa) の種々の組織の基底膜に見られた骨格構造 — Yurchenco らのモデルは実在するか」 大澤得二 九州栄養福祉大学研究紀要 12:163-167(2015)</p>
<p>「Ultrastructural changes associated with reversible stiffening in catch connective tissue of sea cucumber」 . Masaki Tamori, Kinji Ishida, Katsutoshi Ogasawara, Tomohito Hanasaka, Yasuhito Takehana, Tatuo Motokawa, <u>Tokuji Osawa</u> PLOS ONE (2016)</p>
<p>「ヒトにおける本質的・基本的構造物であるが、理解が難しいものたち —脊索、神経堤、鰓弓神経— これらをどう教えるか その1. 脊索」 大澤得二 九州栄養福祉大学研究紀要 13:11-21(2016)</p>
<p>【学会発表】</p>
<p>「体壁の結合組織の比較解剖学的研究」 大澤得二、小野寺政雄、野坂洋一郎 第111回日本解剖学会全国学術集会 2006.3.29 相模原 (北里大学)</p>
<p>「体壁の結合組織の比較解剖学的研究」 大澤得二、野坂洋一郎 第38回日本結合組織学会学術大会 2006.5.11 前橋 (群馬大学)</p>
<p>「体壁の結合組織から考えるボディープラン」 大澤得二 平成18年度日本動物学会東北支部大会 2006.8.5 山形 (山形大学)</p>
<p>「体壁の結合組織の比較解剖」 大澤得二 解剖・組織技術研究会 第4回研修会 2006.11.11 盛岡 (岩手医大)</p>
<p>「口腔粘膜上皮の再生」 大澤得二、野坂洋一郎 岩手医科大学先進歯科治療センター 平成18年度ハイテク・リサーチ・プロジェクト研究成果発表会 2006.11.25 盛岡 (岩手医大)</p>
<p>「電顕トモグラフィーによる基底膜の骨格構造」 大澤得二、小野寺政雄、野坂洋一郎 第112回日本解剖学会全国学術集会 2007.3.29 大阪 (大阪大学)</p>
<p>「電顕トモグラフィーによる基底膜の骨格構造」 大澤得二、野坂洋一郎 第39回日本結合組織学会学術大会 第54回マトリックス研究会大会 2007.5.10 東京 (慶応大学)</p>
<p>「基底膜の基本構造—電顕トモグラフィーによる解明」 大澤得二 平成19年度日本動物学会東北支部大会 2007.7.28 秋田 (秋田大学)</p>
<p>「口腔粘膜上皮の再生」 大澤得二、野坂洋一郎 岩手医科大学先進歯科治療センター 平成19年度ハイテク・リサーチ・プロジェクト研究成果発表会 2007.8.4 盛岡 (岩手医大)</p>
<p>「代数的反復法 (SIR) による透過型電子顕微鏡用切片のZ軸方向の情報解析」 大澤得二、小野寺政雄、野坂洋一郎 日本解剖学会第113回全国学術集会 2008.3.29 大分 (大分大学)</p>
<p>「上皮再生の足場となる基底膜の内部構造の3D観察」 —代数的反復法 (SIR) によるZ軸方向の情報解析— 大澤得二、野坂洋一郎 平成20年度ハイテク・リサーチ・プロジェクト研究成果発表会 2008.10.4 盛岡 (岩手医科大学)</p>
<p>「電顕トモグラフィーによるアンカリング・ファイブリルの3D像」 大澤得二、小野寺政雄、藤村 朗、野坂洋一郎 第114回日本解剖学会全国学術集会 2009.3.28 岡山 (岡山大学)</p>

	<p>「電顕トモグラフィによるアンカリング・ファイブリルの3D像」 大澤得二、小野寺政雄、藤村 朗、野坂洋一郎 岩手医科大学歯学会第68回例会 2009.7.4 盛岡 (岩手医科大学)</p>
	<p>「唾液腺と口腔粘膜の加齢、および粘膜再生」 大澤得二、武田泰典、水城春美 平成21年度ハイテク・リサーチ・プロジェクト研究成果発表会 2009.8.1 盛岡 (岩手医科大学)</p>
	<p>「口腔粘膜の再生の足場となる構造」 大澤得二、野坂洋一郎 平成21年度ハイテク・リサーチ・プロジェクト研究成果発表会 2009.8.1 盛岡 (岩手医科大学)</p>
	<p>「走査電顕と電顕トモグラフィによる3D観察の比較」 大澤得二、小野寺政雄、藤村 朗、野坂洋一郎 日本解剖学会第55回東北・北海道連合支部学術集会 2009.9.27 仙台 (東北大学)</p>
	<p>「ナマコ体壁の中空コラーゲン繊維」 大澤得二 日本動物学会第82回大会 2011.9.22 旭川 (北海道大学)</p>
	<p>「アフリカツメガエル変態時における視神経の形態変化 - 髄鞘の崩壊と軸索の変形過程 -」 大澤得二、松浦絵里、小笠原勝利、花坂智人、石田欣二、遠山稿二郎、末松貴史、和泉伸一 医学生物学電子顕微鏡技術学会第28回学術講演会及び総会 2012.5.13 盛岡 (岩手医科大学)</p>
	<p>「アフリカツメガエル変態時における視神経の形態変化」 大澤得二 日本動物学会第83回大会 2012.9.15 大阪 (大阪大学)</p>
	<p>「二種類のナマコ、キンコ (Cucumaria) とマナマコ (Stichopus) の体壁のコラーゲン線維」 大澤得二、松浦絵里、小笠原勝利、石田欣二、遠山稿二郎 医学生物学電子顕微鏡技術学会第29回学術講演会および総会 2013.6.9 横須賀 (神奈川歯科大学)</p>
	<p>「マナマコ (Stichopus) の体壁のコラーゲン繊維：キンコ (Cucumaria) との比較」 大澤得二 日本動物学会第84回大会 2013.9.26 岡山 (岡山大学)</p>
	<p>「イオン液体を用いたゾウリムシのSEM観察」 大澤得二 日本動物学会第85回大会 2014.9.11 仙台 (東北大学)</p>
主な社会活動	<ul style="list-style-type: none"> ・岩手医科大学歯学雑誌のエディトリアル・ボードを務めた。(平成16年4月～平成20年3月) ・日本動物学会東北支部大会の大会長を務めた。(平成20年7月) ・研究者交流の場となる研究会の立ち上げと運営 (平成2年5月～現在に至る) 盛岡市において「もりおか生物科学の集い」を数人のグループで立ち上げ、研究者の交流の場とした。講演会は101回を数えている。この会は各大学に分散している研究者が互いに情報交換をする場となり、また一般市民からも関心を持たれ、期待される会である。 ・理科教育ボランティア 盛岡市子ども科学館におけるボランティア天文観察指導員を行った。また大型店に付属した理科クラブにおいて、微生物の顕微鏡観察指導を行った。日本動物学会東北支部会の市民講座では、主催者として自然観察会を企画運営してきた。北九州市立自然史・歴史博物館「いのちのたび博物館」における児童向けの講座(「サメの解剖」「イカの解剖」など)において解剖の指導を行っている。また、北九州市内の自然観察グループ「G&B (ジオ・アンド・バイオ)」の会員となり、市民向けの自然観察活動を行っている。
所属学会	<p>日本解剖学会 (昭和51年4月～現在に至る) 日本動物学会 (昭和54年10月～現在に至る) 日本発生物学会 (昭和57年2月～現在に至る) 日本理科教育学会 (平成21年7月～現在に至る) 日本生物教育学会 (平成21年7月～現在に至る) 医学生物学電子顕微鏡技術学会 (平成22年5月～現在に至る) 日本栄養学教育学会 (平成24年2月～現在に至る) 日本健康・栄養システム学会 (平成28年5月～現在に至る)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・細菌性食中毒学 ・疾病の成り立ちと病態 ・栄養福祉論 ・臨床栄養学 I ・管理栄養士演習 I、管理栄養士演習 II
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■日本消化器内視鏡学認定医 ■消化器集団検診認定医 ■麻酔科標榜医 ■細菌性食中毒学
最 終 学 歴	長崎大学 医学部
学 位	博士 (医学)
職 歴	<p>栗山胃腸科医院 院長 (昭和 49 年 7 月～平成 19 年 5 月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 客員教授 (平成 13 年 4 月～平成 20 年 3 月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授 (平成 20 年 4 月～現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>【著書】</p> <p>「栄養士・管理栄養士のための細菌性食中毒読本」(2008 年)</p> <p>(概要)</p> <p>担当課題「細菌性食中毒学」の教科書として執筆したものであり、食中毒について栄養士・管理栄養士として必要最低限知っておくべき事項を簡潔にわかりやすく概説した入門書である。</p>
主な研究活動	<p>【論文】</p> <p>「胃酸分泌抑制薬と細菌性食中毒—PPI 食中毒症候群」 (モダンフィジシャン Vol.22, No.11, 2002.)</p> <p>(概要)</p> <p>細菌性食中毒症における胃酸及び胃酸分泌抑制薬の特性と役割についてこれまでの臨床例から検証し、食中毒に罹りやすい PPI や H2 ブロッカー服用者を PPI 食中毒症候群と命名することを提唱。</p> <p>「女子学生の貧血と貧血を来す疾患の検討」研究報告 (栗山敦治：日本医事新報 No4575 : 84～87, 2011.)</p> <p>(概要)</p> <p>女子学生 137 名の血清鉄と血清フェリチンのみから貧血を検討し、血清鉄・血清フェリチンともに低値を示した例を第 1 群 (貧血型)、血清鉄のみ低値を示した例を第 2 群 (血清鉄貧血型)、血清フェリチンのみ低値を示した例を第 3 群 (潜在貧血型)、血清鉄・フェリチンともに基準値を示した例を第 4 群 (正常型) とした。第 1 群 22 名 (16.1%)、第 2 群 8 名 (5.8%)、第 3 群 23 名 (16.8%) であり、女子学生の 38.7% が貧血および潜在的貧血状態にあった。アンケートでは食品摂取と貧血との関連は見出しえなかった。さらに、月経形態の調査から月経不順とする例はなかったため、第 1 群 7 名(運動部員 2 名を含む)、第 2 群 8 名に面談し食品摂取、月経時の症状を聴取した。月経時において耳鳴り、めまい、立ちくらみ、動悸、頭痛などの症状の訴えがあり、2 名の運動部員に強い偏食が認められた。本稿では若い女性が貧血を来す疾患について検討した。</p> <p>「文明国に特有な食中毒—腸管出血性大腸菌食中毒の素描」研究報告 (栗山敦治：モダンフィジシャン Vol.32:1539-1542, 2012.)</p> <p>(概要)</p> <p>細菌性食中毒の原因は食材の汚染であり、汚染を前提に調理する必要がある。食中毒を予防するためには、加熱できる料理を選び、調理したものは早く食べること、保存は厳重にすることである。食中毒が発生した場合は原因食材からの原因菌の検出は非常に困難であり、その間に汚染は拡大するので、ただちに疫学調査を実施し、状況証拠があればリコール、営業停止などの行政処置を行い感染の拡大を防ぐべきである。</p>

「S. enteritidis の素顔～鶏卵・鉄分・鉄結合タンパクとの関連～」研究報告

(栗山敦治：モダンフィジシャン Vol.33:267-270, 2013.)

(概要)

1936年5月、浜松第一中学校運動会後に配られた大福餅による、当時世界最大の食中毒が発生した。原因菌はS. enteritidisであった。生徒・家族を中心に患者数約2,200人、死者は生徒29名、家族15名であった。近年、S. enteritidisの鶏卵汚染が世界的に広がったことから、S. enteritidisが原因の食中毒が広がり、小菌数でも感染するようになった。

細菌の発育には鉄が必須の物質で、生体は細菌から鉄を奪われないメカニズムを持っている。母乳で育てられた乳児が牛乳で育てられた乳児より疾病に感染しにくいのは、ラクトフェリンという鉄と強く結合する鉄結合タンパクが多いためである。マサイ族に鉄剤を与えたところ88%の人がアメーバに罹患したという。ある種の疾病には鉄分の低下が感染防御となり生体にとって都合のよいこともある。

面白いことに、生卵の卵白は鉄分をまったく含まないことで細菌の侵入を防いでいる。初期の医学での瀉血が無知の象徴のようにいわれているが、ある種の感染症に効果があったことは間違いないと思われる。感染に対して生体は貧血という生体防御で対応している。一般診療で遭遇する貧血に対して、感染防御の現われであることを思い出してほしい。

「若い女子学生のCKDの検討～尿タンパク・eGFR・摂取食塩量～」研究報告

(栗山敦治：九州栄養福祉大学研究紀要10：193-197, 2013.)

(概要)

女子学生150名の尿タンパク・クレアチニン・eGFRおよび1日食塩摂取量について検討した。血清クレアチニン値は平均0.60±0.08mg/dlであった。eGFRは111.40±17.16ml/分/1.73m²であった。eGFRが89ml/分/1.73m²以下の学生は11名で、72から88ml/分/1.73m²に分布し、60ml/分/1.73m²以下はいなかった。この11名の中には尿異常者はいなかった。尿タンパク(±)は4名、(+)は3名でeGFRは全員95ml/分/1.73m²以上であった。従って、腎障害(+), 90≤eGFR、腎機能正常で、この7名をCKDステージ1とした。18～20歳の若い女性の集団の0.46%に腎疾患がみられた。1日摂取食品数が3食品数以下が53名(35.8%)であった。アンケートの中にソフトクリームを摂取していた学生が63名おり、不足カロリーを補うためにその他にソフトドリンク、チョコレート、クッキーなどを摂取していたと考えられる。

1日摂取食塩量については、平均摂取食塩量は6.62gで、最低摂取量は0.8g最高摂取量は18.6gで、摂取食品数に連動している。25年前の若い女子学生の1日食塩摂取量は5.79gであり現在は約1g増加している。

「ノロウイルスの素顔～お腹のかぜ」(栗山敦治：モダンフィジシャン Vol.34:446-449, 2014.)

(概要)

ノロウイルスは自然界で唯一、人を宿主にするウイルスである。人の生活行動のすべてが感染の原因であり、完全な防御は不可能に近い、ノロウイルスに国境はなく、世界のどこかで、季節に関係なく食中毒が発生している。ノロウイルスはプラス1本鎖RNAウイルスであり、多くの遺伝子が存在し、感染防御は分泌型IgAで持続期間が短く、したがって、何回でもノロウイルスに感染する。感染の防御策は、食中毒病原体の正しい知識を持つことである。

「ボツリヌス菌食中毒の素描～診断の困難さと致死率の高さ～」

(栗山敦治：九州栄養福祉大学研究紀要11：175-179, 2014.)

(概要)

ボツリヌス菌食中毒に遭遇する機会は、きわめて少ないが診断に難渋するケースが多く、致死率が高いので、最も注意を払わなければならない疾患である。診断が遅れるほど重症化し、死につながる。本症の正体はボツリヌス毒素であり、末梢神経細胞末端でのアセチルコリンの放出を阻害し、副交感神経と運動神経を遮断させる。神経症状は両側対称性で、まず脳神経領域から症状が現れ、下行性に進行していく。現れた症状が脳神経および運動神経のうち、どの神経が障害されたかを推定し、さらに喫食調査を行えば確定診断につながる。我が国で発生した有名なイズシ事件、輸入キャビア事件、辛子蓮根事件から本症の診断に至った経過を検証した。ボツリヌス菌は人の腸管内では菌が増殖しないとされていたが、生後3週間から8ヶ月の乳児の腸管内では菌が増殖して発症する乳児ボツリヌス症がある。この期間には腸内フローラが完成していないために発症するとされている。妊婦の腸内環境が子に受け継がれるので、より良いフローラを維持するために、妊婦はプロバイオティクスを含めたバランスのとれた食生活をすべきである。

「若い女子学生の随時血糖値とHbA1c値の現況～2型糖尿病発症への警告～」

(栗山敦治：九州栄養福祉大学研究紀要 11：181-184, 2014.)

(概要)

18～19歳の若い女子学生129名の随時血糖値とHbA1c値を測定し、この値から、2型糖尿病の発症のリスクを検討した。家系内血縁者に糖尿病のいないグループA(87名)、糖尿病患者がいるグループB(42名)、随時血糖値が100mg/dl以上のグループC(16名)に分類し検討した。随時血糖値およびHbA1c値はそれぞれ、全員では89.02±8.75mg/dl、5.13±0.24%、グループAは88.39±9.02mg/dl、5.12±0.24%、グループBは93.33±7.93mg/dl、5.15±0.22%、グループCは104.13±4.68mg/dl、5.29±0.20%であった。いずれもグループCがともに高値を示した。採血時間が昼食後2～4時間後であり、空腹時血糖値ととらえ、空腹時血糖値異常(IFG)として、検討した。グループCの学生が将来、飽食、肥満、ストレスなどの環境因子が加わって、2型糖尿尿が発症することが推定される。

「創傷の湿潤療法の原点を求めて」～神話因幡の白兔からみた考察～

(栗山敦治：モダンフィジシャン Vol.35 No.9:1169, 2015.)

(概要)

今は切り傷、裂傷、擦過傷、火傷などでは、「消毒しない」「水道水で洗う」「乾燥させない」湿潤療法が主流になりつつある。何十年前から消毒液を使用し、乾かす治療を実施してきた人々は、現実に行っている湿潤療法が間違っていると考えがちである。したがって、すべての医療機関がこの治療法を行っているわけではない。

創傷療法とは、さまざまな細胞が創面とその周囲に集まり、組織の再生、修復が起こる。これらの組織の活動を妨げるのは消毒液である。創傷治療の最大の妨害因子は乾燥である。傷を乾かすと遊走した表皮細胞が壊死し、結果として創傷の上皮化は起こらない。細胞が活動するには、湿潤環境が必須条件である。古事記に登場する「因幡の白兔」の神話は有名である。ワニザメに丸裸にされた白兔は悪い兄神たちに教えられたように、海水を浴び、太陽と風に当たるとますます痛みが増して苦しんだ。しかし、優しい大国主命は池に入り体を洗い、塩分を落として、がまの穂をほぐしてその上に寝転がると教えられ、その通りにすると全身に元通りの毛が生えてきた。湿潤療法の原点は「因幡の白兔」神話の中にあつた。

「悪性貧血治療の変遷～むかし常識、いま非常識～」

(栗山敦治：九州栄養福祉大学研究紀要 12：157-161, 2015.)

(概要)

19世紀初頭、回復不能な貧血が流行し、死に至るために悪性貧血と呼ばれ、恐れられていた。生の肝臓を食べていた患者の病状が悪化しないのに気付いてマーフィーとマイノットは肝臓抽出液を作成し、悪性貧血患者の肝臓療法を行った。この肝臓内の抗貧血因子を結晶として取り出したのが、1948年、米国のフォルカースと英国のスミスである。この結晶は、シアノコバラミンという物質で「ビタミンB12」と命名された。ビタミンB12はきわめて微量でも効力があつた。5μgで患者に有効であるが、使用されていた注射用の肝濃縮液には百万分の一しかビタミンB12は含まれていなかったという。

自己免疫性萎縮性胃炎や胃全摘後では、内因子不足により、回腸末端切除では吸収障害により、ビタミンB12の不足による貧血が起こる。これが巨赤芽球性貧血である。したがって、ビタミンB12の非経口投与(主に筋注)が治療の必須条件であるとされてきたが、近年、ビタミンB12には、受動的な拡散などの内因子以外の吸収経路があることや、単体では受動的にある程度吸収されることが判明してきたことから、ビタミンB12の経口投与が行われるようになってきた。今でも、「悪性貧血の治療には、ビタミンB12を非経口投与する」と記載されている教科書が散見される。現在では、必ずしも正しくない。医学常識も常に変化している。むかし常識、いま非常識。

「食物アレルギーと仮性アレルギー」～その類似点と相違点からみた考察～

(概要)

食物アレルギーはアレルゲンを摂取することによる免疫異常が起こす病態であり、仮性アレルギーは、摂取した食品の中の化学物質が引き起こす病態である。

食物アレルギーは、肥満細胞内のヒスタミンやロイコトリエンなどで引き起こされる症状であり、仮性アレルギーは食品に含まれているヒスタミン、セロトニン、アセチルコリンなどの化学物質が引き起こす症状である。これらの化学物質が引き起こす臨床症状は、顔面紅潮、口の周囲や耳介の紅潮、じんま疹などの症状のほか、嘔気・嘔吐、下痢などであり、発熱・頭痛・全身倦怠感を訴える場合もある。このような臨床症状から、食物アレルギーか仮性アレルギーかを判別することはできない。したがって、来院時の詳細な問診による抗原探索がきわめて重要である。診断には、また抗原探索には皮内テストや特異的IgE抗



体検査などが必要であるが、直ぐに、診断・治療を開始する必要がある一般診療の現場では、詳細な摂食歴の聴取がもっとも大切である。

食物アレルギーと診断すれば、ステロイドやエピネフリンの使用が必要であり、仮性アレルギーであれば、治療に使用する薬剤は抗ヒスタミンである。

仮性アレルギーについては、臨床栄養学の教科書には簡単に記載されていたが、最新医学大辞典や内科系成書には、説明も記載も見当たらなかった。

「理科支援員配置事業特別講師」 主催：北九州市教育委員会指導部指導第一課

(概要)

1)平成 20 年度理科支援員配置事業特別講師 (平成 20 年 11 月 北九州市立三郎丸小学校)

① 心臓の構造と働き～講義と聴診器による心音の聴き方～

② 血圧とは何か ～血圧の発生もメカニズム～ 、～血圧計による血圧の計り方の実習～

2)平成 21 年度理科支援員配置事業特別講師 (平成 21 年 11 月 北九州市松ヶ江小学校)

いのちの防衛軍～免疫とは何か～

私たちの体は 365 日 24 時間、常に恐ろしい外敵と戦っていますが、まったく体の中で戦っていることなど感じていません。微生物が体の中へ容赦なく侵入してきますので、これに勝利し続けなければ生きていけません。私たちは病原菌に囲まれて生活しているが、簡単には病気にならない。なぜだろうか。それは体には外敵から身を守る「免疫」があるためです。

体の防衛壁と突破してきた外敵には、補体、リンチームなどで消化したり、好中球で食べてしまいます。それでも侵入してくれば、マクロファージをお願いします。外敵の種類によって攻撃の仕方が違います。小さい外敵のかけら、毒素やウイルスなどは B 細胞群の抗体に処理してもらい、がん細胞やウイルス感染細胞はキラー T 細胞に処理をお願いします。このような仕組みで外敵から身を守っているのが免疫などです。

「大蔵地区認知症予防教室」

「大蔵認知症予防教室」講演会講師主催：北九州市八幡東区役所保健福祉課

(概要)

1)日本人はなぜ生活習慣病になりたがるのか? (平成 23 年 10 月 24 日 北九州市大蔵市民センター)

生活習慣病という一群の病気は過食と運動不足によって起こる。この結果、発症する病変はすべて血管の障害である。すなわち、心筋梗塞、脳梗塞、網膜症などである。

①ミイラの教え～怪我、飢餓、感染との戦い。

②怪我との戦いで止血機構が増幅した。

③なぜ、血管のなかでは血液が固まらないのか。

④ヒトは生活習慣病になりやすい仕組みを持っている。

⑤高血圧は内皮細胞を傷害する。

⑥ヒトは過食になりやすい。

⑦骨は体重をかけると丈夫になる。

⑧糖化タンパク (AGE) は血管毒性を持っている。

⑨内臓脂肪は血栓性ベクトルを発揮する。

⑩β2 アドレナリン受容体異常症 (節約遺伝子)

⑪肥満が血栓のリスクになる。

⑫粥 (プラーク) は破裂する。

⑬現代人は背広を着た縄文人である。

⑭我々の体は生活習慣病になりたがっている。

⑮未病という概念

2)心臓の構造と病気～主な心臓病の狭心症と心筋梗塞について～

(平成 24 年 6 月 11 日 北九州市大蔵市民センター)

心臓は生命の維持に必要な血液を全身に送り届けているポンプと考えると理解しやすい。心臓は酸素やエネルギー源を豊富に含んだ赤い動脈血を全身に送り出している。帰り道に約 60 兆の細胞が生きているために栄養や酸素を使った後の老廃物を受け取って、静脈血となって、心臓に帰ってくる。すなわち赤い動脈血を送り出し、青い静脈血を受け取っているのです。

心臓は 4 個の部屋があります。右に 2 部屋、左に 2 部屋ありますが、右の部屋と左の部屋とは全く行き来は出来ないようになっています。右には右心房と右心室があり、左には左心房と左心室があります。右心

房には全身から帰ってきた青い静脈血があります。この血液は右心室から肺に送られて、酸素をもらって赤い動脈血となって、左心房へ送られ左心室から大動脈を経て、全身へ。

心臓は右の部屋には青い静脈血があり、左の部屋には赤い動脈血があるのです。

心臓の中の血液の色は2色です。心臓は全身に血液を送るポンプと言いましたが、心臓自身も血液がなければ働けません。心臓は働けなければあの世行きです。待って下さい。簡単に言わないで下さい。

心臓が働くためには血液が必要です。心臓の筋肉に酸素や栄養を送っているのが冠動脈なのです。美味しいものを好きなだけ食べているあなたは幸せでしょうが、少しは、冠動脈のことも考えて下さい。食べ過ぎと運動不足は、有名なメタボリック・シンドロームになります。これが冠動脈に動脈硬化が起こり、狭くなって十分に心臓の筋肉に酸素や栄養を送り届け出来なくなります。結果的には心臓は働くことが出来なくなります。これが狭心症や心筋梗塞の原因です。100歳まで生きたいならば心臓は約37億回も収縮しなければならないのです。長生きしたければ心臓を大切に使うして下さい。

3) 「脳とはなにか～脳の構造と機能からみた脳疾患～」

(平成25年3月2日 北九州市大蔵市民センター)

脳とは何かと問われれば答えに困る。人間を含めた動物の行動などのすべてを支配する臓器と言える。私たちはものを考える時、頭を使っているし、泣いたり笑ったり怒ったりするのも脳の働きである。つまり、知性・感情・意志といったすべてを脳が支配している。

大脳は体のすべての機能を分業している。大脳皮質は前頭連合野、頭頂連合野、側頭連合野、体性感覚野、聴覚野、視覚野に分けられている。3つの内、もっとも高度な働きをしているのが、前頭連合野である。これが傷害されると人間らしさがなくなる。積極性がなくなり、自発行動が少なくなる、周囲に無関心になる、感情の起伏が激しくなるなどヒトらしさがなくなる。

脳卒中とは突然倒れる脳の病気のことであり、原因は何であれ、脳細胞に血液が供給できなくなり、脳細胞が壊死することである。脳に血液が行かなくなる理由として、血管が破ける場合と血管が動脈硬化で狭くなる場合がある。

1)脳出血～①高血圧が長く続いて血管が破れる、②動脈瘤など動静脈奇形で突然に血管が破裂するクモ膜下出血がある。

2)脳梗塞～動脈硬化によってアテロームができて血管が詰まる(脳血栓症)がある。また、心房細動による左心房の血栓が発生して、これが剥がれ脳の血管を閉塞して起こる心原性脳塞栓症がある。脳の中心部に行く小さい穿通動脈が動脈硬化になり起こる梗塞にラクナ梗塞がある。

そのほかに、一過性脳虚血性発作がある。これは動脈硬化が剥がれて脳の血管を塞ぐが血栓が溶解して脳の血流が正常になり症状が短時間で無くなる。

大蔵地区健康フェスタ講演会講師 主催：北九州市八幡東区役所保健福祉課～

「糖尿病とはどんな病気か」(平成26年3月1日 北九州市大蔵市民センター)

(概要)

糖尿病は日本でも世界でも猛烈に増加している。糖尿病が直接の死因になることはないが死因の3分の2は糖尿病にかかっている。糖尿病とは何かと言われても難しいが「全身の慢性的なエネルギー不足の病気であり、その原因が高血糖であり、このために血管障害が発症する疾患である」と答えていることにしている。高血糖はインスリンの相対的不足によって起こるがその原因が遺伝的なものと環境からの影響の2つがあると考えられている。

糖尿病は苦しい病気ではない。したがって、糖尿病が発症してから、しばらく経っているにもかかわらず自覚症状がほとんどない。糖尿病は治る病気かと言われると、現在のところ糖尿病は治る病気ではない。したがって、糖尿病を治すのではなく、コントロールすることである。

<血糖値が高いとはどんな状態なのか>

血糖値が280mg/dlであっても全く症状などはない。しかし、これは普通のヒトの3倍ほど高い血糖値である。アイスコーヒーにガムシロップを3個入れた状態で、相当甘いものである。体が砂糖漬けになっていると考えれば砂糖を火に入れたと溶けて、さらに煮詰めると「カラメルシロップ」になる。

糖尿病とは、カラメルシロップが体の組織に張りついていると思えばよい。

このことが、糖尿病性網膜症、糖尿病性腎症、糖尿病性神経障害さらに心筋梗塞、脳梗塞、閉塞性動脈硬化などが発症する原因である。

大蔵地区健康フェスタ講演会講師 主催：北九州市八幡東区区役所保健福祉課
「脳卒中とはなにか？」

(概要)

脳卒中とは、突然に倒れる脳の病気であり、原因は何であり、神経細胞に血液が供給されなくなって起こる脳の病気である。脳を支配している血管が①破れるか、②詰まるか である。

日本人の5人に1人になるといふ脳卒中について、分かりやすく解説した。

「職業訓練衛生技能講習会」講師

酸素欠乏危険作業主任技能講習会 (平成24年1月28日)

(概要)

1)酸素欠乏症の病理と症状

- ①気中酸素濃度と酸素分圧
- ②人体における酸素摂取と利用
- ③酸素欠乏症

2)救急処置

- ①発見時の対応
- ②心停止の判断
- ③心肺蘇生の開始と胸骨圧迫
- ④気道確保と人工呼吸
- ⑤心肺蘇生中の胸骨圧迫と人工呼吸
- ⑥心肺蘇生の効果とタイミング
- ⑦AEDの使用
- ⑧気道異物の除去

3) 硫化水素中毒の病理と症状

硫化水素は生活の中でどこでも発生している中毒で死に至るものである。

硫化水素中毒は空気中の酸素が不足するのではなく、赤血球の酸素運搬機能が硫化水素により障害されて脳の酸素不足の結果、死亡するのである。

法律では空気中の硫化水素は10ppm以内とされている。

・「酸素欠乏危険作業主任技能講習会」(平成24年8月10日)

1)、2)の講義

・「酸素欠乏危険作業主任技能講習会」(平成24年8月26日)

1)、2)の講義

・「酸素欠乏危険作業主任技能講習会」(平成25年2月10日)

1)、2)の講義

・「酸素欠乏危険作業主任技能講習会」(平成25年3月20日)

・「酸素欠乏・硫化水素危険作業主任技能講習」1)、2)の講義および3)の講義

<硫化水素中毒の症状>

①嗅覚麻痺～20～30ppmになると嗅覚が傷害され、100～200ppmでは嗅神経が麻痺し、臭いを感じなくなり、危険を回避するチャンスを失う。

②眼の損傷～角膜は50ppm程度でも障害される(ガス眼)

③呼吸器の損傷～肺水腫は100ppm、48時間、30分で起こる。肺ガス交換の

障害で窒息死の危険性が出てくる。700ppmになると神経細胞が障害され、1～2回の呼吸で突然に呼吸麻痺が起こる。

硫化水素の事故は死亡率が高く、多くの事故現場では助けに行った人も死亡という2次3次の災害が必ず起こるので、硫化水素中毒の知識が必要である。

「お腹のかぜ～ノロウイルスの素顔～」(平成26年10月25日 北九州市大蔵市民センター)

(概要)

ノロウイルスはヒトの生活行動のすべてが感染の原因になる。したがって、完全な防御は不可能に近い。アルコール消毒は無効である。

	<p>「高血圧のいろいろ～知っているようで知らない高血圧の基礎知識～」 (平成 27 年 3 月 7 日 北九州市大蔵市民センター)</p> <p>(概要)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 高血圧の種類 2) 血液循環の仕組み 3) 身体各部分の血流分布は心身の活動状態により変化する 4) 脳循環の自動調整機能 5) 塩分と高血圧 6) 高齢者高血圧の特徴 7) お風呂の温度と血圧の関係 <p>「コレステロールとはなにか～コレステロールに、悪玉と善玉があるのか～」 (平成 28 年 3 月 28 日 北九州市大蔵市民センター)</p> <p>(概要)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 三大栄養素 2) コレステロールとは 3) コレステロールの輸送船～リポタンパク 4) コレステロールの運搬 5) 粥状動脈硬化～血管を詰まらせる元祖 6) 心臓の病気～狭心症・心筋梗塞 7) 脳の病気～脳梗塞・脳塞栓症 8) 長寿は昔からの人類の夢だった
<p>主な社会活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 20 年度理科支援員配置事業特別講師 (再掲) 「心臓と構造と働き、血圧とは何か」 (平成 20 年 11 月 10 日北九州市立三郎丸小学校) ・平成 21 年度理科支援員配置事業特別講師 (再掲) 「いのちの防衛軍～免疫とはなにか」 (平成 21 年 11 月 18 日 北九州市立松ヶ江小学校) ・「日本人はなぜ生活習慣病になりたがるのか？」 (再掲) (平成 23 年 10 月 24 日 北九州市大蔵市民センター) ・「心臓の構造からみた心疾患」 (再掲) (平成 24 年 6 月 11 日 北九州市大蔵市民センター) ・「脳とは何か～脳の構造と機能から見た脳疾患～」 (再掲) (平成 25 年 3 月 2 日 北九州市大蔵市民センター) ・「糖尿病とはどんな病気か」 (再掲) (平成 26 年 3 月 1 日 北九州大蔵市民センター) ・「お腹のかぜ～ノロウイルスの素顔～」 (再掲) (平成 26 年 10 月 25 日 北九州市大蔵市民センター) ・「高血圧のいろいろ～知っているようで知らない 高血圧の基礎知識～」 (再掲) (平成 27 年 3 月 7 日 北九州市大蔵市民センター) ・「コレステロールとはなにか ～コレステロールに、悪玉と善玉があるのか～」 (再掲) (平成 28 年 3 月 28 日 北九州市大蔵市民センター)
<p>その他の社会活動等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・北九州市胃集団検診フィルム読影委員 平成 22 年度北九州市胃集団検診フィルム読影会出務回数 12 回 平成 23 年度北九州市胃集団検診フィルム読影会出務回数 11 回 平成 24 年度北九州市胃集団検診フィルム読影会出務回数 7 回 ・平成 22 年度理科支援等事業特別講師 ・北九州市民共済生活協同組合審査委員 ・北九州市医師会胃集団検診読影委員 ・平成 24 年度 酸素欠乏・硫化水素危険作業主任技能講習会講師 (職業訓練法人北九州訓練協会) ・平成 24 年度大蔵認知症予防教室講師 (北九州市八幡東区役所) ・北九州市民共済生活共同組合審査委員会委員 (平成 24 年 4 月 1 日より平成 25 年 3 月 31 日まで)
<p>所属学会</p>	<p>公衆衛生事業功労者県知事表彰 (福岡県、1998 年)</p> <p>公衆衛生事業功労者厚生労働大臣表彰 (2008 年)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食と哲学Ⅰ、食と哲学Ⅱ <p>[リハビリテーション学部 理学療法学科、作業療法学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食と哲学 <hr/> <p>[東筑紫短期大学 保育学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・哲学
専 門 分 野	■哲学
最 終 学 歴	九州大学大学院 文学研究科 哲学専攻 (博士後期課程単位取得退学)
学 位	修士 (文学)
職 歴	<p>九州栄養福祉大学 講師</p> <p>「哲学入門Ⅰ・Ⅱ」、「心と脳の哲学Ⅰ・Ⅱ」 担当 (平成13年4月～平成19年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 准教授</p> <p>「哲学入門Ⅰ・Ⅱ」、「心と脳の哲学Ⅰ・Ⅱ」、 「食と哲学Ⅰ・Ⅱ」、「哲学」担当 (平成19年4月～平成25年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 教授</p> <p>「食と哲学Ⅰ・Ⅱ」、「食と哲学」、 「哲学」(当科目については平成26年度まで) 担当 (平成25年4月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 学生部 学生指導課指導主事 (平成13年4月～平成21年3月)</p> <p>学校法人東筑紫学園 学園史編纂室 編集主事 (平成21年4月～現在に至る)</p>
教育上の業績	○九州栄養福祉大学学友会執行部顧問として学生の指導に当たり、様々な行事の企画、運営等について助言を与えてきた。(平成15年4月～平成21年3月)
主な研究活動	<p>【論文】</p> <p>ジェイムズ『人間の不死性—この教説に対する、予想される二つの反論』(翻訳) (九州栄養福祉大学研究紀要第5号、平成20年12月)</p> <hr/> <p>(概要)</p> <p>来世の生といった古くからの観念に対し現代自然科学の側から放たれる反論に答弁する形で、死後の生の可能性を探った本書の翻訳「その3」。これにて本文完訳。</p> <p>【論文】</p> <p>ジェイムズ『信じる意志』(翻訳) (九州栄養福祉大学研究紀要第12号、平成27年12月)</p> <hr/> <p>(概要)</p> <p>実証的証拠を有さぬことを以て宗教的信仰を拒否する自然科学者たちに対し、人間には宗教的仮説を信じる態度をとる権利があることを主張し、かれらの不条理を論難した本書の翻訳「その6」。</p>
所 属 学 会	<p>九州大学哲学会員 (昭和59年9月～現在に至る)</p> <p>日本哲学会員 (平成3年6月～現在に至る)</p> <p>中世哲学会員 (平成4年11月～現在に至る)</p> <p>西日本哲学会員 (平成4年11月～現在に至る)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調理学 ・調理学実習Ⅰ、調理学実習Ⅱ ・応用栄養学Ⅱ、応用栄養学Ⅲ ・専門ゼミナールⅡ ・卒業論文 ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ
専 門 分 野	<p>■調理学</p> <p>■栄養学</p>
最 終 学 歴	神戸女子大学大学院 食物栄養学専攻 博士前期課程修了
学 位	博士（食物栄養学）
職 歴	<p>神戸女子大学家政学部 助手 (平成5年4月～平成13年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学食物栄養学部 講師 (平成13年4月～平成19年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学食物栄養学部 准教授 (平成19年4月～平成25年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学食物栄養学部 教授 (平成25年4月～現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>○卒業論文指導として緩和ケア病棟における食事に関する研究を、病院と協力して行っている。</p> <p>○卒業論文指導として、小麦粉のベーカリー食品の特徴について農研機構 九州沖縄農業研究センターと協定研究を行っている。</p> <p>○学生による美化委員会の組織を立ち上げ、運営の指導を行ってきた。</p> <p>○管理栄養士演習科目担当者会議事務局として、学生の資格修得のための対策を援助している。</p>
主な研究活動	<p>【論文】</p> <p>「Effect of Capsicum Powder on Breadmaking Properties」 Cereal.chem 2009 86 (6) 633-636 (共著)</p> <p>(概要)</p> <p>Blending dried fruit of Capsicum species such as paprika, tomapi, pimento, and cayenne to wheat flour enhances breadmaking properties of bread height and specific volume. However, due to protease, immature green fruit did not cause this improvement of breadmaking properties. Heat-stable and LMW materials in red paprika promote the breadmaking properties.</p> <p>【論文】</p> <p>「Effects of Size of Cellulose Granules on Dough Rheology, Microscopy, and Breadmaking Properties」 Journal of Food Science 2007 72(2) 79-84 (共著)</p> <p>(概要)</p> <p>Breadmaking was performed with cellulose-blended wheat flour. Cellulose granules (7 types) of various sizes (diameter) were prepared by kneading. With increase of the blend percent of the cellulose samples from 10% to 20%, breadmaking properties such as bread height and specific volume (SV) gradually decreased in every sample; however, the decreasing levels of the properties in 7 types of various sizes varied. The decrease of bread height and SV was associated with the size of the cellulose granule.</p> <p>【論文】</p> <p>「大学における調理実習教育の現状と担当教員の把握する学生の実態」 (日本調理科学会誌 2012 45 255 - 264) (共著)</p> <p>(概要)</p> <p>大学における調理実習教育に関する現状と担当教員の把握する学生の実態について、九州に所在する大学において調理実習科目を担当している教員を対象として、アンケート調査を実施した。調理実習科目の開講状況は、栄養士養成系および家政・教員養成系において、平均開講総単位数は2.8単位、平均必修単位数は2.2単位および0.6単位であった。</p> <p>調理実習の時間割上の時間は、栄養士養成系では約2コマ180分を設定している大学が70.0%、家政・教員養成系では1.5コマと2コマが共に40.0%であった。</p>

調理に関する学生の知識および技術に関しては、両系統ともに低下しているという回答が多かった。調理実習を時間内に終わらせるために、種々の工夫が行われ、具体的な内容としては特に「料理の組み合わせ工夫する」が両系統とも半数を超えていた。学生のスキルは今後もますます低下する傾向にあり、具体的な対策が必要とされる。

【論文】

「米粉とデンプンの調理性」

(日本調理科学会誌 2009 42 (5) 361-365)

(概要)

現在の学生の米粉に対する意識調査と、学生実験への米粉導入方法を検討した。学生実験で実施しているスポンジケーキの材料として米粉を導入するための試みの1例を報告した。従来の米粉と異なり、パンやケーキに用いることが可能となった新しい米粉の調理性を理解することを目的としている。(クッキングルーム)

【論文】

「新しい米粉とデンプンの調理性」

(New Food Industry 2009 51 (12) 65-77)

(概要)

新しい製法の米粉と従来の方法で製造された米粉について、ベーカリー食品に関するこれまでの研究をまとめた。我々がこれまで行ってきたでんぷんを用いたベーカリー食品の調理性とも関連付けて考察した。

【論文】

「スポンジ組織のレオロジー特性—澱粉粒と気泡の相互作用 (総説)」

(日本バイオレオロジー学会誌 2006 20 (2) 20-31)

(概要)

スポンジケーキに特徴的な食感をもたらすスポンジ組織のレオロジー的特性と、その組織の気孔構造が形成されるメカニズムを解明するために行ってきた研究の総説。

【論文】

「緩和ケア病棟の患者に適した食事の開発：ちらし寿司」

(九州栄養福祉大学研究紀要 (13), 37-48, 2016)

(概要)

食事量の減少が、患者様の QOL の低下に直結する緩和ケア病棟の食事について、調理科学的アプローチを行っている。本研究では、柔らかく飲み込みやすいソフト食の調製を、高齢者に好まれるメニューであると同時に行事食にも多用される「ちらし寿司」について検討した。

【論文】

「管理栄養士課程におけるリメディアル教育への取り組み」

(九州栄養福祉大学紀要 2013 10 257-270) (共著)

(概要)

新入生を対象に管理栄養士に必要とされる計算問題について、補講を実施し、その効果を検討した。

【論文】

「食材を用いる生物教育—小学校6年生を対象としたスルメイカの体の構造学習と調理の合同実習—」

(九州栄養福祉大学紀要 2008 5 29-39) (共著)

(概要)

小学校で「からだのつくりとはたらき」を学習した後の児童を対象とし、スルメイカを用いた「からだの構造学習」と「調理」の合同実習を考案した。解剖実習は理科の教諭が行い、調理は家庭科の教諭或いは栄養教諭が受け持つ想定とした。

【論文】

「女子学生の味覚感受性と料理の味付けにおける嗜好濃度との関連性」

(九州栄養福祉大学紀要 2008 (5) 29-39) (共著)

(概要)

本研究では本学女子学生を対象に味覚閾値検査を実施し、その調査結果から高、中および低味覚感受性に相当する被験者を抽出した。各群の被験者が好みの味付けをした調理品について、塩分および糖分濃度を測定したこれらの結果から、女子学生の味覚感受性と基本料理の味付け嗜好濃度との関連性について検討した。

主な社会活動	・一般企業の男性料理教室講師 (平成 27 年～現在に至る) TOTO 株式会社人材開発部ダイバーシティ推進部と連携し、「女性の活躍推進」のための男性の家事参加促進を狙いとして、料理の基本(準備から片付けまで)を学ぶ料理教室を開催している。
	・シニアを対象とした運動および食育教室の講師 財団法人健康・体力づくり事業財団、体力づくり道府県民会議主催、後援：福岡県、北九州市、(財)北九州市体育協会 (平成 21～22 年) 平成 23 年よりスポーツクラブが引き継ぎ開催 (平成 23 年～現在に至る) 北九州市民を対象としたスポーツと食育を組み合わせた教室の食育担当講師として、調理実習および講義を実施。
	・北九州市葛原小学校 家庭教育学級 講師 (平成 24 年 10 月) 「胆瞬」をテーマとした食育教会と調理実習を担当。葛原小学校 PTA 主催
	・平成 21 年度 八幡東アカデミー事業 「イカの不思議発見塾」 調理実習担当 八幡アカデミー主催 八幡東生涯学習センターにて開催。「イカの不思議発見塾」では、30～70 歳代の男女 16 名の市民を対象に、イカの構造を学んだのち、そのイカを調理して食べ、イカを通して生物の構造を理解するための講座を実施。
	・親子で楽しく健康・体力づくり教室 (親子クッキング教室 講師) (平成 20 年) 北九州市こどもの健康・体力づくり推進事業を受託したスポーツクラブと協力。親子食育教室「たべものはかせになろう」を 3 回実施。
	・財団法人山口県ひとつづくり財団社会福祉研修部主催 児童・障害者(児)福祉施設等調理担当職員研修会 講師 講義および調理実習 (平成 20 年)、講義を担当 (平成 23 年)。
	・北九州市シニアカレッジ (講義及び調理実習) (平成 26 年～27 年) 主催：北九州市立年長者研修大学校 周望学舎 本学学生と参加者の交流を主体とし、高齢者に有益な栄養学の講義と調理実習を実施。
所属学会	日本調理科学会 (平成 4 年 4 月～現在に至る)
	日本栄養改善学会 (平成 10 年 1 月～現在に至る)
	AACC International (平成 28 年 12 月～現在に至る)
受賞歴	日本調理科学会 奨励賞 (平成 15 年 9 月 4 日)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生化学Ⅰ、生化学Ⅱ ・基礎栄養学 ・基礎栄養学実験 ・キャリアデザイン ・専門ゼミナールⅡ ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ ・卒業論文 <hr/> <p>[九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康科学特別講義 ・生化学特論Ⅰ、生化学特論Ⅱ 	
専 門 分 野	<p>■生化学</p> <p>■食品化学</p>	
最 終 学 歴	長崎大学大学院 水産学研究科修了	
学 位	博士（保健学）（徳島大学）	
職 歴	<p>長崎大学 水産学部 助手 (昭和49年4月～昭和54年3月)</p> <p>長崎大学 水産学部 講師 (昭和54年4月～昭和59年3月)</p> <p>長崎大学 水産学部 助教授 (昭和59年4月～平成9年3月)</p> <p>文部省内地研究員（徳島大学 酵素科学研究センター） (昭和62年7月～昭和63年5月)</p> <p>カリフォルニア大学 客員研究員 (平成2年7月～平成4年1月)</p> <p>(カリフォルニア大学サンフランシスコ校)</p> <p>長崎大学 水産学部 教授 (平成9年4月～平成27年3月)</p> <p>長崎大学大学院 海洋生産科学研究科 博士課程 教授 (平成9年5月～平成18年2月廃止)</p> <p>長崎大学大学院 生産科学研究科 博士課程 教授 (平成11年8月～平成27年3月)</p> <p>長崎大学大学院 環境科学研究科 非常勤講師 (平成14年4月～平成16年3月)</p> <p>長崎県立大学シーボルト校 大学院人間健康科学研究科 非常勤講師 (平成15年4月～現在に至る)</p> <p>長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授 改組により設置 (平成23年4月～平成27年3月)</p> <p>長崎大学 名誉教授 (平成27年4月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 教授 (平成27年4月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科 教授 (平成27年4月～現在に至る)</p>	
教育上の業績	○これまで、多数の博士、修士、学士の教育及び研究を指導し、大学や企業に輩出した	
主な研究活動	<p>【著書編集】</p> <p>「魚介肉内在性プロテアーゼ-最新の生化学と食品加工への応用」 長富 潔・吉田朝美・原 研治編 恒星社厚生閣, 2016年3月</p> <p>(概要) 魚介肉内在性プロテアーゼに関する最新の研究成果と、その水産食品加工への応用を、その分野の研究者や学生向けに編集した。</p> <hr/> <p>【著書】</p> <p>1. 「魚類リソゾーマルシステインプロテアーゼ」 (共著) 原 研治・吉田朝美・長富 潔 (魚介肉内在性プロテアーゼ-最新の生化学と食品加工への応用 p26-40 恒星社厚生閣, 2016年3月)</p> <p>2. 「魚類可溶性セリンプロテアーゼ」 (共著) 吉田朝美・長富 潔・原 研治 (魚介肉内在性プロテアーゼ-最新の生化学と食品加工への応用 p41-55 恒星社厚生閣, 2016年3月)</p>	

【学術論文】

1. 「中性域で働くマサバ カテプシン B 様酵素の精製と性状。」 (共著)
 (日本食品化学学会誌, 22 (1), 56-62 April 2015) (博士論文の主査として研究全体の構成と指導を行った)
2. “Proteolytic degradation of myofibrillar components by endogenous proteases in red sea bream muscle.” (共著)
 (マダイ筋肉中の内在性プロテアーゼによる筋肉構成タンパク質の分解)
 Japanese Journal of Food Chemistry and Safety . 2(2), 107-114(2014)
 (論文代表者として研究全体の構成と指導を行った)
3. “A glycoprotein in shells of conspecifics induces larval settlement of the Pacific oyster *Crassostrea gigs.*” (共著)
 (マガキ幼生の付着を誘起する糖タンパク質に関する研究)
 (PLoS ONE, 8 (12): e82358. doi:10.1371/journal.pone.0082358 December 2013.)
 (博士論文の副査として、糖タンパク質精製の指導を行った)
4. “Molecular cloning and tissue distribution of hyaluronan binding protein 2 (HABP2) in red sea bream *Pagrus major.*” (共著)
 (マダイ中のセリンプロテアーゼ(HABP2)の分子クローニングと組織分布)
 (Comparative Biochemistry and Physiology, Part B, 165,271-276 June 2013)
 (論文代表者として研究全体の構成と指導を行った)
5. “Chemical and thermal properties of freshwater prawn (*Macrobrachium rosenbergii*) meat.” (共著) (淡水エビ肉の化学的性質)
 (Journal of Aquatic Food Product Technology, 22 (2), 137-145 February 2013)
 (タイ国との共同研究として研究指導を行った)
6. “Study on a prolyl endopeptidase from the skeletal muscle of common carp (*Cyprinus carpio.*)” (共著)
 (コイ骨格筋中のプロリルエンドペプチダーゼに関する研究)
 (Process Biochemistry, 47(12), 2211-2218 December 2012.)
 (中国集美大学との共同研究であり、酵素の構造解析を担当した)
7. “Retardation of post-mortem changes of freshwater prawn (*Macrobrachium rosenbergii*) stored in ice by legume seed extracts.” (共著)
 (豆科種子の抽出物質の添加による、食用淡水エビ死後の肉質劣化の遅延)
 (Food Chemistry, 135(2), 571-579 November 2012)
 (タイ国との共同研究で、筋肉タンパク質の変化を担当した)
8. “Low molecular weight trypsin from hepatopancreas of freshwater prawn (*Macrobrachium rosenbergii*): Characteristics and biochemical properties.” (共著)
 (淡水エビ肝臓に存在する低分子量トリプシンの性質)
 (Food Chemistry, 134(1), 351-358 September 2012)
 (タイ国との共同研究で、トリプシンの精製と構造解析を担当した)
9. “Purification and characterisation of cathepsin L from the skeletal muscle of blue scad (*Decapterus maruadsii*) and comparison of its role with myofibril-bound serine proteinase in the degradation of myofibrillar proteins.” (共著)
 (中国産アジ筋肉中のカテプシン L の精製と筋原線維タンパク質分解に対する筋原線維セリンプロテアーゼとの比較)
 (Food Chemistry, 133(4), 1560-1568 August 2012)
 (中国集美大学との共同研究であり、カテプシン L の構造解析を担当した)
10. “Changes in sarcoplasmic proteins of cultured yellowtail *Seriola quinqueradiata* burnt meat.” (共著)
 (養殖ブリやけ肉発生に伴う筋形質タンパク質の変化)
 (Japanese Journal of Food Chemistry and Safety, 19(1),14-22 April 2012)
 (博士論文の主査としてこの研究全体を指導した)

11. **“Degradation of myofibril in cultured yellowtail *Seriola quinqueradiata* burnt meat: Effects of a myofibril-bound EDTA sensitive protease.”** (共著)
 (養殖ブリやけ肉中の筋原線維タンパク質の分解: EDTA 感受性筋原線維結合型セリンプロテアーゼの影響)
 (Fisheries Science 78(1):147-153 January 2012) (博士論文の主査としてこの研究全体を指導した)
12. **“Purification, molecular cloning, and some properties of a manganese-containing superoxide dismutase from Japanese flounder (*Paralichthys olivaceus*).”** (共著)
 (ヒラメ Mn-SOD の精製と性質、分子クローニング)
 (Comparative Biochemistry and Physiology, Part B, 158 (4) 289-296 2011)
 (博士論文の主査としてこの研究全体を指導した)
13. **“Purification and Characterization of Parvalbumins, the Major Allergens in Red Stingray (*Dasyatis akajei*).”** (共著)
 (アカエイの主なアレルゲンであるパルブアルブミンの精製と性質)
 (Journal of Agricultural and Food Chemistry, 58 (24), 12964-12969 2010)
 (中国集美大学との共同研究であり、PV の構造解析を担当した)
14. **“Extracellular products from virulent strain of *Edwardsiella tarda* stimulate mouse macrophages (RAW264.7) to produce nitric oxide (NO) and tumor necrosis factor (TNF)- α .”** (共著)
 (NO と TNF- α 生産に関わる *Edwardsiella tarda* (E. *tarda*) の細胞外放出物質)
 (Fish & Shellfish Immunology, 29, 778-785 2010) (博士論文の主査としてこの研究全体を指導した)
15. **“Gelatinolytic serine proteinases from the wing muscle of red stingray.”** (共著)
 (アカエイ筋肉中のゼラチン分解能を持つセリンプロテアーゼに関する研究)
 (Journal of Food Biochemistry, 34 (5), 949-961 (2010)
 (博士論文の主査として、この研究全体を指導した)
16. **“Identification of an aminopeptidase from the skeletal muscle of grass carp (*Ctenopharyngodon idellus*).”** (共著)
 (ソウギョ筋肉中のアミノペプチダーゼの分離精製)
 (Fish Physiology and Biochemistry, 36(4), 953-962 2010)
 (本論文は中国集美大学との共同研究であり、本酵素の精製方法を指導した)
17. **“Effect of a Myofibril- bound Serine Proteinase on the Deg of Giant Protein Titin and Nebulina.”** (共著)
 (筋原線維中の巨大タンパク質であるタイチンとネブリンの分解に対する筋原線維結合型セリンプロテアーゼの影響)
 (Journal of Food Biochemistry, 34, 581-594 2010)
 (中国集美大学との共同研究であり、筋原線維タンパク質分解の解析法を指導した)
18. **“A serine proteinase from the sarcoplasmic fraction of red sea bream *Pagrus major* is possibly derived from blood.”** (共著)
 (マダイ筋肉中の筋形質画分に存在するセリンプロテアーゼは血液由来である)
 (Fisheries Science, 75 (6), 1439-1444 2009) (博士論文の主査として、この研究全体を指導した)
19. **“Characterization of gelatinolytic enzymes in the skeletal muscle of red sea bream *Pagrus major*,”** (共著) (マダイ筋肉中に存在するゼラチン分解酵素の性質)
 (Fisheries Science, 75 (5), 1317-1322 2009) (博士論文の主査として、この研究全体を指導した)
20. **“Purification and characterization of chymotrypsins from the hepatopancreas of crucian carp (*Carassius auratus*).”** (共著)
 (フナ肝臓に存在するキモトリプシンの精製と性質) (Food Chemistry, 116(4), 860-866 2009)
 (本論文は中国集美大学との共同研究であり、本酵素の精製方法を指導した)
21. **“Identification and characterization of matrix metalloproteinases from the sarcoplasmic fraction of common carp (*Cyprinus carpio*) dark muscle.”** (共著)
 (コイ血合筋に存在するマトリクスメタロプロテアーゼの分離と性質)
 (Journal of Food Biochemistry, 33(5), 745-762 2009)
 (本論文は中国集美大学との共同研究であり、本酵素の精製方法及び酵素活性測定を指導した)

22. **“Characteristics of a self-assembled fibrillar gel prepared from red stingray collagen,”**
 (共著) (アカエイコラーゲンから調製された再繊維化ゲルの特性)
 (Fisheries Science, 75 (3), 765-770 2009) (博士論文の主査として、この研究全体を指導した)
23. **“Comparative analysis of the production of nitric oxide (NO) and tumor necrosis factor- α (TNF- α) from macrophages exposed to high virulent and low virulent strains of *Edwardsiella tarda*. ”** (共著)
 (Edwardsiella tarda 強毒及び弱毒株を暴露したマクロファージのNOとTNF- α 生産能の比較)
 (Fish & Shellfish Immunology, 27(2), 386-389 2009) (本論文ではマクロファージの培養を指導した)
24. **“Glucose-6-phosphate Isomerase Is an Endogenous Inhibitor to Myofibril-Bound Serine Proteinase of Crucian Carp (*Carassius auratus*). ”** (共著)
 (グルコース-6-リン酸イソメラーゼ (GPI) は筋原線維結合型セリンプロテアーゼ (MBSP) の生体内阻害剤である)
 (Journal of Agricultural and Food Chemistry, 57(12), 5549-5555 2009)
 (本論文は中国集美大学との共同研究であり、本酵素の精製方法や酵素活性測定を指導した)
25. **“Purification and characterisation of trypsin from the pyloric caeca of mandarin fish (*Siniperca chuatsi*),”** (mandarin fish の幽門垂に存在するトリプシンの精製と性質)
 Bao-Ju Lu, Li-Gen Zhou, Qiu-Feng Cai, Kenji Hara, Asami Yoshida, Wen-Jin Su, Min-Jie Cao.
 (Food Chemistry, 110 (2), 352-360 2008)
 (本論文は中国集美大学との共同研究であり、本酵素の構造解析を指導した)
26. **“Biochemical properties of acid-soluble collagens extracted from the skins of underutilised fishes,”**
 (未利用魚の皮から抽出した酸可溶性コラーゲンの物理化学的性質)
 Inwoo Bae, Kiyoshi Osatomi, Asami Yoshida, Kazufumi Osako, Atsuko Yamaguchi, Kenji Hara. (Food Chemistry, 108 (1), 49-54 2008)
 (博士論文の主査として、この研究全体を指導した)
27. **“Purification and characterization of leucine aminopeptidase from the skeletal muscle of common carp (*Cyprinus carpio*).”**
 (コイ筋肉中のロイシンアミノペプチダーゼの精製と性質)
 (Bing-Xin Liu, Xue-Li Du, Li-Gen Zhou, Kenji Hara, Wen-Jin Su, Min-Jie Cao.
 (Food Chemistry, 108, 140-147 2008)
 (本論文は中国集美大学との共同研究であり、酵素反応測定を指導した)
28. **“Purification and Characterization of Gelatinase-like Proteinases from Dark Muscle of Common Carp (*Cyprinus carpio*).”**
 (コイ血合筋に存在するゼラチナーゼ様酵素の精製と性質)
 Jiu-Lin Wu, Bao-Ju Lu, Ming-Hua Du, Guang-Ming Liu, Kenji Hara, Wen-Jin Su and Min-Jie Cao.
 (Journal of Agricultural and Food Chemistry, 56, 2216-2222 2008)
 (本論文は中国集美大学との共同研究であり、酵素反応測定を指導した)
29. **“Pepsinogens and Pepsins from Mandarin Fish (*Siniperca chuatsi*).”**
 (Mandarin Fish のペプシノーゲンとペプシン)
 Qiong Zhou, Guang-Ming Liu, Yuan-Yuan Huang, Ling Weng, Kenji Hara, Wen-Jin Su and Min-Jie Cao.
 (Journal of Agricultural and Food Chemistry, 56, 5401-5406 2008)
 (本論文は中国集美大学との共同研究であり、酵素の活性化機構を指導した)
30. **“PCR-RELP genotyping for Japanese and Korean population of Pacific oyster using mitochondrial DNA noncoding region.”**
 Takane Okimoto, Kenji Hara, Tadashi Ishihara, Futoshi Aranishi
 (Aqual Ecol, 42, 1-4, 2008) (博士論文の主査として、この研究全体を指導した)

	<p>31. “Comparison of the responses of peritoneal macrophages from Japanese flounder (<i>Paralichthys olivaceus</i>) against high virulent and low virulent strains of <i>Edwardsiella tarda</i>, ”Keiko Ishibe, Kiyoshi Osatomi, Kenji Hara, Kinya Kanai, Kenichi Yamaguchi, Tatsuya Oda, F (Fish & Shellfish Immunology, 24, 243-251 2008) (修士論文の主査として、この研究全体を指導した)</p>
	<p>[2007]</p> <p>32. “Partial Purification and characterization of Tropomyosin-Bound Serine Proteinase from the Skeletal Muscle of Yellow Croaker (<i>Pseudosciaenias crocea</i>).” (キグチ骨格筋からトロポミオシン結合型セリンプロテアーゼの部分精製とその性質) Min-Jie Cao, Ling Weng, Guang-Ming Liu, Kenji Hara and Wen-Jin Su. (Journal of Food Biochemistry, 31, 343-355 2007) (本論文は中国集美大学との共同研究であり、本酵素の精製方法を指導した)</p>
	<p>33. “Purification, Characterization, and cDNA Cloning of a Myofibril-Bound Serine Protease from Skeletal Muscle of Crucian Carp (<i>Carassius auratus</i>).” (Crucian Carp フナ筋原線維結合型セリンプロテアーゼの精製、性質及びcDNA クローニング) Chuan Guo, Min-Jie Cao, Guang-Ming Liu, Xiong-Shui Lin, Kenji Hara and Wen-Jin Su. (Journal of Agricultural and Food Chemistry, 55, 1510-1516 2007) (本論文は中国集美大学との共同研究であり、酵素の活性化機構を指導した)</p>
	<p>34. 「マアジ塩漬肉の品質に及ぼすトランスグルタミナーゼ製剤の影響」 田中晴生, 長富 潔, 柿澤有紀, 糸永麻未, 大迫一史, 原 研治, 野崎征宣. (日本調理科学会誌, 40(1), 10-14 2007) (博士論文の主査として論文全体の指導を担った)</p>
	<p>35. 「マアジ肉の塩漬・乾燥処理時におけるトランスグルタミナーゼ製剤の添加効果」 田中晴生, 長富 潔, 糸永麻未, 柿澤有紀, 原 研治, 野崎征宣 (日本食品化学学会誌, 14(1), 12-17 2007) (博士論文の主査として論文全体の指導を担った)</p>
	<p>[2006]</p> <p>36. “The effect of soybean trypsin inhibitor on the degradation of myofibrillar proteins by an endogenous serine proteinase of crucian carp.” (フナ内在性セリンプロテアーゼによる筋原線維タンパク質の分解に対する大豆トリプシンインヒビターの効果) Xin-Jing Jiang, Zhi-Jun Zhang, Hui-Nong Cai, Kenji Hara, Wen-Jin Su, Min-Jie Cao. (Food Chemistry, 94, 498-503 2006) (本論文は中国集美大学との共同研究であり、筋原線維タンパク質の調製を指導した)</p>
	<p>37. “Cryoprotective effects of shrimp head protein hydrolysate on gel forming ability and denaturation of lizardfish surimi during frozen storage.” (凍結貯蔵中におけるエソすり身のゲル形成能と筋原線維タンパク質の変性に及ぼすエビ頭部タンパク質酵素分解物の影響) Y. Ruttanapornvareesakul, K. Somjit, A. Otsuka, K. Hara, K. Osatomi, K. Osako, O. Kongpun, Y. Nozaki. (Fisheries Science, 72(2):421-428 2006) (博士論文の主査として研究全体の指導を行った)</p>
	<p>38. “Occurrence of two distinct molecular species of cathepsin B in carp <i>Cyprinus carpio</i>.” (分子種の異なる2種のコイカテプシンBの存在) Y. Tan, K. Osatomi, Y. Nozaki, T. Ishihara, K. Hara. (Fisheries Science 72(1): 185-194 2006) (博士論文の主査として研究全体の構成と指導を行った)</p>

	<p> 39. “Concentration-dependent suppressive effect of shrimp head protein hydrolysate on dehydration-induced denaturation of lizardfish myofibrils.” (エソ筋原繊維の脱水変性に及ぼすエビ頭部タンパク質加水分解物の濃度依存的な抑制効果) Y. Ruttanapornvareesakul, M. Ikeda, K. Hara, K. Osatomi, K. Osako, O. Kongpun, Y. Nozaki. (Biores. Tech.97, 762-769 2006) (博士論文の主査として研究全体の構成と指導を行った) </p>
	<p> 40. “Gene structure of carp <i>Cyprinus carpio</i> cathepsin B” (コイカテプシン B の遺伝子構造) Y. Tan, K. Osatomi, and K. Hara. (Fisheries Science 72(3): P673-678 2006) (博士論文の主査として研究全体の構成と指導を行った) </p>
	<p> 41. 「マダイかまぼこの火戻りに伴う物性の低下とその微細構造」 濱田友貴、広瀬岳史、川島茜、デイシー・アロヨ・モラ、<u>原研治</u>、榎本六良、橘勝康 (日本食品化学学会誌,13, 78-82 2006) (酵素学的視点からの研究指導を行った) </p>
	<p style="text-align: right;">それ以降の審査付き原著論文 77 報</p>

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャリアガイダンス I ・社会福祉論 ・社会福祉援助技術 ・食事介助実習 ・国際理解 <p>[東筑紫短期大学 保育学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相談援助 ・社会的養護内容 ・人間関係 (指導法) ・家庭支援論 <p>[東筑紫短期大学 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉概論 <p>[東筑紫短期大学 美容ファッションビジネス学科・保育学科・食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際理解 <p>[東筑紫短期大学 専攻科 (介護福祉専攻)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会の理解 ・コミュニケーション技術
専門分野	<ul style="list-style-type: none"> ■障害者福祉 ■介護福祉教育 ■アジアの社会福祉
最終学歴	岡山大学大学院 文化科学研究科 博士課程単位取得満期退学
学位	修士 (文学) (韓国大邱大学校)
職歴	<p>慶成高等学校 専任教諭 (平成 13 年 4 月～平成 16 年 3 月)</p> <p>第一福祉大学 人間社会福祉学部 専任講師 (平成 17 年 4 月～平成 19 年 3 月)</p> <p>福岡医療福祉大学 人間社会福祉学部 准教授 (平成 19 年 4 月～平成 21 年 3 月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授 (平成 21 年 4 月～現在に至る)</p> <p>九州歯科大学 歯学部 非常勤講師 (平成 24 年 4 月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授 (平成 28 年 4 月～現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>○手話と点字を 40 年以上行い著書もあり、現場における実践力強化として、短大の社会福祉援助技術や専攻科のコミュニケーション技術で手話や点字を取り入れて実践形式で授業を行い教育効果を高めた。(平成 21 年)</p> <p>○管理栄養士を目指す学生の「食事介助実習」に関する取り組みについて (第 18 回日本介護福祉学会大会) で発表を行った。教科「食事介助実習」の学生へのアンケート調査では様々な専門職業理解が十分できた、管理栄養士に期待される役割理解もおおむね出来た、食事場面をよく観察もおおむね出来た、利用者がどんな食事が望ましいかもおおむね出来たとされており、学生による授業評価アンケートは 4.81 であった。(平成 22 年)</p>
主な研究活動	<p>【著書】</p> <p>「廃物利用教材教具の作成と使用方法」(単著、大邱大学校出版部、B5 判・188 頁 昭和 63 年 9 月)</p> <p>「人間関係論」(単著、特殊教育出版社、B5 判・296 頁 平成 1 年 10 月)</p> <p>「韓国の手話」(単著、特殊教育出版社、B5 判・269 頁 平成 2 年 1 月)</p> <p>「しいのみ学園」(単著、特殊教育出版社、B5 判・316 頁 平成 2 年 7 月)</p> <p>「集中日本語会話」(単著、ECA 学院出版部、B4 版・120 頁 平成 2 年 8 月)</p> <p>「詩集 韓国、台湾、そして日本」(単著、特殊教育出版社、B5 判・76 頁、平成 5 年 8 月)</p> <p>「老人福祉論」(単著、梓書院、A5 判・193 頁 平成 15 年 12 月)</p> <p>「実用のための韓国点字表記法」(単著、梓書院、A5 判・250 頁 平成 17 年 7 月)</p> <p>「手作りおもちゃ・親子愛情教室」(単著、大邱大学校出版部、A4 版・46 頁 平成 18 年 4 月)</p>

「見ておぼえる韓国手話の会話法」(単著、梓書院、A5判・273頁 平成18年12月)
「心あたたまるケースワークの話」(単著、大邱大学校出版部、A4版・63頁 平成19年3月)
「新・心あたたまるケースワークの話」(単著、大邱大学校出版部、A4版・65頁 平成19年12月)
「臨床ソーシャルワーク原論」(単著、大邱大学校出版部、A4版・68頁 平成20年4月)
「人間関係原論」(単著、梓書院、四六サイズ・184頁 平成20年4月)
「新・臨床ソーシャルワーク原論」(単著、大邱大学校出版部、A4版・66頁 平成20年8月)
「ソーシャルワーク実践論」(単著、大邱大学校出版部、A4版・56頁 平成20年11月)
「新・ソーシャルワーク実践論」(単著、大邱大学校出版部、A4版・58頁 平成21年2月)
「子どもの心の育ちと人間関係」(共著、保育出版社、p152～p153、p190～p191 平成21年4月)
「障害者福祉と教育」(単著、大邱大学校出版部、A4版・65頁 平成21年5月)
「子どもの養護」(共著、建帛社、p75～p89 平成21年10月)
「新障害者福祉と教育」(単著、大邱大学校出版部、A4版・56頁 平成21年10月)
「保育者が学ぶ家庭支援論」(共著、建帛社、p37～p51、P170～p171 平成23年4月)
「福祉・栄養・看護のための社会福祉論」(共著、建帛社、p106～p121 平成28年2月)
【研究紀要】
「園生の視聴覚能力の発達をさぐって」 (単著、日本愛護協会、p81～p91 昭和59年5月) 第8回ほほえみ奨励賞受賞
「韓・日老人福祉法の比較研究」 (単著、韓国大邱大学校修士論文、A5判・60頁 平成2年2月)
“Any Chance to Open the Paralympic Games Ahead of the Olympic Games” (単著、川崎医療福祉学会誌第2巻第2号、p242～p243 平成4年12月)
「殖民地下の朝鮮における夜学の研究」 (単著、川崎医療福祉学会誌第3巻第1号、p99～p103 平成5年6月)
「儒教文化圏の社会福祉(韓国における老人福祉を中心として)」 (単著、旭川荘研究年報第24巻第1号、p53～p55 平成5年3月)
「自立を目指し地域と共に生きる」 (単著、旭川荘研究年報第25巻第1号 p48～p50 平成6年6月)
「韓国の家族制度(R・ジャネリの祖先祭祀と韓国社会を参考にして)」 (単著、川崎医療福祉学会誌第2巻第4号 p153～p156 平成6年10月)
「韓国社会の転機」 (単著、川崎医療福祉学会誌第1巻第5号 p189～p192 平成7年9月)
「ひとり暮らし老人の日韓比較研究」 (単著、旭川荘研究年報第29巻第1号 p148～p149 平成10年3月)
「韓国の老人家庭奉仕員制度についての一考察」 (単著、川崎医療福祉学会誌 Vol.14 No.2 p371～p376 平成16年11月)
「韓国社会福祉の歴史(1910～1945)」 (単著、川崎医療福祉学会誌 Vol.15 No.2 p353～p366 平成17年12月)
「韓国社会福祉の歴史」 (単著、第一福祉大学紀要第3号 p241～p249 平成18年3月)
「韓国介護保険制度(テスト事業実施)から見た問題点」 (単著、第一福祉大学紀要第4号 p73～p85 平成19年3月)
「フィリピンにおける介護福祉士養成事業の一考察」 (単著、介護人材育成プラス Vol.4-No.4、p120～p126 平成19年9月)
「障害者ソーシャルワークの研究」 (単著、第一福祉大学紀要第5号 p61～p78 平成20年3月)
「韓国の障害者福祉の今後の展望と課題」 (単著、川崎医療福祉学会誌 Vol-18 No.1p109～p119 平成20年5月)

<p>「韓国における地域福祉の展開と福祉教育」 (単著、福岡医療福祉大学紀要 第6号 p131-p148 平成21年3月)</p>
<p>「韓国の地域社会福祉実践機関「地域社会福祉館」の研究」 (単著、川崎医療福祉学会誌 Vol-19 No.1P85-p92 平成21年6月)</p>
<p>「日本と韓国の介護保険制度の現状と方向性」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第6号 p31-p49 平成21年12月)</p>
<p>「社会福祉国家スウェーデンの福祉政策についての一考察 (21世紀型日本はどうあるべきか)」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第7号 p129-p144 平成22年12月)</p>
<p>「フィリピンの社会福祉政策と市民社会運動」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第7号 p145-p174 平成22年12月)</p>
<p>“Welfare and Education for the Physically-Mentally Disabled” (身体的、精神的障害がある人ための福祉と教育) (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第7号 p175-p185 平成22年12月)</p>
<p>「韓国の儒教規範と社会保障の関係」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第8号 p119-p141 平成23年12月)</p>
<p>「韓国の介護職養成所における学生の介護意識」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第8号 p143-p174 平成23年12月)</p>
<p>「国際交流に対する日韓比較研究 (国際交流のあり方について)」 (単著、東筑紫短期大学研究紀要第43号 p189-p208 平成24年12月)</p>
<p>「韓国の契と社会保障の関係」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第9号 p119-p139 平成24年12月)</p>
<p>“Relation of American Old People and Community(Real State of Sun City, Arizona)” アメリカの高齢者と地域との関係 (アリゾナ州サンシティの現状) (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第9号 p141-p154 平成24年12月)</p>
<p>「韓国の療養保護士 (ホームヘルパー)の職務満足が介護サービスの質に与える影響」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第10号 p271-p320 平成25年12月)</p>
<p>「際交流に対する日韓比較研究 (国際交流のあり方について) (2)」 (単著、東筑紫短期大学研究紀要第44号 p129-p153 平成25年12月)</p>
<p>「国際交流に対する日台比較研究 (国際交流のあり方について)」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第11号 p227-p228 平成26年12月)</p>
<p>『教科「人間関係 (指導法)」の科目別履修カルテ3年間のアンケート調査とKJ法についての一考察』 (単著、東筑紫短期大学研究紀要第45号 p257-p279 平成26年12月)</p>
<p>「社会資源情報マップの必要性和開発 (法人ネットワークの有効利用を目指す仕組みづくりへ)」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第12号 p229-p259 平成27年12月)</p>
<p>「食事介助実習の現状と課題」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第13号 p69-p93 平成28年12月)</p>
<p>「日本の大学の現実 (総合ランキングについての一考察)」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第13号 p95-p122 平成28年12月)</p>
<p>【学会発表】</p>
<p>“Any chance to Open Paralympic Game11TH ASIAN CONFERENCE ON MENTAL RETARDATION” (単著、アセアン国際知的障害者研究大会 (韓国ソウル) 平成5年8月)</p>
<p>「韓国の訪問介護員制度の現状についての報告」 (単著、第13回日本介護福祉学会(神奈川県立保健福祉大学) 平成17年10月)</p>
<p>「韓国における訪問介護員養成研修事業についての現状と課題」 (単著、福岡県ソーシャルワーカー協会 (西日本短期大学) 平成17年11月)</p>
<p>「フィリピン人介護者導入における一考察」 (単著、第33回川崎医療福祉学会 (川崎医療福祉大学) 平成19年11月)</p>

	<p>「韓国における社会福祉教育体系の現状報告」 (単著、第35回川崎医療福祉学会(川崎医療福祉大学)平成20年11月)</p> <p>「韓国における社会福祉教育の体系」 (単著、第2回福岡県ソーシャルワーカー協会定期例会(福岡医療福祉大学)平成21年7月)</p> <p>「日本と韓国の介護保険制度の比較研究」 (単著、第17回日本介護福祉学会大会(文京学院大学)平成21年9月)</p> <p>「日本における外国人介護労働者に関する一考察」 (単著、2009 亞洲産業競争力興企業経営管理国際学術検討会(台湾、日華金典酒店、南海技術大学)平成21年10月)</p> <p>「韓国の社会福祉教育についての一考察」 (単著、2009 年度日本社会福祉教育学会第5回大会(鹿児島国際大学)平成21年11月)</p> <p>『管理栄養士を目指す学生の「食事介助実習」に関する取り組みについて』 (単著、第18回日本介護福祉学会大会(岡山県立大学)平成22年9月19日)</p> <p>「福岡県介護福祉士会平成22年制度政策検討委員会取り組みについて～キャリアパスモデル(共著、福岡県介護福祉士会(案)について～第8回日本介護学会大会平成22年10月)</p> <p>「日本の障害者自立支援法の問題点」 (単著、第33回東北亜福祉経済共同体国際学術検討会(韓国釜山市長善綜合福祉共同体大講堂)平成23年5月)</p> <p>「社会資源マップを活用した国際環境作り」 (単著、2012 福祉ビジネスの国際連携会議(韓国釜山市長善綜合福祉共同体大講堂)平成24年7月)</p> <p>「社会資源マップを活用した国際環境作り 2」 (単著、「東亜の福祉ビジネスと産業経営」国際学術検討会(韓国済州島)平成26年7月)</p> <p>【投稿】 「障害者が望む法律とは何か」 (単著、手をつなぐ育成会(ハートフルネット)平成22年2月)</p>
主な社会活動	<ul style="list-style-type: none"> 介護認定審査会委員(福岡県筑紫地区) (平成18年4月～平成21年3月) 判定内容として要介護(支援)状態等に該当するか否かの判定、該当する要介護状態区分、要介護状態等が特定疾患によるものか否か(第2号被保険者の場合)の二次判定を行う。 日韓研究交流会アドバイザー (社会福祉法人北九州市手をつなぐ育成会) (平成22年7月10日) 韓国ではすでに高齢者福祉は措置制度から契約制度に移行し、障害者福祉も後に続こうとしている。入所施設についても大規模な施設をなくす方向性が提案されていて、福祉の市場化や脱施設化、地域生活支援、日本の障がい者総合福祉法(仮称)の動きなどについて活発な意見交換を行う。
所属学会	<p>川崎医療福祉学会 (平成4年4月～現在に至る)</p> <p>日本介護学会 (平成17年4月～現在に至る)</p> <p>日本介護福祉学会 (平成17年4月～現在に至る)</p> <p>福岡県介護福祉学会 (平成17年4月～現在に至る)</p>
受賞歴	<p>第8回ほほえみ奨励賞「園生の視聴覚能力の発達をさぐって」 (日本愛護協会) (昭和59年5月)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食品加工学 ・食品加工学実習 ・基礎生物学 ・食品機能論 ・食品学実験 I ・専門ゼミナール II ・卒業論文 ・管理栄養士演習 I、管理栄養士演習 II <hr/> <p>[九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康科学特別講義 ・健康科学研究法特論演習 ・食品学特論 I、食品学特論 II ・食品加工学特論 I、食品加工学特論 II 	
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■生化学 ■分子生物学 ■タンパク質化学 ■食品加工学 ■食品機能学 	
最 終 学 歴	鹿児島大学 大学院 農学研究科修了	
学 位	農学博士 (九州大学)	
職 歴	<p>西南女学院短期大学 食物栄養科 講師 (昭和 50 年 4 月～昭和 56 年 3 月)</p> <p>西南女学院短期大学 食物栄養科 助教授 (昭和 56 年 4 月～平成 8 年 3 月)</p> <p>カナダ・カルガリー大学医学部 客員研究員 (昭和 60 年 10 月～昭和 61 年 9 月)</p> <p>鹿児島大学 農学部 助教授 (平成 8 年 4 月～平成 13 年 2 月)</p> <p>鹿児島大学 農学部 教授 (平成 13 年 3 月～平成 13 年 3 月)</p> <p>鹿児島大学大学院 連合農学研究科 教授 (平成 13 年 4 月～平成 28 年 3 月)</p> <p>鹿児島大学大学院 連合農学研究科 副研究科長 (平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月)</p> <p>鹿児島大学大学院 連合農学研究科 研究科長 (平成 25 年 3 月～平成 28 年 3 月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 教授 (平成 28 年 4 月 1 日～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学大学院健康科学研究科 教授 (同 上)</p> <p>鹿児島大学 名誉教授 (平成 28 年 4 月～現在に至る)</p>	
教育上の業績	<p>○西南女学院短期大学で栄養士養成の教育に携わった。</p> <p>○鹿児島大学農学部生物資源化学科および大学院にて多くの学士、修士を輩出した。</p> <p>○鹿児島大学大学院連合農学研究科にて博士課程の運営・管理に携わりながら教育システムの構築し、多くの博士を輩出した。</p>	
主な研究活動	<p>【論文】</p> <p>タンパク質の構造と機能の研究を中心に生化学、分子生物学、発生生物学アプローチを行った。主な発表論文は以下の通りである。</p> <hr/> <p>1. Egg-yolk trypsin inhibitor identical to albumen ovomucoid. (共著) Biochimica et Biophysica Acta 788:117-123(1984)</p> <p>2. Purification and characterization of benzoyl-L-tyrosine ethyl ester hydrolase from the yolk sac membrane of chicken egg. (共著) Biochemistry and Cell Biology 64: 543-547(1986)</p> <p>3. Flow of egg white ovalbumin into the yolk sac during embryogenesis. (共著) Biochimica et Biophysica Acta 992: 400-403(1989)</p>	

4. **Comparison of egg and embryo proteins and a trial to detect proteolytic activities in eggs of *Bombyx mori*.** (共著)
Comparative Biochemistry and Physiology 96B: 253-256 (1990)
5. **Gene structure and multiple mRNA species of *Drosophila melanogaster* aldolase generating three isozymes with different enzymatic properties.** (共著)
Journal of Biochemistry 12:677-688(1992)
6. **Isolation and characterization of cDNA and genomic promoter region for a heat shock protein 30 from *Aspergillus nidulans*.** (共著)
Biochimica et Biophysica Acta 1219: 555-558 (1994)
7. **Analysis of the in vitro translation product of a novel-type *Drosophila melanogaster* aldolase mRNA in which two carboxyl-terminal exons remain unsliced.**
Archives of Biochemistry and Biophysics 323:361-366.(1994)
8. **A proteinase inhibitor from egg yolk of hen is an ovoidin analog.** (共著)
Biochimica et Biophysica Acta 1295:96-102.(1996)
9. **Ovalbumin in developing chicken eggs migrates from egg white to embryonic organs while changing its conformation and thermal stability.** (共著)
Journal of Biological Chemistry 274:11030-11037.(1999)
10. **Ovotransferrin antimicrobial peptide(OTAP-92) kills bacteria through a membrane damage mechanism.** (共著)
Biochimica et Biophysica Acta 1523:196-205.(2000)
11. **Occurrence of ovalbumin in ovarian yolk of the chicken during oogenesis.** (共著)
Biochimica et Biophysica Acta 1526:1-4. (2001)
12. **Oviductin, the oviductal protease that mediates gamete interaction by affecting the vitelline coat in *Bufo japonicus*: its molecular cloning and analyses of expression and posttranslational activation.** (著)
Developmental Biology 243:176-184. (2002)
13. **Perchloric acid-soluble protein regulates cell proliferation and differentiation in the spinal cord of chick embryo.** (共著)
FEBS letters 579: 2416-2420.(2005)
14. **Thermostabilized ovalbumin that occurs naturally during development accumulates in embryonic tissues.** (共著)
Biochimica et Biophysica Acta 1723:106-113. (2005)
15. **Transition of ovalbumin to thermostable structure entails conformational changes involving the reactive center loop.** (共著)
Biochimica et Biophysica Acta 1770:5-11. (2007)
16. **Aggregates with lysozyme and ovalbumin show features of amyloid-like fibrils.** (共著)
Biochemistry and Cell Biology 89: 533-544. (2011)
17. **Analysis of core region from egg white lysozyme forming amyloid fibrils.** (共著)
International Journal of Biological Science 9: 219-227. (2013)
18. **Amyloid fibril formation in vitro from halophilic metal binding protein: its high solubility and reversibility minimized formation of amorphous protein aggregations.** (共著) Protein Science 22: 1582-1591. (2013)
19. **Amyloidogenic lysozymes accumulate in the endoplasmic reticulum accompanied by the augmentation of ER stress signals.** (共著)
Biochimica et Biophysica Acta 1850:1107-1119. (2015)
20. **Amyloid fibril formation from a 9 amino acid peptide, 55th-63rd residues of human lysozyme.** (共著)
International Journal of Biological Macromolecule 80:208-216. (2015)
21. **Lysozyme Mutants Accumulate in Cells while Associated at their N-terminal Alpha-domain with the Endoplasmic Reticulum Chaperone GRP78/BiP.** (共著)
International Journal of Biological Science 12: 184-197. (2016)

所 属 学 会	日本生化学会	(昭和 50 年 9 月～現在に至る)
	同評議員	(平成 14 年～現在に至る)
	同代議員	(平成 28 年～現在に至る)
	日本生化学会九州支部 (評議員)	(平成 14 年～現在に至る)
	日本農芸化学会	(昭和 48 年 9 月～現在に至る)
	同評議員	(平成 22 年～平成 23 年)
	同代議員	(平成 24 年～平成 25 年)
	日本農芸化学会西日本支部参与	(平成 18 年～現在に至る)
	日本分子生物学会	(昭和 63 年 12 月～現在に至る)

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	<p>【食物栄養学部 食物栄養学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食品学総論 ・食品学各論 ・食物とアレルギー ・食品バイオテクノロジー ・食品の官能評価・鑑別演習 ・食品基礎実験 ・食品学実験Ⅰ（集中）、食品学実験Ⅱ ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ ・専門ゼミナールⅡ ・卒業論文 <p>【リハビリテーション学部 理学療法学科、作業療法学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食と健康
専門分野	<p>■食品学</p> <p>■食品機能学</p>
最終学歴	九州大学大学院 農学研究科博士課程 農芸化学専攻（農学博士）
学位	農学博士（九州大学、農博甲第315号）
職歴	<p>茨城大学農学部教務員（昭和54年12月～昭和55年2月）</p> <p>茨城大学農学部助手（昭和55年3月～昭和62年7月）</p> <p>米国カンザス州立大学博士研究員（昭和61年7月～昭和62年7月）</p> <p>茨城大学農学部助教授（昭和62年8月～平成12年12月）</p> <p>東京農工大学大学院連合農学研究科助教授併任（平成3年4月～平成13年3月）</p> <p>筑波大学非常勤講師（平成8年9月～平成28年3月）</p> <p>茨城大学農学部教授（平成13年1月～平成28年3月）</p> <p>東京農工大学大学院連合農学研究科教授併任（平成13年1月～平成28年3月）</p> <p>茨城大学農学部資源生物科学科長 ・大学院農学研究科資源生物科学専攻長（平成17年4月～平成18年3月）</p> <p>茨城大学教育研究評議会評議員・農学部副学部長（平成24年4月～平成26年3月）</p> <p>茨城大学定年退職（平成28年3月）</p> <p>茨城大学名誉教授（平成28年4月～現在に至る）</p> <p>九州栄養福祉大学食物栄養学部教授（平成29年4月～現在に至る）</p>
教育上の業績	<p>○茨城大学農学部・農学研究科において、農学（主に食品科学分野）の教育研究に携わり、多くの学士・修士・博士の人材養成を行った。 （昭和54年12月～平成28年3月）</p> <p>○茨城大学農学部における授業参観対象の科目（食品分子機能学、機能性食品化学）に選定され、他の教員の参観を受け、高い評価を受けた。 （平成26年4月～平成28年3月）</p>
主な研究活動	<p>【著書】</p> <p>「機能性食品の研究」荒井総一監修、分担執筆 p.187-192 「抗ウイルスタンパク質としてのアボカドシスタチンの精製および特性」学会出版センター（1995年11月）</p> <p>「Animal Cell Technology: Basic & Applied Aspects」（動物細胞工学：基礎と応用）Y. Kitagawa 他編、分担執筆 p.311-315 「Preparation of a bispecific antibody to ovomucoid and horseradish peroxidase」Kluwer Academic Publishers（1999年10月）</p> <p>「美容食品の開発と展望」猪居武監修、分担執筆 p.221-233 「8.2 ローヤルゼリー」シーエムシー出版（2004年3月）</p>

	<p>「食品機能性の科学」西川研次郎監修、分担執筆 p.734-738 「第6章動物性機能性成分（第1節概説、第2節ローヤルゼリー）」産業技術サービスセンター（2008年4月）</p> <p>「機能性ペプチドの開発最前線」有原圭三監修、分担執筆 p.75-85 「第9章食品で注目されるペプチドの機能」シーエムシー出版（2015年4月）</p> <p>「機能性食品開発のための初期評価試験プロトコール集」山本万里監修、分担執筆「第Ⅲ編 成分単離・同定、作用機序解析、第1章成分単離・同定 1. タンパク質、2. ペプチド」シーエムシー出版（印刷中）</p>
	<p>【学術論文等】</p> <p>350-kDa royal jelly glycoprotein (apisin), which stimulates proliferation of human monocytes, bears the B1-3 galactosylated N-glycan: analysis of the N-glycosylation site. (ヒト単球細胞の増殖を促進するローヤルゼリータンパク質アピシンはB1-3ガラクトシル化N-グリカンを持つ), M. Kimura, Y. Kimura, K. Tsumura, K. Okihara, H. Sugimoto, H. Yamada, M. Yonekura, <i>Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry</i>, 67, 2055-2058 (2003年9月)</p> <p>Isolation and properties of antioxidative peptides from water-soluble royal jelly protein hydrolysate. (水溶性ローヤルゼリータンパク質分解物からの抗酸化性ペプチドの単離と特性), H. Guo, Y. Kouzuma, M. Yonekura, <i>Food Science and Technology Research</i>, 11, 222-230 (2005年5月)</p> <p>大豆ホエイおよびオカラたん白質からの生理機能性ペプチドの単離と応用(第三報), 米倉政実, 市村妙子, 西川実希, <i>大豆たん白質研究</i>, 8, 97-102 (2005年8月)</p> <p>Purification, characterization, and cDNA cloning of a Bowman-Birk type trypsin inhibitor from <i>Apios americana</i> Medikus tubers. (アピオス塊茎からのBowman-Birk型トリプシンインヒビターの精製、特徴付け及びcDNAクローニング), Y. Zhang, Y. Kouzuma, T. Miyaji, M. Yonekura, <i>Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry</i>, 72, 171-178 (2008年1月)</p> <p>Proteomics of two cultivated mushrooms <i>Sparassis crispa</i> and <i>Hericiium erinaceum</i> provides insight into their numerous functional protein components and diversity. (2種の食用キノコであるハナヒラタケとヤマブシタケのプロテオーム解析により多様な機能性タンパク質の情報が提供できる), K. Horie, R. Rakwal, M. Hirano, J. Shibato, H.W. Nam, Y.S. Kim, Y. Kouzuma, G.K. Agrawal, Y. Masuo, M. Yonekura, <i>Journal of Proteome Research</i>, 7, 1819-1835 (2008年5月)</p> <p>Comprehensive royal jelly (RJ) proteomics using one- and two-dimensional proteomics platforms reveals novel RJ proteins and potential phospho/glycoproteins. (一次元・二次元ゲル電気泳動と質量分析によるローヤルゼリーのプロテオーム解析により新規なタンパク質やリン・糖タンパク質を解明) T. Furusawa, R. Rakwal, H.W. Nam, J. Shibato, G.K. Agrawal, Y.S. Kim, Y. Ogawa, Y. Yoshida, Y. Kouzuma, Y. Masuo, <u>M. Yonekura</u>, <i>Journal of Proteome Research</i>, 7, 3194-3229 (2008年8月)</p> <p>Structure and properties of antioxidative peptides derived from royal jelly protein. (ローヤルゼリータンパク質由来の抗酸化性ペプチドの構造と特性) H. Guo, Y. Kouzuma, <u>M. Yonekura</u>, <i>Food Chemistry</i>, 113, 238-245 (2009年3月)</p> <p>Identification of a royal jelly glycoprotein that carries unique complex-type N-glycans harboring the T-antigen (Gal β 1-3GalNAc) unit. (T-抗原(Gal β 1-3GalNAc)ユニットを含む混合型N-グリカンを持つローヤルゼリー糖タンパク質の同定) Y. Kimura, H. Nagai, M. Miyamoto, M. Kimura, M. Yonekura, <i>Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry</i>, 74, 2148-2150 (2010年10月)</p> <p>Purification and cDNA cloning of a lectin and a lectin-like protein from <i>Apios americana</i> Medikus tubers. (アピオス塊茎のレクチン及びレクチン様タンパク質の精製とcDNAクローニング) Y. Kouzuma, S. Irie, R. Yamazaki, M. Yonekura, <i>Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry</i>, 78, 574-581 (2014年5月)</p>

	<p> Immature seed endosperm and embryo proteomics of the lotus (<i>Nelumbo nucifera</i> Gaertn.) by one-dimensional gel-based tandem mass spectrometry and a comparison with the mature endosperm proteome. (一次元ゲル電気泳動と質量分析を用いたハス未熟種子の胚乳と胚芽のプロテオーム解析と成熟種子との比較) C.F. Moro, Y. Fukao, J. Shibato, R. Rakwal, G.K. Agrawal, S. Shioda, Y. Kouzuma, M. Yonekura, <i>Proteomes</i>, 3, 184-235 (2015年8月) </p> <p style="text-align: right;">他 審査制学術論文 72 編</p>
	<p>【学会発表】</p>
	<p> アピオス塊茎のβ-アミラーゼの分離精製、性質および構造解析 日野ちはる, 井下智香子, 上妻由章, 米倉政実, 日本農芸化学会 2013 年度大会(2013 年 3 月) </p>
	<p> ローヤルゼリータンパク質アピシン及びその構成成分のヒト組織球性リンパ腫細胞株 (U937) の増殖に対する作用 仙波美紗, 上妻由章, 米倉政実, 日本農芸化学会 2013 年度大会 (2013 年 3 月) </p>
	<p> デキストラン硫酸ナトリウムで誘発したヒト腸管上皮細胞株 Caco-2 の細胞傷害に対するローヤルゼリータンパク質の影響 松浦遼太郎, 村松和香, 上妻由章, 米倉政実, 日本農芸化学会 2014 年度大会 (2014 年 3 月) </p>
	<p> アピオス塊茎由来ポリガラクトソナーゼインヒビター (PGIP) の分離精製、性質と cDNA クローニング 劉佳, 米倉政実, 上妻由章, 日本農芸化学会 2015 年度大会 (2015 年 3 月) </p>
	<p> プロテオミクスでローヤルゼリーの食品機能を探る 米倉政実, 日本プロテオーム学会 2015 年会 (2015 年 7 月) </p>
	<p> ローヤルゼリータンパク質の特徴と機能 米倉政実, ミツバチ科学, 19, 15-22 (1998 年 3 月) </p>
	<p> 納豆菌及び納豆菌プロテアーゼを利用した大豆及びピーナッツアレルギーの低減化技術の開発 米倉政実, 平成 11 年度食品中の微量物質制御等安全性確保技術の開発事業開発研究報告書, 75-99 (2000 年 3 月) </p>
	<p> ローヤルゼリー蛋白質由来の抗酸化性ペプチドの機能解析に関する研究 増島修平, 米倉政実, 平成 13 年度ローヤルゼリーに関する研究報告書, 39-49 (2002 年 4 月) </p>
	<p> ローヤルゼリータンパク質由来ペプチドの活性酸素防御作用に関する研究 泉宏樹, 米倉政実, 平成 19 年度ローヤルゼリーに関する研究報告書, 11-22 (2008 年 5 月) </p>
	<p> ローヤルゼリータンパク質のプロテオーム解析 古澤貴子, 米倉政実, 平成 20 年度ローヤルゼリーに関する研究報告書, 11-27 (2009 年 5 月) </p>
	<p> ローヤルゼリーのタンパク質プロファイルに及ぼす採乳時間や蜜源植物等の影響 古澤貴子, 米倉政実, 平成 21 年度ローヤルゼリーに関する研究報告書, 11-22 (2010 年 4 月) </p>
	<p> ローヤルゼリーの抗酸化成分およびその作用の解析, 上村知広, 米倉政実 平成 22 年度ローヤルゼリーに関する研究報告書, 13-27 (2011 年 4 月) </p>
	<p> ローヤルゼリータンパク質・ペプチドの生理機能の解析 —マウス潰瘍性大腸炎に対する抑制作用— 鈴木史恵, 米倉政実, 平成 23 年度ローヤルゼリーに関する研究報告書, 15-27 (2012 年 4 月) </p>
	<p> ローヤルゼリータンパク質分解物の機能性 米倉政実, 冷凍, 90, 29-35 (2015 年 3 月) </p>
	<p> 未利用タンパク質資源からの機能性ペプチドの開発 米倉政実, 月刊ファインケミカル, 45, 25-32 (2016 年 9 月) </p> <p style="text-align: right;">他 学会発表(2004 年以降)47 件、総説・報告書 26 編</p>
<p>主な社会活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・茨城県、茨城県日立市、土浦市、阿見町などの市民講座講演会、老人大学講座、公民館講座の講師として、食品に関する講演を行った。また農業関係団体、食品関連協会、食品企業などから講演やシンポジウム講師を依頼され、ローヤルゼリーや食品の機能などについて講演を行った。 (平成 2 年 4 月～平成 28 年 3 月) ・茨城大学農学部においては担当する授業のすべてを市民に対する公開授業として提供し、また高校出前授業を多数行った。 (平成 12 年 4 月～平成 28 年 3 月)

	<ul style="list-style-type: none"> ・茨城県中小企業振興公社専門家派遣事業テクノエキスパート (平成8年9月～平成28年3月) ・日本農芸化学会欧文誌、日本食品科学工学会欧文・和文誌、国際学術雑誌 (Food Chem., J. Food Biochem., J. Proteome Res.他 26誌) 論文査読委員 (平成9年4月～現在に至る) ・茨城県阿見町教育委員会教育委員・教育委員長 (平成12年10月～平成28年3月) ・東京農工大学農学部附属硬蛋白質利用研究施設参与研究員 (平成15年4月～平成28年3月) ・茨城県「いばらき研究開発推進事業」専門審査員 (平成17年9月～平成20年3月) ・科学技術振興機構シーズ発掘試験査読評価委員 (平成19年4月～平成22年3月) ・科学技術振興機構研究成果最適展開支援事業専門委員 (平成22年4月～平成29年3月)
所属学会	<ul style="list-style-type: none"> 日本農芸化学会会員 (昭和49年2月～現在に至る) 日本生化学会会員 (昭和52年5月～現在に至る) 日本食品科学工学会会員 (平成4年3月～現在に至る) 日本食品化学学会会員 (平成9年6月～現在に至る) 日本農芸化学会評議員 (平成21年4月～平成23年5月)
受賞歴	<ul style="list-style-type: none"> 地方教育行政の充実発展に関する業績に対して文部科学大臣表彰 (平成26年10月)

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担当科目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栄養教育論Ⅰ、栄養教育論Ⅱ、栄養教育論Ⅲ ・栄養教育論実習Ⅰ ・専門ゼミナールⅡ ・卒業論文 ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ <p>-----</p> <p>[九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨床栄養学特論Ⅰ、臨床栄養学特論Ⅱ ・栄養教育特論Ⅰ、栄養教育特論Ⅱ ・健康科学研究法特論 ・特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ 	
専門分野	<ul style="list-style-type: none"> ■臨床栄養学 ■応用栄養学 ■栄養教育 	
最終学歴	山口県立山口女子大学 家政学部食物栄養学科	
学位	学士(家政学)	
職歴	<p>医療法人博愛会 宇部記念病院 管理栄養士 (昭和54年3月～昭和56年11月)</p> <p>国立福岡中央病院 管理栄養士・栄養主任 (昭和57年4月～平成6年6月)</p> <p>国立療養所 南福岡病院 栄養係長 (平成6年7月～平成14年3月)</p> <p>国立療養所 東佐賀病院 栄養管理室長 (平成14年4月～平成16年3月)</p> <p>国立療養所 東佐賀病院附属看護学校 講師 (平成14年4月～平成16年3月)</p> <p>(独)国立病院機構 福岡病院 栄養管理室長 (平成16年4月～平成22年3月)</p> <p>(独)国立病院機構本部 九州ブロック事務所 栄養専門職 (平成18年4月～平成27年6月)</p> <p>(独)国立病院機構 九州医療センター 栄養管理室長 (平成22年4月～平成29年3月)</p> <p>(独)国立病院機構 九州医療センター附属福岡看護助産学校 看護科 講師 (平成22年4月～平成29年3月)</p> <p>(独)国立病院機構 九州医療センター附属福岡看護助産学校 助産科 講師 (平成22年4月～平成29年3月)</p> <p>公立大学法人福岡女子大学 国際文理学部食・健康学科 非常勤講師 ○病態栄養学 担当 (平成25年7月・平成26年7月)</p> <p>公立大学法人福岡女子大学大学院 人間環境科学研究科 人間環境科学専攻修士課程 客員臨床准教授 ○臨床栄養師実習 担当 (平成24年4月～平成29年3月)</p> <p>原看護専門学校 非常勤講師 (平成29年4月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部食物栄養学科 教授 (平成29年4月～現在に至る)</p>	
教育上の業績	<p>○国立病院、及び国立機構病院附属看護学校 学生に対し、病態栄養学、代謝栄養学の講義を行った (平成14年4月～平成16年3月、22年4月～平成29年3月)</p> <p>○国立機構病院附属助産学校 学生に対し、母子の健康科学について講義を行った (22年4月～平成29年3月)</p> <p>○福岡女子大学 学生に対し、病態栄養学の講義を行った (平成25年、平成26年)</p> <p>○福岡女子大学大学院 大学院生に対し、臨床栄養師育成のための講義、および臨床栄養実践指導を行った (平成24年4月～平成28年3月)</p> <p>○国立病院機構本部 九州ブロック事務所栄養専門職として九州機構病院新採用栄養士に対する新採用者研修や栄養部門責任者研修等の企画・運営・実施を行った (平成18年4月～平成27年6月)</p>	

	<p>○熊本県 尚綱大学 学生に対し、進路講和「専門職ガイダンス～病院栄養士の立場から」の講義を行った (平成 28 年 7 月)</p> <p>○食物アレルギーに関し、県内外の保健所、学校、学会等の依頼を受け教育活動を行った (平成 17 年～平成 29 年)</p> <p>○「食物アレルギーの栄養指導の手引き」検討委員会委員として指導の手引き、および改訂版の策定に携わった (2008 年、2011 年)</p>
<p>主な研究活動</p>	<p>【著書】</p> <p>メディカル管理栄養士のためのステップアップマニュアル (共著) 第一出版：2004 年 7 月 チャイルドヘルス 食物アレルギーなんでも Q&A 診断と治療社：10 月号：2006 年 10 月 食物アレルギーの栄養指導の手引き 2008 (共著) 厚生労働科学研究班：2008 年 ホップ・ステップ！食物アレルギー教室 (共著) 南江堂：2008 年 1 月 今日の病態栄養療法 改訂第 2 版 (共著) 南江堂：2008 年 4 月 重症心身障害児 (者) 看護ガイドライン 2009 (共著) 協和企画：2009 年 3 月 小児看護とアレルギー疾患 (共著) 中山書店：2011 年 9 月 食物アレルギーの栄養指導の手引き 2011 (共著) 厚生労働科学研究班：2012 年 食物アレルギーの栄養指導 (共著) 医歯薬出版：2012 年 2 月 サプリメント・健康食品について 季刊「きんむ医」No163.：梓書院：2013 年 3 月 仙骨部、尾骨部の褥瘡発生と栄養管理・排便状況の関連性について ヒューマンニュートリション：第 29 号：日本医療企画：2014 年 5 月 脂質異常症 (高脂血症) 患者への献立展開 ニュートリション・ケア第 7 巻 11 号：メディカ出版：2014 年 11 月 食物アレルギー患者向けの献立作成のコツ ニュートリション・ケア第 9 巻 3 号：メディカ出版：2016 年 3 月 治療食アレンジレシピ ニュートリション・ケア第 10 巻 5 号：メディカ出版：2017 年 5 月</p>
	<p>【学術論文等】</p> <p>食物アレルギーの食事療法～病棟と外来における食事療法 日本栄養士会雑誌：第 51 巻：2008.12</p> <p>食物アレルギーへの対応と専門栄養士の必要性 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌：第 8 巻 第 3 号：2010.9</p> <p>入院支援センターにおける早期からの栄養介入の効果について 日本医療マネジメント学会誌：16 巻 3 号：2015.12</p> <p>食物経口負荷試験に際し、保護者の不安軽減のために 日本小児喘息難治・アレルギー疾患学会誌 第 14 巻 3 号：2016.12</p> <p>【学会発表】</p> <p>「低栄養患者への栄養療法施行による改善効果の検討」第 15 回日本呼吸管理学会 春田典子、池本美智子、野上裕子他 2005 年 7 月、仙台</p> <p>「COPD 低栄養患者における栄養指標について」 井上聡美、池本美智子、麻生博史他 第 4 回九州国立病院管理栄養士協議会栄養管理学会：2006 年 2 月、福岡</p> <p>「除脂肪体重からみる重症心身障害児 (者) 適正エネルギー量の検討」 上野佳代子、池本美智子、本村知華子他 第 61 回国立病院総合医学会：2005 年 11 月、名古屋</p> <p>「食物アレルギー教室受講による患児母親の意識の変化」 池本美智子、柴田瑠美子他 第 25 回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会：2008 年 5 月、奈良</p> <p>「地域連携室と連携した後期高齢者退院時栄養・食事管理指導のとりくみ」 池本美智子 第 6 回九州国立病院管理栄養士協議会栄養管理学会：2008 年 7 月、福岡</p> <p>「食物アレルギーの現状と対応～病院栄養士の立場で～」 池本美智子 第 55 回日本栄養改善学会学術総会：2008 年 9 月、鎌倉</p> <p>「口腔機能改善を目的とした訓練用ゼリーの使用経験」 戸次真知子、池本美智子、松本吉洋他 第 31 回九州地区重症心身障害研究会：2009 年 3 月、鹿児島</p>

<p>「食物アレルギー児の QOL 向上のために～病院栄養士の立場で」 池本美智子 第 8 回食物アレルギー研究会：2008 年 2 月、東京</p>
<p>「アレルギー除去食に関するインシデント防止の取り組み」 井上聡美、池本美智子、小田嶋博他 第 26 回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会：2009 年 5 月、福岡</p>
<p>「国立病院機構本部九州ブロック事務所における職種横断的 NST 研修の取り組みについて」 池本美智子、吉住秀之他 第 11 回日本医療マネジメント学会：2008 年 6 月、長崎</p>
<p>「栄養管理における各職種の役割と職種間の連携～管理栄養士の立場から～」 池本美智子 日本医療マネジメント学会第 9 回福岡支部会：2009 年 11 月、福岡</p>
<p>「重症心身障害児（者）の栄養評価における皮下脂肪厚計測の有用性について」 上野佳代子、池本美智子、本村知華子他 第 7 回国立病院栄養研究学会：2010 年 1 月、東京</p>
<p>「食物アレルギーへの対応と専門栄養士の必要性」 池本美智子 第 27 回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会：2010 年 5 月、東京</p>
<p>「当院における HIV 感染患者に対する食事指導の現状と効果」 増田香織、池本美智子、山本政弘他 第 24 回日本エイズ学会学術集会総会：2010/11/25、東京</p>
<p>「若年健常女性の食塩摂取量の実態および食生活との関連についての検討」 増田香織、池本美智子、土橋卓也他 第 32 回日本高血圧学会総会：2010/10/17、福岡</p>
<p>「肝癌合併 C 型肝硬変患者の栄養摂取量の現状と問題点」 戸次真知子、池本美智子、中牟田誠他 第 14 回日本病態栄養学会年次学術集会：2011/1/15-16、横浜</p>
<p>「ペグインターフェロン・リバビリン併用療法導入 C 型慢性肝炎患者の栄養素摂取量の推移（第 2 報）」 一ノ瀬雅子、池本美智子、中牟田誠他 第 14 回日本病態栄養学会年次学術集会：2011/1/15-16、横浜</p>
<p>「高血圧患者における生活習慣の修正：栄養食事指導の課題」 増田香織、池本美智子、土橋卓也他 第 14 回日本病態栄養学会年次学術集会：2011/1/15-16、横浜</p>
<p>「当院における閉塞性動脈硬化症患者に対する NST 介入後のアウトカムについて」 池本美智子、増田香織、福泉公仁隆他 第 26 回日本静脈経腸栄養学会：2011/2/17-18、名古屋</p>
<p>「市販食品および加工食品、外食店舗における食塩含有量表示の実態調査」 増田香織、池本美智子、土橋卓也他 第 34 回日本高血圧学会総会：2011/10/20-22、宇都宮</p>
<p>「電子カルテを用いた栄養サポートチーム加算の現状と今後の課題」 池本美智子、増田香織、福泉公仁隆他 第 13 回日本医療マネジメント学会：2011/6/25、京都</p>
<p>「急性期病院における NST 介入後の再入院症例の栄養管理上の課題」 増田香織、池本美智子、福泉公仁隆他 第 27 回日本静脈経腸栄養学会：2012/2/23-24、神戸</p>
<p>「市販食品における食塩含有量表示の実態からみた減塩指導の課題」 増田香織、池本美智子、土橋卓也他 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会：2012/1/14-15、京都</p>
<p>「肝硬変患者における内臓脂肪面積の解析」 戸次真知子、池本美智子、中牟田誠他 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会：2012/1/14-15、京都</p>
<p>「急性期病院における NST 介入患者の栄養情報提供の有用性について」 池本美智子、増田香織、福泉公仁隆他 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会：2012/1/14-15、京都</p>
<p>「C 型慢性肝炎に対するペグインターフェロン+リバビリン併用療法時における体組成・栄養素摂取量の推移：ジェノタイプ別による比較」 一ノ瀬雅子、池本美智子、中牟田誠他 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会：2012/1/14-15、京都</p>
<p>「市販食品における食塩含有量表示の実態と表示に対する一般市民の認識について」 増田香織、池本美智子、土橋卓也他 日本高血圧学会 第 1 回臨床高血圧フォーラム：2012/5/12、大阪</p>
<p>「食物アレルギーに関与するコメディカルパートナーをいかに育てるか～医療施設に求められる管理栄養士とは～」 池本美智子 第 24 回日本アレルギー学会春季臨床大会：2012/5/12、大阪</p>
<p>「食事調査による北部九州地域の離島住民の食塩摂取量とその関連因子の調査」 増田香織、池本美智子、土橋卓也他 第 35 回日本高血圧学会総会：2012/9/22、広島</p>
<p>「地域一体型 NST への取り組み～栄養情報提供の有用性について～」 池本美智子、増田香織、福泉公仁隆他 第 14 回日本医療マネジメント学会学術総会：2012/10/12、佐世保</p>

<p>「国立病院機構本部九州ブロック事務所における食物アレルギー専門研修の取り組みについて」 池本美智子、末松栄一他第 66 回国立病院総合医学会：2012/11/16、京都</p>
<p>「HIV/AIDS 患者における栄養指導の現状と課題」 増田香織、池本美智子、山本政弘他 第 9 回国立病院栄養研究学会：2013/1/26、岡山</p>
<p>「地域連携を考慮した急性期病院における NST の取り組みについて」 池本美智子、増田香織、福泉公仁隆他 日本医療マネジメント学会第 13 回福岡支部学術集会：2013/2/2、福岡</p>
<p>「急性期病院における管理栄養士の病棟業務を考える」 池本美智子 日本健康・栄養システム学会第 12 回九州地方会：2013/11/23、福岡</p>
<p>「HIV 感染者における栄養指導の効果について」 淵邊まりな、池本美智子、山本政弘他 第 33 会食事療法学会：2014/03/8-9、長崎</p>
<p>「これからのキャリアマネジメントを考える～栄養部門における人材育成～」 池本美智子 第 9 回医療技術学会：2014/02/1、福岡</p>
<p>「栄養管理の地域連携に向けた情報発信と情報共有化の取り組み」 池本美智子、徳永真矢、福泉公仁隆他 日本医療マネジメント学会第 13 回九州・山口連合大会：2014/09/26-27、鹿児島</p>
<p>「栄養ケア・マネジメントが実施できる管理栄養士の育成を目指して」 池本美智子 第 13 回健康・栄養システム学会九州地方会：2014/11/23、鹿児島</p>
<p>「当院における造血器疾患患者に対する栄養管理の現状と課題」 池本美智子、徳永真矢、福泉公仁隆他 第 29 回日本静脈経腸栄養学会：2014/02/27-28、横浜</p>
<p>「入院支援センターにおける早期からの栄養介入効果について」 池本美智子、徳永真矢、竹尾貞徳他 第 16 回日本医療マネジメント学会：2014/06/14、岡山</p>
<p>「妊娠初期妊婦におけるサプリメントを含む食習慣、および葉酸摂取量と血清葉酸値についての検討」 池本美智子、久保紀夫他 第 18 回日本病態栄養学会年次学術集会：2015/1/10-11、京都</p>
<p>「急性期病院における NST 介入患者に対する握力測定の検討」 徳永真矢、池本美智子、福泉公仁隆他 第 30 回日本静脈経腸栄養学会学術集会：2015/2/12-13、神戸</p>
<p>「MNA®-SF による肝疾患患者の栄養状態の判定結果と予後の関連についての検討」 北向由佳、池本美智子他 第 13 回九州国立病院管理栄養士協議会栄養管理学会：2015/9/5、福岡</p>
<p>「実習終了アンケートからみる当院臨地実習カリキュラムの評価について」 池本美智子 第 62 回日本栄養改善学会：2015/9/24-26、福岡</p>
<p>「栄養士臨地実習の一環としての周産期センターデザートバイキングの効果について」 池本美智子、淵邊まりな、佐藤和夫他 第 69 回国立病院総合医学会：2015/10/2-3、札幌</p>
<p>「慢性腎臓病を合併した統合失調症の褥瘡患者に対するオルニチン含有食品の有用性」 池本美智子、徳永真矢、福泉公仁隆他 第 19 回病態栄養学会：2016/1/9-10、横浜</p>
<p>「大腿骨頸部骨折患者の入院時食事摂取不良が入院期間に及ぼす影響についての検討」 藤岡恵、池本美智子、福泉公仁隆他 第 19 回病態栄養学会：2016/1/9-10、横浜</p>
<p>「脳血管疾患患者の減塩指導における塩分チェックシートの有用性について」 藤岡恵、池本美智子、福泉公仁隆他 第 19 回病態栄養学会：2016/1/9-10、横浜</p>
<p>「外来がん化学療法患者における栄養管理上の問題点」 池本美智子、徳永真矢、福泉公仁隆他 第 31 回日本静脈経腸栄養学会学術集会：2016/2/25-26、福岡</p>
<p>「急性期病院 NST 介入症例における転院後の予後調査について」 徳永真矢、池本美智子、福泉公仁隆他 第 31 回日本静脈経腸栄養学会学術集会：2016/2/25-26、福岡</p>
<p>「大腿骨頸部骨折患者の入院時栄養状態と入院期間との関連」 藤岡恵、池本美智子、福泉公仁隆他 第 31 回日本静脈経腸栄養学会学術集会：2016/2/25-26、福岡</p>
<p>「職業性ストレス簡易調査票に基づく栄養部門におけるストレスの現状について」 池本美智子、辻麻里子 第 18 回日本医療マネジメント学会学術総会：2016/4/22-23、福岡</p>
<p>「臨床栄養師育成の意義と現状、今後の課題」 池本美智子 第 16 回日本健康・栄養システム学会：2016/6/25、福岡</p>
<p>「職業性ストレス簡易調査表に基づく栄養士の役割別職業性ストレスについて」 池本美智子、辻麻里子 第 30 回国立病院総合医学会：2016/11/11-12、沖縄</p>

	<p>「急性期病院における地域一体 NST のための栄養情報提供書の有用性について」 池本美智子、淵邊まりな、福泉公仁隆他 第 32 回日本静脈経腸栄養学会学術総会：2017/2/23-24、岡山</p>	
	<p>「急性期病院における入院時栄養スクリーニングの精度とその問題点についての検討」 淵邊まりな、池本美智子、福泉公仁隆他 第 32 回日本静脈経腸栄養学会学術総会：2017/2/23-24、岡山</p>	
	<p>「妊婦におけるビタミン D 含有食品の摂取傾向について」 長岳愛美、池本美智子、佐藤和夫他 第 36 回食事療法学会：2017/3/4-5、高知</p>	
主な社会活動	<p>・宮崎県栄養士会研修会にて「肝臓病の食事療法」を講演 (平成 26 年 7 月)</p>	
	<p>・福岡県栄養士会生涯教育研修会にて「栄養管理記録 SOAP を用いた栄養管理記録」を講演 (平成 26 年 9 月)</p>	
	<p>・福岡糖尿病療養指導士認定更新セミナーにて「食品交換表の活用と実践のポイント」を講義 (平成 27 年 8 月)</p>	
	<p>・福岡市西区給食施設従業者研修会にて「特定給食施設における食物アレルギーの対応」を講演 (平成 27 年 12 月)</p>	
	<p>・長崎県栄養士会医療協議会研修会にて「がんの栄養指導について」を講演 (平成 28 年 6 月)</p>	
	<p>・日本病態栄養学会平成 28 年度教育セミナーにて「がんにおける症例検討」を講義 (平成 28 年 6 月)</p>	
	<p>・第 16 回日本健康・栄養システム学会臨床栄養師継続研修にて「嚥下障害を合併した大腿骨頸部骨折患者の栄養管理」の講義・症例検討をおこなった (平成 28 年 6 月)</p>	
	<p>・福岡糖尿病療養指導士研修会にて「糖尿病の基本治療と療法指導」の教育研修を行った (平成 28 年 7 月)</p>	
	<p>・佐賀県栄養士会福祉事業部研修会にて「食物アレルギーの実際」を講演 (平成 28 年 7 月)</p>	
	<p>・国立病院機構福岡病院 NST 勉強会にて「呼吸器疾患患者への NST 介入」を講演 (平成 28 年 9 月)</p>	
	<p>・アレルギーケア研究会「親子のためのアレルギー教室」において「卵・牛乳・小麦を使わないみんなで作って楽しむおやつ」の実践指導を行った (平成 28 年 9 月)</p>	
	<p>・佐賀県栄養士会公衆衛生事業部研修会にて「食物アレルギーの実践指導について」を講演 (平成 29 年 2 月)</p>	
	<p>・第 31 回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会座長 (平成 26 年 6 月)</p>	
	<p>・第 32 回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会座長 (平成 27 年 6 月)</p>	
	<p>・第 70 回国立病院総合医学会シンポジウム座長 (平成 28 年 11 月)</p>	
	<p>・福岡 NST 研究会世話人 (平成 20 年 4 月～平成 29 年 3 月)</p>	
	<p>・福岡 PEG・半固形化栄養療法研究会世話人 (平成 22 年 6 月～平成 29 年 3 月)</p>	
	<p>・九州 NST 研究会世話人 (平成 22 年 4 月～現在に至る)</p>	
	<p>・日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会制度委員会委員 (平成 22 年～平成 25 年)</p>	
	<p>・日本医療マネジメント学会学会誌査読委員 (平成 25 年～現在に至る)</p>	
	<p>・日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会学会誌編集委員 (平成 26 年～平成 28 年)</p>	
	<p>・福岡県栄養士会常任理事 (平成 24 年～平成 26 年)</p>	
	<p>・福岡糖尿病療養指導士認定委員 (平成 27 年～現在に至る)</p>	
	<p>・福岡県栄養士会理事 (平成 28 年 4 月～現在に至る)</p>	
	認定資格等	<p>ケアマネージャー (平成 11 年 5 月)</p>
		<p>福岡糖尿病療養指導士 (平成 12 年 11 月)</p>
<p>病態栄養認定管理栄養士 (平成 17 年 4 月)</p>		
<p>NST 専門療法士 (平成 19 年 2 月)</p>		
<p>TNT-D 認定管理栄養士 (平成 22 年 7 月)</p>		
<p>サプリメントアドバイザー (平成 22 年 12 月)</p>		
<p>臨床栄養師 (平成 24 年 6 月)</p>		
<p>小児アレルギーエドゥケーター (平成 25 年 4 月)</p>		
<p>がん病態栄養専門管理栄養士 (平成 26 年 4 月)</p>		

所属学会	日本病態栄養学会員 (平成13年～現在に至る) 日本静脈経腸栄養学会員 (平成15年～現在に至る) 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会員 (平成18年～平成29年4月) 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会理事 (平成21年～平成23年) 日本健康・栄養システム学会員 (平成24年～現在に至る) 日本栄養改善学会員 (平成26年4月～平成28年3月、平成29年4月～現在に至る) 日本医療マネジメント学会員 (平成17年～現在に至る) 日本小児臨床アレルギー学会 (平成29年5月～現在に至る) 日本病態栄養学会員 (平成13年～現在に至る)
受賞歴	(社) 福岡県栄養士会長表彰 (平成6年10月) (社) 日本栄養士会長表彰 (平成11年6月) 厚生労働大臣表彰 (平成16年) 全国国立病院管理栄養士協議会会長表彰 (平成16年11月) 国立病院機構理事長表彰 (平成24年) 第66回国立病院総合医学会 ベスト口演賞受賞 (平成24年11月) 福岡県知事感謝状 (平成25年10月) 福岡県知事表彰 (平成27年10月) 第69回国立病院総合医学会 ベストポスター賞受賞 (平成27年11月) 九州国立病院管理栄養士協議会感謝状 (平成28年9月)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャリアガイダンス I ・人間関係の心理 ・教育心理学 ・栄養カウンセリング ・基礎統計学 ・学校カウンセリング ・高齢者心理学 ・教職実践演習 (栄養教諭) <p>[リハビリテーション学部 理学療法学科、作業療法学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栄養カウンセリング <p>[東筑紫短期大学 保育学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨床心理学
専 門 分 野	■臨床心理学
最 終 学 歴	九州大学大学院 教育学研究科 教育心理学専攻博士課程 単位取得退学
学 位	修士 (教育学)
職 歴	<p>九州大学心理教育相談室 主任及び副主任 (平成 10 年 4 月～平成 12 年 3 月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 講師 「カウンセリング I・II」等 担当 (平成 12 年 4 月～平成 19 年 3 月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授 「栄養カウンセリング」, 「学校カウンセリング」等 担当 (平成 19 年 4 月～現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>「演習 栄養教育 (第 6 版)」大里進子ほか (編著) (2006 年 医歯薬出版株式会社) 管理栄養士を目指す学生を対象とする栄養教育論のテキストである。筆者が分担執筆した章では、行動科学とカウンセリングの理論と技法について概説している。さらに理解を深めるために演習課題を多く設定した。</p> <p>「イラスト栄養教育・栄養指導」城田智子ほか (編著) (2007 年 東京教学社) 管理栄養士を目指す学生を対象とする栄養教育論のテキストである。筆者が分担執筆した章では、行動科学とカウンセリングの理論とモデルについて、イラストを多用して、わかりやすく概説した。</p>
主な研究活動	<p>【著書】</p> <p>「イメージの体験様式に関する研究」(著書) 田嶋誠一 (編) 「現実に介入しつつ心に関わる[展開編]」 (2016 年 金剛出版)</p> <p>(概要) イメージ療法の治癒要因の一つであるイメージの体験様式の変化過程に関する研究の動向と今後の展望について論じた。具体的には、イメージの中の視点、想像的関与、没入とイメージの体験様式の関連についての研究を取り上げた。</p>
	<p>【論文】</p> <p>「イメージ療法におけるイメージの体験様式に関する研究 —イメージ体験の深まりを測定する試み」 (心理臨床学研究 第 26 巻 第 3 号 2008 年)</p> <p>(概要) イメージの体験様式の変化過程をイメージの体験過程と名づけ、それを 5 段階で評定するスケールを開発し、イメージの体験過程に影響を与える諸要因について探索的に検討した。</p>
主な社会活動	<p>精華女子短期大学教職員研修会講師 (平成 24 年 2 月)</p> <p>日本人間性心理学会第 33 回大会座長 (平成 26 年 8 月)</p> <p>東筑紫短期大学教員免許状更新講習講師 (平成 28 年 8 月)</p>
所属学会	<p>日本心理臨床学会員 (平成 6 年～現在に至る)</p> <p>日本人間性心理学会員 (平成 7 年～現在に至る)</p> <p>日本催眠医学心理学会員 (平成 9 年～現在に至る)</p> <p>日本学生相談学会員 (平成 21 年～現在に至る)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・コンピュータリテラシーⅠ、コンピュータリテラシーⅡ ・栄養情報処理演習Ⅰ、栄養情報処理演習Ⅱ
専 門 分 野	■制御工学 ■情報学
最 終 学 歴	九州工業大学大学院 情報工学研究科 情報科学専攻 博士後期課程退学
学 位	修士 (情報工学)
職 歴	東筑紫短期大学 講師 (平成11年4月～平成13年3月) 九州栄養福祉大学 講師 (平成13年4月～平成19年3月) 九州栄養福祉大学 准教授 (平成19年4月～現在に至る) 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学 情報管理センター 主事 (平成15年4月～平成28年3月) 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学 情報管理センター 副センター長 (平成28年4月～現在に至る)
教育上の業績	○個人所有のパソコンを管理する上で必要となる具体的内容、手順について解説したオリジナルテキスト「パソコン管理入門」を作成した。 「コンピュータリテラシーⅠ」の教材として利用されるとともに、希望学生に随時配布されている (平成18年～現在に至る) ○電子メール教育用テキストとして「Web メール入門」を作成した。学生および教職員に配布され、利用されている。 (平成23年～現在に至る)
主な研究活動	【著書】 「情報科学 改訂版」(西日本法規出版(現ふくろう出版)平成17年12月) (概要) 本書は、情報処理の入門者、初級システムアドミニストレータ試験の受験者、ならびに情報処理教育担当者を対象としたテキストである。従来の初級システムアドミニストレータ試験の出題分野に加え、(同試験でセキュリティ分野が重要視される以前より)「不正アクセス対策」「コンピュータウイルス対策」「暗号化技術」をはじめとするセキュリティ分野に大幅に紙面を割いて詳しく解説した先駆的な書籍である。改訂版では情報技術の発展に伴い古くなったと思われる部分の見直し、冗長と思われる記述や図表の見直しを行ったほか、「システム開発」に関する章の追加を行った。 (編者：山田啓一、分担執筆：山本浩貴、赤松貴文、佐々木彰治、福永良浩。執筆ページ：pp147-266) 【著書】 「ITセミナー」(ふくろう出版、平成25年5月) (概要) 本書は、文科系の大学生ならびにITパスポート試験の受験者を対象としたテキストである。ITパスポート試験は、情報技術の技術的な側面に加え、企業と法務、経営戦略、システム戦略、システム開発などに関する知識を問う試験であることから、本書は情報技術を仕事に役立てるという視点から、ITパスポート試験が対象とする範囲を網羅した内容となっている。 (分担執筆：山田啓一、木下和也、福永良浩、赤松貴文、山本浩貴、坂本健成。執筆ページ：pp140-207) 【著書】 「マネジメントのためのICT基礎講座」(晃洋書房 平成27年4月) (概要) 本書では、ITパスポート試験が対象とする情報技術の技術的な側面に加え、企業と法務、経営戦略、システム戦略、システム開発などに関する内容を網羅している。本書は、前著「ITセミナー」をさらに進化させたものであり、情報技術を仕事に役立てられるようにすることを目指し、ITパスポート試験の過去問題に加え、日商PC検定試験の類似問題も掲載している。 (分担執筆：福永良浩、木下和也、赤松貴文、山本浩貴、坂本健成。執筆ページ：pp144-222)

【論文】

「インターネット VPN を用いたキャンパス間ネットワークの構築」

(九州栄養福祉大学研究紀要 第9号、平成24年12月)

(概要)

本稿では、セキュアな拠点間ネットワークを安価に実現するインターネット VPN について述べている。VPN ソフトウェアである vpnd をソースコードからコンパイルして floppyfw の追加パッケージを作成することで、floppyfw を VPN に対応させることができた。これにより、月々のインターネット接続費用のみでセキュアな拠点間ネットワークを構築することが可能となった。(pp105-117。)

【論文】

「オープンソース・ソフトウェア活用事例 10

—Roundcube を用いた Web メールサービスの構築—

(東筑紫短期大学研究紀要 第43号、平成24年12月)

(概要)

本稿では、初期設定を行うことなく学外からでもメールを読み書きできる Web メールサービスを構築するために行った、Roundcube の導入と改良について述べている。Roundcube は一般のメールクライアントソフトウェアと比較しても遜色ない操作性を備えた Web メールクライアントソフトウェアであるが、ソースファイルの修正やプラグインの導入を行うことで、さらに利便性を向上させることができた。Roundcube の導入により、学外からでも学内と同一環境でメールを読み書きできる Web メールサービスを提供することができた。

(萩原勇人、赤松貴文：pp159-175。共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

【論文】

「IP カメラを用いたリモート監視システムの構築 1」

(九州栄養福祉大学研究紀要 第10号、平成25年12月)

(概要)

本稿では、低コストで監視映像の表示・録画を行うことを目的に、IP カメラを用いた監視システムの構築について述べている。TENVIS 社製の IP カメラは一部機能を HTTP から利用可能であり、監視映像配信する RTSP サーバ機能を備えていることから、複数台の IP カメラを統合管理する Web アプリケーションを構築することができるはずである。本稿では、IP カメラから取得した監視映像を Web ブラウザ上に表示させるとともに、パン・チルトなどの制御、監視映像の録画を行えることを確認した。(pp245-256。)

【論文】

「管理栄養士課程におけるリメディアル教育への取り組み」

(九州栄養福祉大学研究紀要 第10号、平成25年12月)

(概要)

本稿では、2013 年度に試行的に実施した、初年次における補習授業をはじめとした取り組みについて述べている。本取り組みの目的は、専門課程の授業を理解するために必要な基礎学力を早期に身に付けさせること、および予習・復習を習慣化させることにある。これらの目標を達成するには学生自身に成功体験を実感させることが重要であると考え、「割合計算」に関する補習授業を実施した。加えて、自習教室の整備および復習用のドリルの準備を行った。本取り組みの結果、参加学生からは好意的な感想が寄せられるとともに、自習室を利用する学生の姿を多く見かけるようになるなど、一定の成果を上げることができた。

(赤松貴文、楠瀬千春、松本明夫、津田治敏、喜多大三、藤野博史：pp257-270。共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

【論文】

「オープンソース・ソフトウェア活用事例 11

—LEAF Bering-uClibc を用いたファイアウォールの構築—

(東筑紫短期大学研究紀要 第45号、平成26年12月)

(概要)

本稿では、永らく本学および併設校 東筑紫短期大学におけるファイアウォール OS であった floppyfw の開発停滞を受け、OS に LEAF Bering-uClibc を用いたファイアウォールの構築について述べている。LEAF Bering-uClibc は活発な開発が行われている OS であり、floppyfw と比較して、安全性、安定性、拡張性の高いファイアウォールを構築することができた。

(萩原勇人、赤松貴文：pp169-180。共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

	<p>【論文】 「LEAF Bering-uClibc を用いたキャンパス間VPNの構築」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第11号、平成26年12月)</p> <p>(概要) 本稿では、floppyfwの開発停滞を受け、OSにLEAF Bering-uClibcを用いたルータによるVPNについて述べている。専用線と比較すると安全性は劣るが、各拠点のISPを統一し、拠点間通信にインターネットを経由しないようにすることで、できる限りセキュアで高速な拠点間ネットワークを安価に実現することができた。(pp215-225。)</p> <p>【論文】 「オープンソース・ソフトウェア活用事例 12 ーownCloudを用いたオンラインストレージの構築ー」 (東筑紫短期大学研究紀要 第46号、平成27年12月)</p> <p>(概要) 本稿では、教職員、学生の業務効率および作業効率の向上を図るため、ownCloudを用いたオンラインストレージサービスの構築について述べている。ownCloudは、商用のオンラインストレージサービスと同等の機能を有しており、Webブラウザをはじめ、デスクトップクライアント、スマートフォンからアクセス可能である。ownCloudとLDAPサーバを連携させることで、本学教職員、学生は、その他の学内サービスと同じユーザID、パスワードでオンラインストレージサービスを利用できるようになった。 (萩原勇人、赤松貴文：pp147-160。共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p> <p>【論文】 「IPカメラを用いたリモート監視システムの構築 2」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第12号、平成27年12月)</p> <p>(概要) 本稿では、リモート監視システムを低コストで構築することを目標に、複数のIPカメラからキャプチャ画像を取得して表示する集中監視画面の構築、および特定のIPカメラのリアルタイム映像を取得して表示するライブ映像画面の構築を行った。異なる種類のIPカメラが混在することを想定したデータ構造とすることで、IPカメラの増設に対応可能な柔軟性のあるシステムとなった。(pp219-227。)</p> <p>【論文】 「オープンソース・ソフトウェア活用事例 13 ーLEAF Bering-uClibc用ソフトウェアパッケージのビルド環境の構築ー」 (東筑紫短期大学研究紀要 第47号、平成28年12月)</p> <p>(概要) 本稿では、本学および併設校 東筑紫短期大学のファイアウォールOSに採用しているLEAF Bering-uClibc上で動作するソフトウェアパッケージのビルド環境の構築について述べている。LEAF Bering-uClibc用パッケージが提供されていないソフトウェアについても、パッケージを独自にビルドすることで利用可能となり、LEAF Bering-uClibcにより多くの機能を追加することができるようになった。 (萩原勇人、赤松貴文：pp9-20。共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
<p>主な社会活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・北九州市立年長者研修大学校 周望学舎 研修会講師 (研修会) 主催 北九州市立年長者研修大学校 周望学舎 (平成17年8月) 北九州市立年長者研修大学校 周望学舎に在籍する年長者を対象に、「インターネット体験」、「メールの打ち方」と題した研修会を実施した。(平成18年8月、平成19年8月にも同研修会を実施した。) ・福岡市立粕屋東中学校 3年生学年集会講師 (研修会) 主催 福岡市立粕谷東中学校 (平成19年2月) 高校進学を直前に控えた福岡市立粕谷東中学校3年生を対象に、「なぜ学ばなければならないのか」というテーマで講演を行った。
<p>所属学会</p>	<p>計測自動制御学会 (平成8年7月～現在に至る)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・公衆栄養学Ⅱ ・調理学実習Ⅲ ・公衆栄養学実習（学内） ・臨地実習指導（演習） ・臨地実習Ⅱ（保健所・保健センター・病院・介護老人保健施設） ・専門ゼミナールⅠ ・キャリアデザイン ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ	
専 門 分 野	■複合領域 ■食教育 ■食習慣 ■食生活評価 ■栄養指導	
最 終 学 歴	中村学園大学 家政学部 食物栄養学科 管理栄養士専攻 国立公衆衛生院 食物栄養学科	
学 位	学士（食物栄養学）	
職 歴	国立療養所東埼玉病院 事務部 庶務課栄養管理室栄養士として採用（昭和53年4月1日） 国立病院関東厚生局長より 国立病院医療センター事務部庶務課栄養管理室栄養士配置換（昭和56年4月1日） 九州厚生局長より 国立療養所南福岡病院事務部庶務課栄養管理室栄養士配置換（昭和59年2月1日） 九州厚生局長より 国立病院九州がんセンター事務部庶務課栄養管理室栄養士主任昇任（平成5年4月1日） 九州厚生局長より国立療養所大牟田病院事務部庶務課栄養係長昇任（平成14年12月1日） 国立病院は独立行政法人国立病院機構に引き継がれる（平成16年4月1日） 独立行政法人国立病院機構九州ブロック担当理事より 独立行政法人国立病院機構大牟田病院診療部循環器科栄養管理室主任栄養士に配置換通知（平成16年12月1日） 独立行政法人国立病院機構九州ブロック担当理事より 独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター内科部栄養管理室長昇任通知（平成20年4月1日） 独立行政法人国立病院機構九州ブロック担当理事より 独立行政法人国立病院機構大牟田病院内科部栄養管理室長に配置換（平成23年4月1日） 独立行政法人国立病院機構九州ブロック担当理事より 独立行政法人国立病院機構東佐賀病院内科部栄養管理室長に配置換（平成25年11月1日） 独立行政法人国立病院機構九州ブロック担当理事より 独立行政法人国立病院機構東佐賀病院内科部栄養管理室長で退職（平成27年3月31日） 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授（平成27年4月1日～現在に至る）	
教育上の業績	○独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター 認知症・高齢者対策研修会「高齢者の食事について」 看護師50名対象に説明。（平成22年10月）	
	【出張講演】 ○独立行政法人国立病院機構大牟田病院 福岡県山川公民館で循環器科赤崎医師「高血圧について」講演と 原口栄養士「高血圧の食事について」の講演。 対象は山川地区の保健指導の役員、参加者50名。高血圧に対する食 事のとり方、おいしく減塩食をとる方法など。（平成25年10月7日）	

	<p>○独立行政法人国立病院機構東佐賀病院佐賀県三養基郡上峰町老人福祉センター「高齢者の食事について」 地域ケア会議のなかでの講演。看護師、保健師、ケアマネージャ民生委員を対象に嚥下、検査、食形態、必要栄養量など専門的な内容で説明。参加者 20 名 (平成 25 年 11 月 8 日)</p> <p>○独立行政法人国立病院機構東佐賀病院佐賀県三養基郡養原公民館で「メタボリックシンドロームについて」 対象は 70 歳代 20 名。内容は、メタボリックシンドロームの病態、検査、食事について分かりやすい例を示して説明。 (平成 25 年 11 月 18 日)</p> <p>○独立行政法人国立病院機構東佐賀病院佐賀県三養基郡石貝団地公民館で「高齢者の食事について」 対象は、70 歳代、20 名。内容は、一般の方が対象なので簡単に分かりやすく、日頃の食事の注意点、栄養失調にならないように、嚥下、減塩など説明。 (平成 26 年 1 月 22 日)</p> <p>○独立行政法人国立病院機構東佐賀病院佐賀県三養基郡東分公民館で「メタボリックシンドロームについて」 内容は、メタボリックシンドロームの病態、検査、食事について 分かりやすい例を示して説明。 (平成 26 年 2 月 5 日)</p> <p>○独立行政法人国立病院機構東佐賀病院佐賀県三養基郡みやき町保健センター「聞いただけ得する！糖尿病予防のための賢い食べ方」 参加者 20 名糖尿病と食事の必要性、食品の取り方、間食について説明。 (平成 26 年 10 月 16 日)</p> <p>○独立行政法人国立病院機構東佐賀病院佐賀県鳥栖市グループホーム「高齢者の食事について」 保健指導の方対象 20 名。高齢者の食事、嚥下食を含めて説明。 (平成 26 年 11 月 19 日)</p> <p>○独立行政法人国立病院機構東佐賀病院佐賀県三養基郡基山町役場保健センター「メタボリックシンドロームについて」 保健指導の方対象 40 名。病気と検査、食事のとり方について、おいしく取る方法について説明 (平成 26 年 11 月 28 日)</p>	
	<p>【公開講座】</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> • 独立行政法人国立病院機構東佐賀病院 「糖尿病について」医師、「糖尿病に必要な検査について」検査技師 「おいしく食べよう食事会」原口 500kcal の弁当を提供して、実際の必要量を体験。 食事を通して自分の食事を見直してもらうよう説明。 (平成 26 年 3 月 12 日) • 独立行政法人国立病院機構東佐賀病院 「糖尿病の治療について」医師 「薬について」薬剤師 「糖尿病の食事の取り方について」栄養管理室長原口 500kcal の弁当を提供して実際の食事を体験してもらう。 弁当を通して必要量を確認してもらう。食品、献立の注意点を説明。 (平成 26 年 5 月 21 日) • 独立行政法人国立病院機構東佐賀病院 「糖尿病の治療について」医師 「フットケアについて」看護師 「糖尿病の献立の立て方について」栄養管理室長原口 500kcal の弁当を提供。弁当を通して献立の立て方、食品の選び方を説明。食前、食後の血糖値を測定し比較検討行った。 (平成 26 年 7 月 9 日) 	

	<p> ・独立行政法人国立病院機構東佐賀病院 「糖尿病の治療について」 医師 「糖尿病の運動について」 理学療法士 「糖尿病の献立の立て方について」 <u>栄養管理室長原口</u> 500kcal の弁当を提供。弁当を通して献立の立て方、食品の選び方を説明。食前、食後の血糖値を測定し比較検討行った。(平成 27 年 2 月 18 日) </p>
<p>主な研究活動</p>	<p>【論文】</p> <p>1. 「動く重症心身障害児（者）の食事基準を見直して～経過と今後の課題～」 (共著) 新見真奈美、會田千重、浦村一秀、<u>原口明子</u>、山中理香、手塚加奈子 (第 33 回九州地区重症心身障害研究会 平成 23 年 3 月 5 日)</p> <p>(概要) 当院は「動く重症心身障害病棟」が開設してから 37 年になる。平均年齢が 38～40 歳と成人化している。生活習慣病の予防の為、平成 20 年 7 月に基準の見直しを行った。食事カロリーを 2000kcal のみから、1500、1800、2000kcal の三段階とした。基準を三段階に変更しても低栄養になる人は少なかった。三ヶ月評価をしており、Alb 値や体重の変動が多い方はその都度病棟、栄養、NST でフォローしている。</p> <p>2. 「当院における NS 活動の現状と今後の課題」 (共著) 伊藤千裕、<u>原口明子</u>、辻みどり、田中友梨、山口奈保子、荒畑創、赤崎卓、原田実根 (第 27 回日本静脈栄養学会学術集会静脈経腸栄養 507 Vol.27 No.1 2012) (平成 24 年 2 月 20 日)</p> <p>(概要) 平成 21 年 7 月より NST 委員会が発足し、同時に NST 回診を開始、毎月 2 回行っている。NST 介入件数についての集計とこれまでの活動や取組を計画し今後の課題について検討した。NST 介入件数は年々増加しており介入後栄養的問題点が改善するなどの成果も上げている。今後は限られた時間の中での回診の効率化、栄養管理の質の維持、向上、中心静脈栄養、経腸栄養の適正使用の推進、処方設計の支援に積極的に介入したい。</p> <p>3. 「非結核性抗酸菌患者の栄養状態に関する調査」 (共著) 田中有梨、田邊佳那、辻みどり、渡邊和美、<u>原口明子</u>、森山耕成、榎早苗 (第 66 回国立病院総合医学会 平成 24 年 11 月 17 日)</p> <p>(概要) p795 栄養と結核の間には双方向性の関係が明らかになっている。抗酸菌感染 (NTM 症) 症患者の栄養に関する研究は十分に行われていない。NTM 症は結核と異なり特効薬がなく、その管理における栄養に意義は結核よりもむしろ大きい可能性がある。大牟田病院は多くの NTM 症の診断が行われているがやせた患者が多い印象がある。そこで NTM 症患者の栄養状態を明らかにすることを目的とした。結果のまとめとして一部発表した。</p> <p>4. 「長期経管栄養デュシェンヌ型筋ジストロフィー患者におけるカルニチン欠乏について」 (共著) 上野佳代子、田邊佳那、辻みどり、<u>原口明子</u>、荒畑創 (第 28 回日本静脈栄養学会学術集会静脈経腸栄養 443 Vol.28 No.1 2013) (平成 25 年 2 月 21 日)</p> <p>(概要) 原因不明の動悸や低血糖症状が出現した長期経管栄養中のデュシェンヌ型筋ジストロフィー (DMD) 患者で、カルニチン欠乏を経験したので報告する。カルニチンを投与することで、低血糖及び心機能の改善が見られた。DMD 患者の長期経管栄養にカルニチン欠乏は、低血糖や心機能に影響することが示唆された。今後は低血糖症状や心機能低下に注意する、カルニチン配合の経腸栄養剤も選択肢の一つと考える必要あると思われた。</p> <p>5. 「統一した二段階の粘度の汁物を提供するための取組」 (共著) 千上みどり、田邊佳那、上野佳代子、<u>原口明子</u> (九州国立栄養協議会第 11 回栄養管理学会 平成 25 年 10 月 5 日)</p> <p>(概要) 当院は嚥下造影検査 (以下 VF 検査) を行い、液体にとろみが必要な患者様については、二段階で評価を行っている。VF 検査の結果を踏まえ、汁物においても適切な粘度でのとろみ付与が必要であるが、VF 検査の結果に合わせた二段階の汁物の粘度を決定する為に、Line Spread Test を用いて検討を行った。基準を数字化できる LST 法を用いることは有用であり、基準の粘度を作り、調理師でも粘土を統一することができた。</p>

6. 「長期経管栄養中の神経筋患者におけるカルニチン欠乏の現状」 (共著)

上野佳代子、田邊佳那、千上みどり、原口明子、藤本雄一、荒畑創

(九州国立栄養協議会第 11 回栄養管理学会 平成 25 年 10 月 5 日)

(概要)

長期経管栄養中の筋萎縮のある神経筋疾患患者と萎縮のない神経疾患での血清遊離カルニチン濃度の比較検討を行ったので報告する。筋萎縮のある神経筋疾患患者においては、筋萎縮を来さない患者に比べ早期に血清遊離カルニチン濃度が低下することが示唆された。今後長期的に経管栄養が必要な筋萎縮の患者に対しては、カルニチンの内服だけでなくカルニチン配合の経腸栄養剤の使用も選択肢の一つと考えていく必要があると思われた。

7. 「長期経管栄養中の神経筋患者におけるカルニチン欠乏の現状」 (共著)

上野佳代子、田邊佳那、千上みどり、原口明子、藤本雄一、荒畑創

(九州国立栄養協議会第 11 回栄養管理学会 平成 25 年 10 月 5 日)

(概要)

長期経管栄養中の筋萎縮のある神経筋疾患患者と萎縮のない神経疾患での血清遊離カルニチン濃度の比較検討を行ったので報告する。筋萎縮のある神経筋疾患患者においては、筋萎縮を来さない患者に比べ早期に血清遊離カルニチン濃度が低下することが示唆された。今後長期的に経管栄養が必要な筋萎縮の患者に対しては、カルニチンの内服だけでなくカルニチン配合の経腸栄養剤の使用も選択肢の一つと考えていく必要があると思われた。

8. 「体重減少、増加を伴った誤嚥性肺炎を繰り返すパーキンソン病患者における経腸栄養剤投与の一例」 (共著)

原口明子、田邊佳那、千上みどり、上野佳代子 (第 39 回福岡県栄養改善学会 平成 25 年 11 月 8 日)

(概要)

平成 21 年 7 月より全科型 NST が稼働。NST 入依頼は経腸栄養投与に関連した物が多いが NST 介入により経腸栄養剤変更を試み栄養状態改善に繋がった症例を経験したので報告する。適正栄養投与にもかかわらず栄養状態改善が見られなかった症例に呼吸障害、消化管機能低下対応の消化態栄養剤を用いたことで体重増加等の栄養改善が顕著に見られた。合併症リスク回避の為に対象者にあった栄養剤選択により良好な経過が得られた。

9. 「統一した二段階の粘土にするための汁物を提供するための取組について～調理師の立場から～」 (共著)

野田広行、森博文、栗山隆尚、住吉秀行、弓削孝幸、真崎奏大、野田敏春、成田博、田邊佳那、千上みどり、上野佳代子、原口明子

(第 67 回国立病院総合医学会 p634 平成 25 年 11 月 8 日・9 日)

(概要)

当院は嚥下造影検査 (以下 VF 検査) を行い、液体にとろみが必要な患者様については、二段階で評価を行っている。VF 検査の結果を踏まえ、汁物においても適切な粘度でのとろみ付与が必要であるが、VF 検査の結果に合わせた二段階の汁物の粘度を決定する為に、Line Spread Test を用いて検討を行った。基準を数字化できる LST 法を用いることは有用であり、基準の粘度を作り、調理師でも粘土を統一することができた

10. 「非結核性抗酸菌患者における栄養摂取量及び栄養状態と予後の関係」 (共著)

上野佳代子、千上みどり、田邊佳那、原口明子、熊副洋幸、槇早苗、永田忍彦、若松謙太郎

(第 67 回国立病院総合医学会 p448 平成 25 年 11 月 8 日・9 日)

(概要)

非結核性抗酸菌症 (以下 NTM 症) 患者の栄養摂取量及び栄養状態と予後の関係について解明する。対象は当院の 2010 年 5 月から 2011 年 8 月までに登録された症例 97 症例の内、2 年以上経過観察できた患者男性 15 名、女性 53 名。今回の検討により十分な栄養摂取ができていないことは、栄養状態、NTM 症を悪化させる因子の一つになっている可能性が示唆された。必要栄養量を取るために食事の工夫を提案する必要がある。

	<p>11. 「統一した二段階の粘土の汁物を提供するための取組について」 (共著) 千上みどり、田邊佳那、上野佳代子、原口明子 (第 67 回国立病院総合医学会 p847 平成 25 年 11 月 8 日・9 日)</p> <p>(概要) 当院は嚥下機能検査を行い液体にとろみが必要な患者様については、二段階で評価を行っている。VF 検査の結果に合わせた二段階の汁物の粘土を決定するために、Line Spread Test を用いて検討を行った。基準を数値化できる LST 法を用いることは有用であり、基準の粘度を調理師でも統一しうることが出来た。</p> <p>12. 「重症心身障害児 (者) の病棟配膳から中央配膳を体験して」 (共著) 原口明子、久保葵、松川麻梨子、古賀友里恵 (第 37 回九州地区重症心身障害研究会 平成 27 年 3 月)</p> <p>(概要) 当院は昭和 44 年より重症心身障害児 (者) の中央配膳をお行っていたが病棟の老朽化を期に新病棟が建設された。これを期に病棟配膳から中央配膳をすることになったが、厨房の新築が出来ずに、職員の増員もなかった中で病院の職員全体の協力、調理師の考えの変化があり 2014.3.3 から中央配膳を行うことが出来た。病棟配膳から中央配膳にすることで患者の栄養状態の確認まで行ったので報告する。</p>
<p>資 格 等</p>	<p>栄養士免許 (昭和 52 年 4 月 12 日) 管理栄養士登録 (平成 9 年 8 月 5 日) 実践栄養指導講座終了 (平成 11 年 8 月 2 日) 福岡糖尿病療養指導士認定証 (平成 14 年 6 月 1 日) 福岡県栄養士会生涯学習・3 年研修コース修了証 (平成 18 年 4 月 1 日) 病態栄養専門師認定 (日本病態栄養学会) (平成 20 年 1 月 24 日) 管理栄養士特定技能派遣研修会終了証書 (独立行政国立病院機構) (平成 23 年 3 月) NST40 時間実習研修終了 (日本病態栄養学会) (平成 23 年 7 月 1 日) 医療安全管理研修修了証 (独立行政法人国立病院機構大牟田病院) (平成 25 年 2 月 15 日) 在宅訪問管理栄養士登録 (平成 26 年 4 月) 平成 27 年度倫理委員会受講証 (平成 28 年 3 月 25 日)</p>
<p>所 属 学 会</p>	<p>全国国立病院管理栄養士協議会会員 (昭和 53 年～平成 27 年) 日本栄養士会会員 (昭和 56 年～現在に至る) 日本改善学会会員 (昭和 56 年～平成 25 年) 日本病態栄養学会会員 (平成 15 年～現在に至る) 日本静脈栄養学会会員 (平成 17 年～現在に至る) 日本在宅栄養管理学会会員 (平成 26 年～現在に至る)</p>
<p>受 賞 歴</p>	<p>厚生労働大臣より 20 年以上勤務表彰 (平成 11 年 1 月 11 日) 福岡県栄養士会会長表彰 (平成 12 年 9 月 12 日) 独立行政法人国立病院機構理事長より 30 年以上勤務表彰 (平成 20 年 4 月 1 日) 福岡県栄養士会総会・議長 (平成 22 年 5 月) 全国国立病院機構栄養士協議会感謝状 (平成 26 年 9 月 6 日)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> 健康スポーツ科学Ⅰ、健康スポーツ科学Ⅱ 運動生理学 運動処方論 キャリアガイダンスⅡ 専門ゼミナールⅡ 管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ 卒業論文 食健康センター活動(演習) <p>[東筑紫短期大学 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動生理学
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■健康科学 ■健康心理学
最 終 学 歴	日本体育大学大学院 体育学研究科 健康科学専攻
学 位	博士(医学) 修士(体育学、文学)
職 歴	<p>久留米大学医学部薬理学教室 助手 (平成6年4月～平成19年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学食物栄養学部食物栄養学科 講師 (平成19年4月～平成28年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学就職指導課指導主事 (平成26年4月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学食物栄養学部食物栄養学科 准教授 (平成28年4月～現在に至る)</p>
教育上の業績	○文部科学省新体力テストを継続的に導入し、これらの基礎資料を健康教育に活用することで、学生自身の健康や体力に関する情報の管理活用能力や専門職への意識を高めることに貢献している。
主な研究活動	<p>【著書】 「泣くとストレスが緩和するか なぜ泣くの；涙と泣きの大研究」(朝日新聞社発行 62-77)</p> <p>(概要) 涙を出すこと泣くことは、ストレス(ストレス原因)の悪影響を低減させ、ストレスを解消するのに本当に有効なのだろうかとする仮説を検証するための第一歩として日本と韓国の大学生を対象に実施した『涙と泣き』に関する現象の調査結果について述べるとともに、ストレスを緩和する要因としての泣く事の意義について考察した。また心因性の涙を促す場面を実験的に設定し、カオスアトラクターを用いて自律神経系の変化を調べた。(津田彰、原口雅浩、尾関友佳子、倉崎信子)</p> <p>【著書】 「不安研究における動物モデルの役割」(心理学評論 36(1):50-63.1993)</p> <p>(概要) 防御性覆い隠し反応モデルを利用して、役割ストレスによる不安の形成と発現の生物学的基礎過程を解明する行動神経科学的研究を介し、不安の動物モデルの目的と役割などについて考察した。さらに実験的に現実生活で見られる不安に近い状態を喚起させ、その際の不安の発現と関連する脳内NA神経系の神経科学的变化について明らかにし行動学的変化の対応について検証した。(津田彰、尾関友佳子、倉崎信子)</p> <p>【著書】 「ストレスコーピングの心理・生物的相関」(脳と精神の医学 5(2):149-157)</p> <p>(概要) 近年のストレスのトランスアクションな理論によるストレスコーピング過程のメカニズムを解明するために、動物の問題焦点型コーピングと情動焦点型コーピングと相関する心理・生物的ストレス反応を分析した。ストレスを低減するうえで効果的である絶対的なコーピングは存在しない。またコーピング反応と行動異常とを区別する境界線は不明瞭である。ある1つのコーピングの側面でも適応的であると考える考え方をあらためる必要があると考えられる。(津田彰、尾関友佳子、倉崎信子)</p>

	<p>【著書】 「ストレスの神経科学および神経薬理学的研究」 (ストレス科学 10 (1) 70-75 1995)</p> <p>(概要) ストレス研究は最近、極めて学際的になってきたためその研究法も多岐にわたっている。ストレスが中枢神経系にどのような影響を及ぼすかを神経科学的にとらえていくための方法論について述べた。ストレスの神経科学的研究法としてはどのようにストレス状況を設定するかということと生じた神経科学的現象をどのような指標としてとられていくかが大きな決め手となることが示唆された。 (田中正敏、吉田真美、横尾秀康、田中隆彦、江本浩幸、溝口克弘、石井秀夫、倉崎信子)</p>
	<p>【学術論文】 「月経周期に伴うメンタル・ストレス反応の変化」 (久留米医学会雑誌 69 : 14-23 2006)</p> <p>(概要) 月経周期の卵胞期と黄体期それぞれにメンタルテストを負荷し、唾液中 MHPG、コルチゾール、HVA 濃度を測定し、これらと精神的健康度や POMS との関連についても検討した。POMS の「緊張-不安」「活気」の高い群は低い群に比べて黄体期でより高いストレス反応を示した。ストレス反応は月経周期、つまり卵胞期か黄体期によって異なり、さらにコルチゾール、HVA 濃度の変化はメンタルストレスの課題の質にも影響されることが示唆された。</p>
	<p>【学術論文】 「新体力テストからみた本学学生の体力と生活習慣について」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第4号 平成19年12月)</p> <p>(概要) 一般大学生の運動部学生のコンデショニングにおける BCAA 摂取の影響を検討するために、唾液中コルチゾール濃度、s-IgA 濃度の変化について調べ、さらに主観的な気分の変化との関連性についても調べた。s-IgA 濃度と気分の変化には負の相関がみられ、健康状態やコンデショニングの客観的な指標として有用であることが示唆された。また「抑うつ-落ち込み」「混乱」のスコアの減少から血中 BCAA 濃度を正常に保つことは精神的なコンデショニングにも極めて重要であることが明らかになった。</p>
	<p>【学術論文】 「新体力テストからみた本学生の体力と運動習慣について」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第6号 平成21年12月)</p> <p>(概要) 本学学生における新体力テストの横断的資料を用いて身体的特徴および体力レベルを把握するとともに、運動習慣との関連について検討した。全身持久力、筋力、筋持久力を捉える項目で運動実施頻度および運動実施時間が減少するほど有意に劣ることが示唆された。また体力の向上には現在および中学時の運動経験がより強く関連することより、運動習慣の停滞を防ぐためにも体育教科では身体教養教育システムを活用した授業を展開する必要があると考えられる。</p>
	<p>【学術論文】 「女子大学生における健康行動と健康リスク意識」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第7号 平成22年12月)</p> <p>(概要) 青年期における望ましい健康行動の確立は生活習慣病予防への準備という視点からも重要である。よって本学学生の健康行動と健康リスク意識について検討した結果、学年における健康行動の実行率の相違は社会規範やライフスタイルが関係して事が示唆され、また健康リスク意識については、運動不足に関する健康教育はまだ不十分であることが顕著となった。さらに健康行動と健康リスク意識との関連についてはリスクファクターへの気づきが望ましくない行動の実行率の低さに結びついており、複雑な要因が影響していることを追認した。今後、健康リスク意識の有無による健康行動の実行率の相違について影響を与えている要因や行動を促進する心理社会的な要因についても検討を深め有用な健康教育プログラムを構築していく必要があるだろう。</p>

	<p>【学術論文】 「大学生におけるヤマブシタケの睡眠改善効果」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第10号 平成25年12月)</p>
	<p>(概要) 大学生の健康行動に着目すると睡眠問題を経験している学生の割合が増加傾向にある。ストレスの低減は睡眠の質を改善するため、抗ストレス作用のあるヤマブシタケ摂取が睡眠に及ぼす影響についてNA代謝産物であるMHPG含量および質問紙を用いて検証した。MHPG濃度は睡眠の質に関わる主観的評価をより反映していることが示唆され、また睡眠の質に悪影響を与えている「不安」の低減に有用な効果がみられた。よってヤマブシタケ摂取は学生の健康増進に寄与する1つの手段となることが期待される。</p>
	<p>【学術論文】 「カテキン・還元型コエンザイム Q10 含有飲料摂取が運動時代謝に及ぼす影響」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第11号 平成26年12月)</p>
	<p>(概要) 国民の健康づくりへの意識や健康行動変容が向上し、機能的食品の効果や運動との関連について関心が高まっている。よって生活習慣病予防としての健康教育の一助となる機能的食品の活用が運動時のエネルギー代謝に及ぼす影響について検証した。カテキン・還元型コエンザイム Q10 含有飲料摂取は体組成に有意な変化は認められなかったが、カテキンと還元型コエンザイム Q10 の同時摂取は運動時の骨格筋において脂質代謝を亢進させ、有酸素作業能を向上させることが示唆された。また身体疲労を抑制する可能性が見られたことより、生活習慣改善における身体活動量の増加に役立つことが考えられる。</p>
	<p>【学術論文】 The effects of Hericium erinaceus (Amyroban3399) on sleep quality and subjective well-being among female undergraduate students: A pilot study (Personalized Medicine Universe 4(7) 76-78, 2015)</p> <p>(概要) This pilot study assessed the effects of 4 weeks of administration of Amyroban 3399 on subjective well-being and sleep quality in female undergraduate students. The results revealed an increase in salivary free-MHPG, which corresponded to an improvement in anxiety and quality of sleep. Thus, we conclude that one of the possible effects of Amyroban 3399 is to balance out the mind and body. In the future, we will need to study the effects of Amyroban 3399 on sleep quality and everyday work, using a larger number of student participants.</p>
<p>主な社会活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東筑紫学園のキャンパスで学ぶ周望学舎シニアカレッジ (平成19年、20年、27年) 北九州市内在住の60歳以上の方 約60名の受講者を対象として「健康いきいきー食事と運動ーパート2」、「楽しい筋力トレーニングのすすめ」をテーマに健康維持、増進を目的としたレジスタンス運動や柔軟体操を実施し、安全でより高い効果が得られるよう指導を行った。 ・福岡県立戸畑高等学校家庭クラブ研修会 (平成20年、平成21年9月) 福岡県立戸畑高等学校1、2学年生徒(514名)を対象に「スポーツと栄養」についての研修会において講師を務めた。 ・北九州市立大学野球部栄養サポート (平成19年～20年) ゼミ活動の一環として野球部員の栄養サポートを行った。また20年にはコンディショニングにおけるBCAA摂取の影響を調査し検証した。 ・福岡県立戸畑高等学校野球部栄養サポート (平成21年5月～12月) ゼミ活動の一環として生徒の栄養サポートおよび保護者会における栄養教育を行った。 ・折尾愛真高等学校女子新体操部栄養サポート (平成22年5月～2月) ゼミ活動の一環として新体操部員の栄養サポートを行い、またウエイトコントロール期におけるコラーゲンペプチド飲料摂取のストレス緩和効果を調査し検証した。 ・福岡県立小倉西高等学校野球部栄養サポート (平成23年5月～2月) ゼミ活動の一環として野球部員の栄養サポートを行った。 ・豊国学園高等学校サッカー部栄養サポート (平成24年5月～平成27年1月) ゼミ活動の一環としてサッカー部員の栄養サポートならび保護者における栄養教育を行った。

	・福岡県立小倉西高等学校野球部栄養サポート (平成 27 年 5 月～平成 29 年 1 月) ゼミ活動の一環として野球部員の栄養サポートを行い、栄養教育の重要性を確認し、またスポーツ貧血における鉄グミサプリメントの有用性を検証した。
所属学会	日本体力医学会 (平成 12 年～現在に至る) 日本健康心理学会 (平成 16 年～現在に至る) 日本心臓リハビリテーション学会 (平成 19 年～現在に至る) 日本スポーツ栄養学会 (平成 20 年～現在に至る)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>〔食物栄養学部 食物栄養学科〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・給食管理 ・給食管理実習 ・応用栄養学実習 ・キャリアガイダンスⅠ、キャリアガイダンスⅡ ・臨地実習指導（演習） ・臨地実習Ⅲ（特定給食施設） ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■給食管理 ■給食経営管理
最 終 学 歴	奈良学園大学 奈良文化女子短期大学 食物栄養学科
学 位	短期大学士
職 歴	<p>財団法人厚生年金事業団 湯布院厚生年金病院 栄養部 （昭和57年4月～平成26年3月）</p> <p>独立行政法人地域医療機能推進機構 湯布院病院 統括診療部内科診療 （平成26年4月～平成28年3月）</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授 （平成28年4月～現在に至る）</p>
教育上の業績	<p>○別府大学食物栄養学科「総合マネジメント演習」・「給食経営管理論講師」 （平成24年度～平成26年度）</p> <p>○高齢者食支援栄養ケアチーム指導者 （平成24年10月）</p> <p>○福岡県老健福祉施設協議会講師 （平成24年10月）</p> <p>○大分県管内保健所嚥下食指導講師 （平成25年4月～平成26年3月）</p> <p>○大分県回復期リハビリテーション病院協議会講師 （平成25年4月～平成26年3月）</p> <p>○大分県地域包括ケア推進食支援連携プロジェクトチーム講師 （平成26年4月～平成28年3月）</p> <p>○介護老人保健施設やすらぎ栄養指導講師 （平成28年11月）</p>
主な研究活動	<p>【論文】</p> <p>日本健康・栄養システム学会臨床栄養師認定論文 『当該施設における栄養ケア・マネジメントに関するシステムの継続的改善とその評価に関する考察』（2010.6）</p> <p>【学会発表等】</p> <p>全国回復期リハビリテーション・ケア合同研究会発表 『回復期病棟における副食形態リト食導入前後の評価と課題』（2011. 10）</p> <p>【学会発表等】</p> <p>第49回糖尿病学会九州地方会発表 『糖尿病外来における実食型栄養指導の取り組み』（2011. 10）</p> <p>【学会発表等】</p> <p>第50回糖尿病学会九州地方会発表 『2型糖尿病患者リハビリテーション栄養と管理栄養士の関わり』（2012. 10）</p> <p>【学会発表等】</p> <p>第30回日本静脈経腸栄養学会学術集会発表 『当院整形外科における術前術後のNST介入による栄養管理の現状』（2015.2）</p> <p>【その他】</p> <p>北九州市歯科保健事業 デンタルフェア北九州栄養食事指導（2016.6）</p>
主な社会活動	<ul style="list-style-type: none"> ・糖尿病療養指導士として地域糖尿病予防推進活動において食事・栄養指導を実施する。 （平成18年4月～平成28年3月） ・市民公開講座 脳卒中予防の食事 他 （平成25年4月～平成28年3月）

所属学会	日本栄養士会会員	(平成25年4月～平成28年3月)
	日本健康・栄養システム学会会員	(昭和57年～現在に至る)
	日本摂食・嚥下学会員	(平成17年～現在に至る)
	日本静脈経腸栄養学会員	(平成22年～現在に至る)
受賞歴	大分県栄養士会会長表彰	(平成18年4月)
	財団法人厚生年金事業団病院長表彰	(平成24年4月)

アベ
安倍 ちか ABE Chika 准教授

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	<p>〔食物栄養学部 食物栄養学科〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の栄養指導Ⅰ、児童・生徒の栄養指導Ⅱ ・栄養教育論実習Ⅰ ・栄養教育実習事前・事後指導 ・栄養教育実習 ・教職実践演習（栄養教諭）
専門分野	■学校栄養教育（栄養教諭）
最終学歴	山口女子大学（現：山口県立大学） 家政学部 食物栄養学科
学位	学士（家政学）
職歴	<p>田川郡糸田町立糸田小学校 技師（昭和61年4月～平成7年3月）</p> <p>田川郡赤池町立市場小学校 主任技師（平成7年4月～平成16年3月）</p> <p>福岡県教育庁筑豊教育事務所 主任技師（平成16年4月～平成17年3月）</p> <p>福岡県教育庁 教育振興部 スポーツ健康課 技術主査（平成17年4月～平成19年3月）</p> <p>福岡県教育庁 教育振興部 体育スポーツ健康課（課名変更） 指導主事（平成19年4月～平成23年3月）</p> <p>田川郡糸田町立糸田小学校 栄養教諭（平成23年4月～平成28年3月）</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授</p> <p>○教職に関する専門教育科目 担当（平成28年4月～現在に至る）</p>
教育上の業績	<p>○学校栄養職員の新規採用研修・5年次研修・10年次研修の企画、運営及び指導（平成17年4月～平成23年3月）</p> <p>○福岡県の栄養教諭・学校栄養職員研修会の企画、運営及び指導（平成17年4月～平成23年3月）</p> <p>○福岡県学校料理コンクールの企画・運営（平成17年4月～平成23年3月）</p> <p>○第57回全国学校給食研究協議大会（福井大会）で指導助言（平成18年）</p> <p>○福岡県の栄養教諭の免許の認定講習「栄養教育実習」の企画・運営（平成19年）</p> <p>○第59回全国栄養教諭・学校栄養職員研究大会（福岡大会）の企画・運営等、指導（平成20年）</p> <p>○文部科学省「学校給食摂取基準策定に関する調査研究協力者会議」委員として、学校給食の栄養管理の基準となる「児童生徒の学校給食摂取基準」の策定に参画（平成21年4月～平成23年3月）</p> <p>○文部科学省「学校給食における衛生管理の改善・充実に関する調査研究協力者会議」マニュアル作成ワーキンググループ委員として「学校給食調理従事者研修マニュアル」の作成に参画（平成23年4月～平成24年3月）</p>
主な研究活動	<p>【著書】共著 「学校給食ハンドブック—管理運営編—」改訂版の編集 福岡県教育委員会・（財）福岡県学校給食会（現：公益財団法人）（平成22年4月）</p> <p>（概要） 学校給食を管理運営するために必要な基礎・基本（事務管理・施設設備管理・栄養管理・衛生管理・物資管理等）を掲載した内容</p> <p>【著書】共著 「学校給食調理従事者研修マニュアル」文部科学省（再掲）（平成24年3月）</p> <p>（概要） 調理従事者対象の研修を担当する指導者用のためのマニュアルで、学校給食における衛生管理について科学的根拠をもとに標準的手法を示した内容 文部科学省「学校給食における衛生管理の改善・充実に関する調査研究協力者マニュアル作成ワーキンググループ委員」としてマニュアルを作成。</p>

	<p>【著書】 共著 「よくわかる栄養教諭—食育の基礎知識— 第二版」 同文書院（平成28年4月） 編著 藤澤良知・芦川修貳・古畑公・田中弘之・田中延子 著 土谷政代・太田裕美子・白尾美佳・亀田明美・守田真里子・登坂三紀夫 山口蒼生子・梅垣敬三・小河原佳子・堤ちはる・原ゆみ・安倍ちか 12章3節 学校給食で伝えたい食文化 p267～270</p>
	<p>【教育論文】 福岡県教育論文「自ら健康を考え実践する子どもを育てる学校栄養職員の在り方」 (平成14年9月)</p>
	<p>(概要) 食の専門性を効果的に活かした学習指導の計画の作成及び指導方法の工夫等について研究。</p>
	<p>【学会発表等】 第53回全国栄養教諭・学校栄養職員研究大会（東京大会）における研究発表 「学校給食摂取基準の考え方に基づいた栄養管理の在り方」 (平成24年8月)</p>
	<p>【学会発表等】 平成25年度福岡県栄養士大会・第39回福岡栄養改善学会における研究発表 「児童・生徒の実態に応じた学校給食における栄養管理の在り方」 (平成25年9月)</p>
	<p>【教育論文】 福岡県栄養士会 実務講習会 生涯教育研修会における事例発表 「学校における食物アレルギーの対応について」 (平成26年10月)</p>
主な社会活動	<ul style="list-style-type: none"> ・第8回福岡県歯科保健研究大会特別講演「食に関する指導の充実」 (平成14年10月) ・PTA 学校給食教室の講師（福岡県教育委員会・福岡県学校給食会（現：公益財団法人）） (平成17年～平成22年) ・食生活改善推進員対象の研修会（福岡県） (平成22年11月) ・食育の推進実践セミナーの講師（福岡県栄養士会主催） (平成24年11月) ・学校給食関係研修会等の講師 (平成16年～現在に至る) ・福岡県スーパー食育スクール事業推進委員会委員 (平成28年6月～29年3月)
所属学会	<p>日本栄養士会 (昭和62年4月～現在に至る) 日本栄養改善学会 (平成29年4月～現在に至る)</p>
受賞歴	<p>平成27年度 福岡県公立学校優秀教職員表彰 福岡県教育委員会 (平成28年1月) 平成27年度 文部科学大臣 優秀教職員表彰 (平成28年1月)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨床栄養学実習Ⅰ、臨床栄養学実習Ⅱ ・臨床栄養学Ⅲ ・臨地実習指導（演習） ・臨地実習Ⅰ（病院・介護老人保健施設） ・専門ゼミナールⅠ ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■臨床栄養学 ■管理栄養士・栄養士における関連業務についての指導
最 終 学 歴	中村学園大学 家政学部 食物栄養学科
学 位	学士（食物栄養学）
職 歴	<p>行橋記念病院（昭和53年4月～平成10年3月）</p> <p>筑豊労災病院（平成10年4月～平成20年3月）</p> <p>九州労災病院勤労者予防医療センター（平成20年4月～平成21年3月）</p> <p>東筑紫短期大学 食物栄養学科 講師（平成21年4月～平成23年5月）</p> <p>嘉麻市役所（平成24年11月～平成26年3月）</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 講師（平成26年4月～現在に至る）</p>
主な社会活動	<ul style="list-style-type: none"> ・看護専門学校 非常勤講師 看護学生を対象に、栄養学についての講義および調理実習 ・地域糖尿病療養指導士認定試験講師 糖尿病患者の指導を行う病院施設等のスタッフを対象に、福岡県が行っている地域糖尿病療養指導士認定試験のための講義 ・糖尿病患者会への支援 研修会・料理教室・糖尿病フェア開催、ウォークラリー引率、会誌の発行等 ・冊子「高障協ふくおか」投稿 健康的な食生活を行うための食事摂取について解説 ・子育て支援事業 東筑紫短期大学付属幼稚園の園児・保護者を対象に、食育の一環としての調理実習 ・管理栄養士国家試験対策講座講師（食物栄養学科生涯学習） 担当科目：「応用栄養学」、「臨床栄養学」 ・「北九州ゆめみらいワーク」 主催：北九州市 北九州地域で学び育った学生に対して、地元企業をより身近に感じてもらうとともに、大学や短期大学で学ぶ技術や知識が社会でどう活かされているかを体感してもらう場として出展 ・北九州市シニアカレッジ（講義） 主催：北九州市年長者研修大学校 周望学舎 塩分濃度計を用いて食塩摂取量の測定および味覚テストを行い減塩について講義と試食を実施 ・アンビシャス青年リーダー・広場学生ボランティア・広場指導者等合同研修会 主催：アンビシャス・青年リーダー養成事業 京築地域企画運営委員会 「身近なもので簡単にできるお菓子づくり」（調理実習） ・「子どものアレルギー代用食の調理実習」（講義および調理実習）（平成27～28年） 主催：①荏田町保育所職員研修会 ②京築保育協会 ③行橋市保育協会
所 属 学 会	<p>日本病態栄養学会（平成11年～現在に至る）</p> <p>日本糖尿病学会（平成15年～現在に至る）</p> <p>日本栄養改善学会（平成26年～現在に至る）</p>
受 賞 歴	<p>福岡県栄養士会会長表彰（平成8年）</p> <p>日本栄養士会会長表彰（平成13年）</p> <p>福岡県知事感謝状（平成20年）</p>

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調理学実習Ⅲ ・栄養士のための農園演習 ・スポーツ栄養学 <p>[リハビリテーション学部 理学療法学科、作業療法学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食と農園 <p>[東筑紫短期大学 保育学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの食と栄養
専門分野	<ul style="list-style-type: none"> ■管理栄養士養成 ■スポーツ栄養学
最終学歴	福岡教育大学大学院 教育学研究科教育科学専攻 保健体育コース
学位	修士(教育学)
職歴	<p>医療法人共和会 小倉リハビリテーション病院 管理栄養士 (平成20年4月～平成22年3月)</p> <p>学校法人 タイケン学園</p> <p>日本ウェルネス専門学校北九州校非常勤講師 (「スポーツ栄養学」担当) (平成23年10月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (平成24年4月～平成27年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助教 (平成27年4月～平成29年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 講師 (平成29年4月～現在に至る)</p>
主な研究活動	<p>【学会発表】</p> <p>「摂食パターンからみた乳製品の栄養生理学的研究 —運動時の血清クレアチンホスホキナーゼ活性に及ぼす影響を中心として—」 (概要) 牛乳の栄養効果の効果的発現にむけて食物摂取行動としての摂食パターンをとりあげ、CPK をメルクマーカーとして運動時の筋損傷の修復に及ぼす影響について検討を行った。(第59回日本栄養改善学会発表)</p> <p>「トマト酢」レシピ作りプログラムが管理栄養士養成課程学生の「ライフスキル」に及ぼす影響 (概要) 「トマト酢」の有効性試験を行うための「トマト酢」を用いたレシピ作成プログラムが、発達段階の心身ともに最終段階を迎える年齢期の学生にどのような影響を及ぼすかということに焦点をあて、日常生活スキル尺度(大学生版)を用いて評価・検討をすることを目的とし事前平均値(標準偏差)57.18±6.59点、事後63.06±6.51点と有意に得点が増加した(p<.01)。管理栄養士として育っていく本学学生に、このような小さな実学体験を通して地についた主体性・創造力を養成できればと思われる。(第22回日本健康教育学会発表)</p> <p>「管理栄養士養成課程学生における自己管理能力育成プログラムの実践」 (概要) 自らの体型に悩みがあり、管理栄養士となる学生が、自己管理能力育成プログラムを実践することで自らの行動変容の難しさを実感し、対象者の気持ちを楽しみ、質の高い栄養指導に繋がれることを目的とした。対象者は、本学寮生(18.4±0.52歳)、毎朝身体測定を行い、月に数回の自己管理能力育成プログラムを行い、プログラム前後に食生活アンケートを実施した。プログラム前後において、体重の平均値を検討した結果、10月1週目と11月1週目において有意に減少した(p<.05)。毎朝の身体測定、目標設定の記録を行うことで、自己管理能力が身に付き、また集団で実施することが意識を高めることに繋がり行動変容をし、持続することを促した。(第22回日本健康教育学会発表)</p> <p>「成熟トマト・未成熟トマトの機能性評価」 (概要) トマトを栽培する場合は、栽培途中に、間引きという作業を行うため、未成熟の青トマトや葉・茎等も廃棄物となる。成熟(赤)トマトおよび未成熟(青)トマトの各部位(蒂・果肉・外皮・葉・枝・根)の水抽出物、EtOH抽出物における機能性を評価し、廃棄物となる部分を有効活用する方法を探索することで、付加価値の高い新たな利用法を見出すことを目的とした。サンプルの抽出にあたっては、EtOH抽出物、水抽出</p>

	<p>物を調製し、抗酸化活性の測定には、ORAC法で行い、メラニン生成抑制活性の測定には、MTT法による細胞生存率、メラニン量の測定を行った。未使用、廃棄物である葉や青トマトに、抗酸化活性作用・メラニン生成抑制作用が検出されたため、今後、当該部分を用い、化粧水・美白化粧水等の付加価値の高い利用法の開発が期待される。(第60回栄養改善学会発表)</p>
	<p>「トマトの部位別におけるリパーゼ阻害活性の検討」 (概要) 成熟(赤)トマト、未成熟(青)トマトを部位別に分類しリパーゼ阻害活性試験を行うことで網羅的にトマトの未利用部分も含めた機能性評価を行った。成熟(赤)トマト、未成熟(青)トマトの各抽出物がリパーゼの活性へ与える影響を検討した結果、トマト(葉)のEtOH抽出物、トマト(茎)の水抽出物、青トマト(外皮)の水抽出物にリパーゼ活性が確認された(p<. 01)。リパーゼ活性が阻害されるような物質は、摂取エネルギーを低下させ、抗肥満効果を発揮する有効なアプローチの一つとして考えられ、トマトの未利用部位を含めた新規活用法の開発が期待される。(第60回日本栄養改善学会発表)</p>
	<p>「世界の一体化」をめぐる歴史叙述の試み —教科に関する科目(大学院)「スポーツ史演習」の教育実践—</p>
	<p>本学学生の食意識及び運動習慣 食生活については、国民健康・栄養調査の18~29歳の同世代と比較すると有意な差は認められなかったが、日本人の食事摂取基準と比較すると、推奨量並びに、目標量に達しておらず、管理栄養士、理学療法士、作業療法士を目指し国民の健康増進に携わる専門家としては、まず自らの食行動の見直しが課題となる。特に、心身ともに成熟期を迎える年齢時の「食と運動」の基本姿勢の「確立」はその後のライフスタイルに大きな影響を及ぼすことが考えられることから、この時期での正しい食習慣の形成を重要視しなければならない。</p>
	<p>【九州栄養福祉大学農園便りの編集】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「九州栄養福祉大学 農園便り」春季 第一号 ・「九州栄養福祉大学 農園便り」秋季 第二号 ・「九州栄養福祉大学 農園便り」冬季 特別号三号 ・「九州栄養福祉大学 農園便り」春季 第四号 ・「九州栄養福祉大学 農園便り」秋季 第五号 ・「九州栄養福祉大学 農園便り」冬季 第六号
主な社会活動	<ul style="list-style-type: none"> ・東筑紫学園高等学校野球部への栄養指導 ・福岡教育大学陸上部への栄養指導 ・東筑紫附属幼稚園への食育指導及び農園指導 ・だきしめ保育園保護者会講師 (平成26年4月) ・下関保育士研修会講師 (平成26年6月) ・北九州市スポーツ少年団指導者講習会講師 (平成29年1月)
所属学会	<ul style="list-style-type: none"> 日本栄養改善学会 (平成23年1月～現在に至る) 日本栄養士会 (平成23年4月～現在に至る) 日本スポーツ栄養学会 (平成25年4月～現在に至る) 日本リハビリテーション研究会 (平成24年4月～現在に至る) 日本健康教育学会 (平成25年4月～現在に至る)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	[食物栄養学部 食物栄養学科] ・ 実用英語の基礎Ⅰ、実用英語の基礎Ⅱ ・ 実用英語Ⅰ、実用英語Ⅱ ・ キャリアガイダンスⅡ ----- [リハビリテーション学部 理学療法学科・作業療法学科] ・ 実用英語の基礎Ⅰ、実用英語の基礎Ⅱ ----- [東筑紫短期大学 保育学科] ・ 英語Ⅰ、英語Ⅱ
専 門 分 野	■機械工学
最 終 学 歴	九州工業大学工学部 機械工学科卒
学 位	学士 (機械工学)
職 歴	晴明会館/美術館勤務 (昭和61年10月～平成2年4月) Shinkenko America Inc. 勤務 (法人立上り 於:アメリカ合衆国) (平成2年5月～平成24年11月) トライグループ/英語講師 (平成25年8月～平成29年3月) ECC/英語講師 (平成25年8月～平成29年3月) Berlitz/英語講師 (平成26年8月～平成29年3月) アルク教育社/英語講師 (平成28年7月～平成29年3月)
教育上の業績	○8つの口の形と8つの舌の位置により、ネイティブは英語の音をつくり出している。したがって、日本語では、使われていないこれらの動きを司る筋肉を反復練習し、訓練することにより、誰でも、ネイティブ並みの発音ができるようになる。そして、出せる音は、聞き取れるようになるので、リスニング力も飛躍的に向上する。以上の経験に基づいた信念のもと、使える英語・生きた英語の指導に尽力している。
主な社会活動	・ 職歴欄記載の企業からの業務委託により、以下の企業や学校で、英会話、TOEICの授業を行う。 福岡大学、九州大学、宇部高等専門学校 豊前東芝エレクトロニクス、安川電機、関西ペイント、岡部マイカ工業、CKK、豊通マシネリー、トヨタ、シスメット 等

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎化学 ・微生物学 ・食品衛生学 ・食品衛生学実験 ・食品学実験 I ・管理栄養士演習 I、管理栄養士演習 II <p>[リハビリテーション学部 理学療法学科・作業療法学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎化学
専門分野	<ul style="list-style-type: none"> ■微生物学 ■食品衛生学
最終学歴	川崎医療福祉大学大学院 博士後期課程 医療技術学研究所 健康科学専攻
学位	博士 (健康科学)
主な研究活動	<p>【論文】</p> <p>1.(修士論文)次亜塩素酸ナトリウムの黄色ブドウ球菌に対する抗菌効果ならびに作用機序に関する検討 (単著)</p> <p>(概要)</p> <p>次亜塩素酸ナトリウム(NaOCl)は一般的な消毒薬として頻用されているが、その抗菌作用機序についての詳細は不明である。そこで、NaOCl の黄色ブドウ球菌に対する抗菌効果について細菌学的に確認した上で、その抗菌作用機序について超微形態的さらには生化学的に追究した。その結果、NaOCl は黄色ブドウ球菌の染色体 DNA を分解して殺菌効果を惹起することが強く示唆され、NaOCl 処理菌体内で観察された凝縮像は染色体 DNA 分解に基づくことが考察できた。</p> <p>2.(博士論文)次亜塩素酸ナトリウムの抗黄色ブドウ球菌作用に関する研究 (単著)</p> <p>(概要)</p> <p>黄色ブドウ球菌は、ヒトの常在菌ではあるが、種々の感染症を引き起こすことが知られており、感染予防のため消毒薬による手洗いや器具の消毒が不可欠なこととなる。一方、次亜塩素酸ナトリウム(NaOCl)は一般的な消毒薬として頻用されているが、その抗菌作用機序についての詳細は不明である。本研究では、黄色ブドウ球菌が高いDNase 活性を有することに着目し、DNase 活性亢進に不可欠な Ca⁺⁺をキレートするエチレンジアミン四酢酸(EDTA)の NaOCl の抗菌作用に及ぼす影響について追究した。その結果、NaOCl の抗黄色ブドウ球菌効果は EDTA により抑制されることが明らかとなり、この NaOCl の抗菌抑制作用は、EDTA が NaOCl の染色体 DNA 障害作用を抑制することによることが考えられた。そのため、NaOCl は黄色ブドウ球菌の DNase 活性を亢進することにより抗黄色ブドウ球菌作用を惹起することが推測される。</p> <p>【学会発表】</p> <p>1. 次亜塩素酸ナトリウムの黄色ブドウ球菌に対する作用メカニズムに関する検討 氏峰菜里, 福辻賢治, 刀祢重信, 山田作夫 第57回 日本ブドウ球菌研究会 (平成24年9月)</p> <p>2. 次亜塩素酸ナトリウムの抗黄色ブドウ球菌作用メカニズムに関する検討 氏峰菜里, 福辻賢治, 刀祢重信, 山田作夫 第65回 日本細菌学会中国・四国支部総会 (平成24年10月)</p> <p>3. 次亜塩素酸ナトリウムの抗黄色ブドウ球菌作用メカニズムに関する検討 氏峰菜里, 福辻賢治, 山田作夫 第28回 日本環境感染学会総会 (平成25年3月)</p> <p>4. Sodium hypochlorite degrades chromosomal DNA of Staphylococcus aureus Shiori Ujimine, Kenji Fukutsuji, Shigenobu Tone, Sakuo Yamada 第86回 日本細菌学会総会 (平成25年3月)</p> <p>5. 超微形態解析による次亜塩素酸ナトリウムの抗黄色ブドウ球菌作用メカニズムの解明 氏峰菜里, 福辻賢治, 刀祢重信, 齊藤峰輝, 山田作夫 日本顕微鏡学会 第69回 学術講演会 (平成25年5月)</p>

	<p>6. Sodium hypochlorite degrades Staphylococcus aureus chromosomal DNA <u>Shiori Ujimine</u>, Kenji Fukutsuji, Shigenobu Tone, Mineki Saito, Sakuo Yamada The 28th International Congress of Chemotherapy (ICC) and Infection (平成 25 年 6 月)</p>
	<p>7. 黄色ブドウ球菌に対する次亜塩素酸ナトリウムの抗菌効果および作用機序 <u>氏峰菜里</u>, 福辻賢治, 刀祢重信, 齊藤峰輝, 山田作夫 第 34 回 日本食品微生物学会学術集会 (平成 25 年 10 月)</p>
	<p>8. 次亜塩素酸ナトリウムは黄色ブドウ球菌染色体 DNA を分解する <u>氏峰菜里</u>, 福辻賢治, 山田作夫 第 61 回 日本化学療法学会西日本支部総会 (平成 25 年 11 月)</p>
	<p>9. ポビドンヨードの抗黄色ブドウ球菌効果に関する検討 <u>氏峰菜里</u>, 葛西祐衣, 佐藤亜美, 今川未季子, 岡本あすか, 重政綾, 齊藤峰輝, 山田作夫 第 31 回 中国地区インフェクションフォーラム (平成 26 年 7 月)</p>
	<p>10. The mechanism of bactericidal action of sodium hypochlorite against Staphylococcus aureus <u>Shiori Ujimine</u>, Kenji Fukutsuji, Shigenobu Tone, Mineki Saito, Sakuo Yamada International Microscopy Congress (IMC) 2014 (平成 26 年 9 月)</p>
	<p>11. 二酸化塩素の抗黄色ブドウ球菌作用機序に関する検討 <u>氏峰菜里</u>, 山田作夫, 齊藤峰輝 第 62 回 日本化学療法学会西日本支部総会 (平成 26 年 10 月)</p>
所属学会	日本細菌学会 中国・四国支部会員 (平成 24 年～現在に至る) 一般社団法人 日本環境感染学会会員 (平成 24 年～現在に至る) 公益社団法人 日本顕微鏡学会会員 (平成 24 年～現在に至る) 日本食品微生物学会会員 (平成 24 年～現在に至る) 公益社団法人 日本化学療法学会 西日本支部会員 (平成 24 年～現在に至る) 川崎医療福祉学会 (平成 26 年～現在に至る) 日本臨床分子形態学会 (平成 29 年～現在に至る)
受賞歴	公益財団法人 風戸研究奨励会 国際会議発表渡航助成 (平成 26 年 9 月)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目 〔講義補助〕	[食物栄養学部 食物栄養学科] ・栄養士のための農園演習 ・疾病の成り立ちと病態 ・栄養福祉論
専 門 分 野	■管理栄養士養成
最 終 学 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
学 位	学士（食物栄養学）
職 歴	医療法人博愛会 穎田病院 (平成20年4月～平成21年3月) エームサービス西日本株式会社済生会飯塚嘉穂病院事業所 (平成21年8月～平成22年8月) 有限会社 ワイドエー (平成22年9月～平成25年9月) 医療法人康和会 介護老人保健施設和泉の澤 (平成25年10月～平成26年4月) 学校法人東筑紫学園 法人事務局総務課 (平成26年10月～平成27年11月) 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (平成27年12月～現在に至る)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科		
担 当 科 目 〔講義補助〕	[食物栄養学部 食物栄養学科] ・調理学実習Ⅰ、調理学実習Ⅱ ・料理特別実習Ⅱ（和料理）		
専 門 分 野	■管理栄養士養成		
最 終 学 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科		
学 位	学士（食物栄養学）		
職 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (平成27年4月～現在に至る)		
所 属 学 会	公益社団法人 日本栄養士会 (平成27年4月～現在に至る) 特定非営利活動法人 日本栄養改善学会 (平成27年4月～現在に至る)		

ヤツダ
 矢津田 みずほ YATSUDA Mizuho 助手

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目 〔講義補助〕	[食物栄養学部 食物栄養学科] ・食品基礎実験 ・食品学実験 I ・食品加工学実習 ・解剖生理学実習 ・料理特別実習Ⅲ (中華料理) ・管理栄養士演習 I、管理栄養士演習 II
専 門 分 野	■管理栄養士養成
最 終 学 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
学 位	学士 (食物栄養学)
職 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (平成 28 年 4 月～現在に至る)
所 属 学 会	公益社団法人 日本栄養士会 (平成 28 年 7 月～現在に至る) 特定非営利活動法人 日本栄養改善学会 (平成 28 年 7 月～現在に至る)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担 当 科 目 〔講義補助〕	[食物栄養学部 食物栄養学科] ・臨床栄養学実習 I ・臨地実習指導 (演習) ・料理特別実習 I (洋料理) ・管理栄養士演習 I	
専 門 分 野	■管理栄養士養成	
最 終 学 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
学 位	学士 (食物栄養学)	
職 歴	株式会社 ABC Cooking Studio	(平成 28 年 4 月～平成 29 年 1 月)
	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手	(平成 29 年 4 月～現在に至る)

パバ エリナ
馬場 絵莉奈 BABA Erina 助手

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目 〔講義補助〕	[食物栄養学部 食物栄養学科] ・調理学実習Ⅲ ・公衆栄養学実習 (学内)
専 門 分 野	■管理栄養士養成
最 終 学 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
学 位	学士 (食物栄養学)
職 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (平成 29 年 4 月～現在に至る)

シバタ マキ
柴田 真希

SHIBATA Maki 助手

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目 〔講義補助〕	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・給食管理実習 ・基礎栄養学実験 ・キャリアデザイン
専門分野	■管理栄養士養成
最終学歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
学位	学士（食物栄養学）
職歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (平成29年4月～現在に至る)